

遺跡 遺跡 遺跡
外 遺 遺
垣 爪 上 橋
堂 橋 藪 長

— 農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

遺 構 編

1994. 3

飯 田 市 教 育 委 員 会

堂^{どう} 垣^{がい} 外^と 遺 跡
橋^{はし} 爪^{づめ} 遺 跡
藪^{やぶ} 上^{うえ} 遺 跡
長^{なが} 橋^{はし} 遺 跡

— 農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

遺 構 編

1994. 3

飯 田 市 教 育 委 員 会

序

飯田市上郷は自然条件に恵まれ、また古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。これらは私たちの地域社会や文化を形作ってきたさまざまな証しであり、できる限り現状のままで後世に伝えることが私たちの責務でありましょう。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利もっています。ですから、日常生活のさまざまな場面で文化財の保護と開発という相入れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることも、やむを得ないものといえましょう。

長野県下伊那郡上郷町では、平成元年度から飯沼丹保地区で農村基盤総合整備事業（集落型）を実施することになりました。ほ場整備を行い、農業生産の高度化・機械化を図り、それによって生産性の向上を目指すもので、昨今の農業を取り巻く情勢を考慮するとき、地区の振興のためにぜひとも必要な事業といえましょう。しかし、丹保地区は上郷町有数の埋蔵文化財密集地帯であり、事業予定地内には堂垣外遺跡・丹保遺跡・橋爪遺跡・藪上遺跡・長橋遺跡が存在し、事業実施により壊されてしまう恐れができました。そこで、次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることになりました。また、平成5年7月には飯田市と上郷町の合併により、飯田市教育委員会が事業を引き継いで行うこととなりました。

発掘調査は長い期間かかり大規模なものとなりました。各遺跡それぞれに貴重な調査成果が得られました。とくに、律令時代の集落が見つかった堂垣外遺跡では、伊那郡衙と推定される恒川遺跡群との関係が目されるようです。また、弥生時代の墓と集落が発見された橋爪遺跡では、壺・甕を使った棺桶が残されていて、こうした例は少ないだけに貴重な資料といわれているようです。

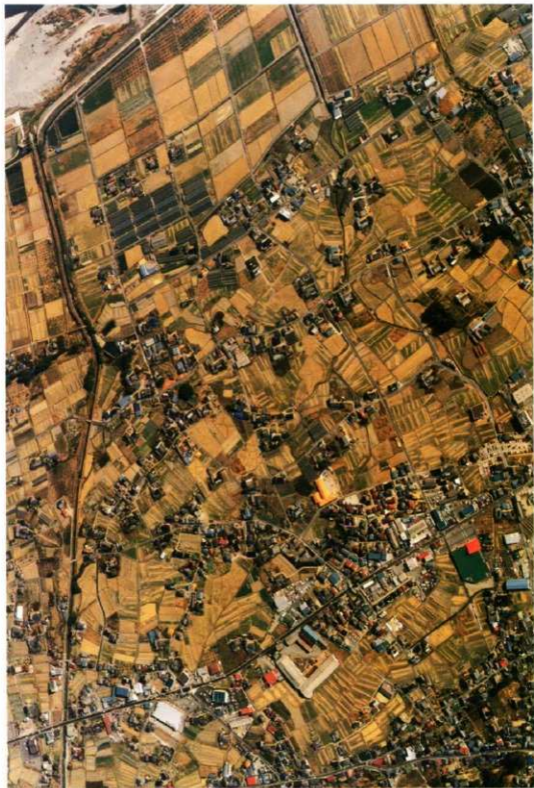
最後になりましたが、調査にあたり多大なご理解とご協力をいただいた地権者と隣接地の方々、現地作業および整理作業に従事された作業協力員の皆さんほか関係各位に深く感謝を申し上げますとともに、ここに発掘調査報告書が発刊できますことにたいして厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

飯田市教育委員会
教育長 小林恭之助

例 言

1. 本書は、農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区工事に伴う飯田市上郷飯沼「堂垣外遺跡・橋爪遺跡・藪上遺跡・長橋遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成元年から平成5年6月30日までは上郷町役場産業課からの委託を受け、上郷町教育委員会が、平成5年7月1日以降は飯田市農林部からの委託を受け飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成元年から平成4年度に現場作業を、平成4年度から平成5年度に整理作業および報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・航空測量・航空写真撮影・遺物写真撮影を調ジャステック、遺物実測用写真撮影を倂シン技術コンサルに委託した。
5. 遺跡の略号は以下の略号を発掘作業から整理作業まで一貫して使用した。
堂垣外遺跡……DUG 橋爪遺跡……HSZ 藪上遺跡……YBU 長橋遺跡……NGH
6. 本書は遺構編と写真図版編の2冊により構成されており、それぞれに目次がつく。
7. 本書はⅢ-1-6)②③④⑤⑥⑨・9)、Ⅲ-2・3・4を吉川金利が、それ以外を山下誠一が執筆した。なお、藪上遺跡2住居址の炭化材についてマリノ・サーヴェイ卿による分析結果を付編として掲載した。
8. 本書の作成に関わる図面の整理は山下・吉川・下平博行があたった。
9. 本書の編集は調査員の協議により山下・吉川が行った。
10. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字は、床面・検出面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
11. 本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上郷考古博物館で保管している。



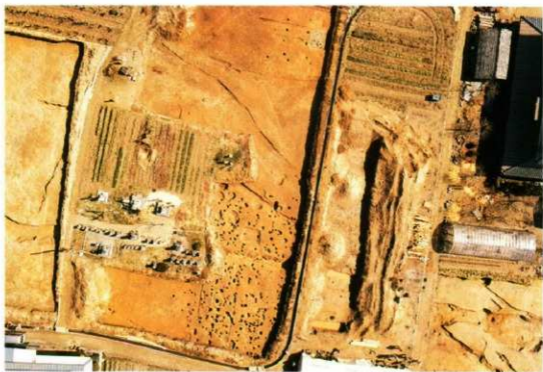
丹保地区全景



堂垣外遺跡 第Ⅱ・Ⅲ地区



堂垣外遺跡 第Ⅰ地区



堂垣外遺跡 第Ⅱ地区



堂垣外遺跡 第Ⅳ地区



堂垣外遺跡 第Ⅵ地区



堂垣外遺跡 第Ⅵ地区



堂垣外遺跡 第Ⅴ地区



堂垣外遺跡 第Ⅴ地区



堂垣外遺跡 第Ⅰ地区



堂垣外遺跡 第Ⅰ地区



堂垣外遺跡 第X地区



堂垣外遺跡 第X地区



橋爪遺跡 第Ⅱ・Ⅲ地区



橋爪遺跡 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区



堂垣外遺跡出土 二彩・三彩陶器



堂垣外遺跡出土 円面硯



堂垣外遺跡出土 帯金具

堂垣外遺跡出土 緑釉陶器



橋爪遺跡 方形周溝墓2 壺棺



橋爪遺跡 方形周溝墓2 甕棺

本文目次

序文	
例言	
I 経過	
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の方法	2
4. 調査組織	4
II 遺跡の立地と環境	6
1. 自然的環境	6
2. 歴史的環境	8
III 調査結果	13
1. 堂垣外遺跡	13
1) 第I地区	13
(1) 基本層序	13
(2) 掘立柱建物址	14
(3) 溝址	14
(4) 井戸址	19
(5) 柱穴	19
2) 第II地区	22
(1) 基本層序	22
(2) 掘立柱建物址	22
(3) 竪穴状遺構・小竪穴	25
(4) 溝址	27
(5) 土坑・柱穴	33
3) 第III地区	43
(1) 基本層序	43
(2) 溝址	43
4) 第IV地区	47
(1) 基本層序	47
(2) 溝址	47
(3) 柱穴・穴	57

(4) 土器棺墓	61
5) 第V地区	62
(1) 基本層序	62
6) 第VI地区	64
(1) 基本層序	64
(2) 豎穴住居址	64
(3) 掘立柱建物址	94
(4) 溝址	99
(5) 土坑·柱穴	106
(6) 粘土探掘坑	116
7) 第VII地区	119
(1) 基本層序	119
(2) 溝址	119
8) 第VIII地区	121
(1) 基本層序	121
(2) 豎穴住居址	121
(3) 掘立柱建物址	148
(4) 溝址	154
(5) 柱穴·土坑	163
9) 第IX地区	167
(1) 基本層序	167
(2) 豎穴住居址	167
(3) 豎穴狀遺構	181
(4) 掘立柱建物址	182
(5) 杭列	182
(6) 溝址	183
(7) 柱穴	187
10) 第X地区	189
(1) 基本層序	189
(2) 豎穴住居址	189
(3) 小豎穴	201
(4) 掘立柱建物址	201
(5) 溝址	205
(6) 槽列·柱穴	220

11) トレンチ	229
小結	230
2. 橋爪遺跡	235
1) 第Ⅰ地区	235
(1) 基本層序	235
(2) 竪穴住居址	235
(3) 方形周溝墓	236
(4) 土器集中区	240
(5) 柱穴	240
2) 第Ⅱ地区	241
(1) 基本層序	241
(2) 竪穴住居址	241
(3) 竪穴状遺構	241
(4) 方形周溝墓	245
(5) 溝址	247
(6) 土坑・柱穴	247
3) 第Ⅲ地区	254
(1) 基本層序	254
(2) 竪穴住居址	254
(3) 方形周溝墓	257
(4) 土坑・柱穴	257
4) 第Ⅳ地区	259
5) 第Ⅴ地区	259
(1) 基本層序	259
(2) 溝址	259
6) 第Ⅵ地区	261
7) Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチ	261
小結	263
3. 敷上遺跡	265
1) 第Ⅰ地区	265
(1) 竪穴住居址	265
(2) 土石流	266
2) トレンチ	268
小結	271

4. 長橋遺跡	273
小結	273
付 編	275
報告書抄録	281

挿 図 目 次

挿図1	大グリッド設定図及び発掘調査地区	3
挿図2	丹保地区位置図	7
挿図3	堂垣外・橋爪・葺上・長橋遺跡位置図及び周辺図	9・10
挿図4	DUG I基本土層図	14
挿図5	DUG I 掘立柱建物址 7	15
挿図6	DUG I 溝址 2、柱穴	16
挿図7	DUG I 溝址 3、井戸址 1	17
挿図8	DUG I 溝址 4、柱穴	18
挿図9	DUG I 柱穴 (1)	19
挿図10	DUG I 柱穴 (2)	20
挿図11	DUG I 柱穴 (3)	21
挿図12	DUG II基本土層図	22
挿図13	DUG II 掘立柱建物址 2、柱穴	23
挿図14	DUG II 掘立柱建物址 3	24
挿図15	DUG II 竪穴状遺構 1	25
挿図16	DUG II 竪穴状遺構 2	26
挿図17	DUG II 小竪穴 1	27
挿図18	DUG II 溝址 3	28
挿図19	DUG II 溝址 4	29
挿図20	DUG II 溝址 5	30
挿図21	DUG II 溝址 6、土坑37	31
挿図22	DUG II 溝址 7・8	32
挿図23	DUG II 土坑25・26・27・31、柱穴	36
挿図24	DUG II 土坑28・29、柱穴	37
挿図25	DUG II 土坑30・33・34、柱穴	38
挿図26	DUG II 土坑32・36・39、柱穴	39
挿図27	DUG II 土坑35、柱穴	40
挿図28	DUG II 柱穴	41
挿図29	DUG II 土坑38、柱穴	42
挿図30	DUG III基本土層図	43

挿図31	DUGⅢ溝址 3	44
挿図32	DUGⅢ溝址 9・10	46
挿図33	DUGⅣ基本土層図	47
挿図34	DUGⅣ溝址 3	48
挿図35	DUGⅣ溝址 3・19	49
挿図36	DUGⅣ溝址 3・13	50
挿図37	DUGⅣ溝址11・12	51
挿図38	DUGⅣ溝址14・17	52
挿図39	DUGⅣ溝址14	53
挿図40	DUGⅣ溝址15	55
挿図41	DUGⅣ溝址15・16・17・18	56
挿図42	DUGⅣ柱穴・穴 (1)	57
挿図43	DUGⅣ柱穴・穴 (2)	58
挿図44	DUGⅣ柱穴・穴 (3)	59
挿図45	DUGⅣ柱穴・穴 (4)	60
挿図46	DUGⅣ土器棺墓 1	61
挿図47	DUGⅤ基本土層図	62
挿図48	DUGⅤ全体図	63
挿図49	DUGⅤ基本土層図	64
挿図50	DUGⅥ 4号住居址	65
挿図51	DUGⅥ 8号住居址	66
挿図52	DUGⅥ 9号住居址	67
挿図53	DUGⅥ 9号住居址カマド	68
挿図54	DUGⅥ10号住居址	69
挿図55	DUGⅥ11号住居址	70
挿図56	DUGⅥ11号住居址カマド	71
挿図57	DUGⅥ12号住居址	72
挿図58	DUGⅥ12号住居址カマド	73
挿図59	DUGⅥ13号住居址	74
挿図60	DUGⅥ14号住居址	75
挿図61	DUGⅥ15号住居址	76
挿図62	DUGⅥ16号住居址	77
挿図63	DUGⅥ17号住居址	78
挿図64	DUGⅥ17号住居址カマド	79

挿図65	DUG VI18号住居址	81
挿図66	DUG VI19・20号住居址	82
挿図67	DUG VI19号住居址ハリ床下	83
挿図68	DUG VI19号住居址カマド	84
挿図69	DUG VI20号住居址カマド	85
挿図70	DUG VI21号住居址	86
挿図71	DUG VI22号住居址	86
挿図72	DUG VI23号住居址	87
挿図73	DUG VI23号住居址カマド	88
挿図74	DUG VI24号住居址	89
挿図75	DUG VI25号住居址	90
挿図76	DUG VI26・27号住居址	92
挿図77	DUG VI28号住居址	93
挿図78	DUG VI掘立柱建物址 4	95
挿図79	DUG VI掘立柱建物址 5	96
挿図80	DUG VI掘立柱建物址 6	97
挿図81	DUG VI掘立柱建物址 8	98
挿図82	DUG VI掘立柱建物址 9	99
挿図83	DUG VI掘立柱建物址10	100
挿図84	DUG VI掘立柱建物址11	101
挿図85	DUG VI溝址 1	102
挿図86	DUG VI溝址20	103
挿図87	DUG VI溝址21	104
挿図88	DUG VI溝址22	105
挿図89	DUG VI土坑40・41、柱穴	107
挿図90	DUG VI土坑42・43、柱穴	108
挿図91	DUG VI柱穴 (1)	109
挿図92	DUG VI柱穴 (2)	110
挿図93	DUG VI柱穴 (3)	111
挿図94	DUG VI柱穴 (4)	112
挿図95	DUG VI柱穴 (5)	113
挿図96	DUG VI柱穴 (6)	114
挿図97	DUG VI柱穴 (7)	115
挿図98	DUG VI柱穴 (8)	116

挿図99	DUGVI粘土探掘坑(1)	117
挿図100	DUGVI粘土探掘坑(2)	118
挿図101	DUGVII基本土層図	119
挿図102	DUGVII全体図	120
挿図103	DUGVII溝址56土層図	120
挿図104	DUGVII基本土層図	121
挿図105	DUGVII29号住居址	122
挿図106	DUGVII30号住居址カマド	123
挿図107	DUGVII30号住居址	124
挿図108	DUGVII31号住居址	125
挿図109	DUGVII31号住居址カマド	126
挿図110	DUGVII32号住居址	127
挿図111	DUGVII33号住居址	128
挿図112	DUGVII34号住居址	129
挿図113	DUGVII34号住居址カマド	130
挿図114	DUGVII35号住居址	131
挿図115	DUGVII36号住居址	132
挿図116	DUGVII37号住居址	133
挿図117	DUGVII37号住居址カマド	134
挿図118	DUGVII38号住居址	135
挿図119	DUGVII39号住居址	136
挿図120	DUGVII40号住居址、柱穴	137
挿図121	DUGVII41号住居址、柱穴	138
挿図122	DUGVII42号住居址	138
挿図123	DUGVII43号住居址	139
挿図124	DUGVII44号住居址	140
挿図125	DUGVII45号住居址	142
挿図126	DUGVII46号住居址	143
挿図127	DUGVII47・49号住居址	144
挿図128	DUGVII48号住居址	145
挿図129	DUGVII73号住居址	146
挿図130	DUGVII掘立柱建物址13	147
挿図131	DUGVII掘立柱建物址14	148
挿図132	DUGVII掘立柱建物址15	149

挿図133 DUGⅧ掘立柱建物址16	150
挿図134 DUGⅧ掘立柱建物址17	151
挿図135 DUGⅧ掘立柱建物址18	152
挿図136 DUGⅧ掘立柱建物址23	153
挿図137 DUGⅧ溝址 1・20	155
挿図138 DUGⅧ溝址22	156
挿図139 DUGⅧ溝址23・24・25・26・27・28・29	158
挿図140 DUGⅧ溝址23・24・25・26・27・28・29土層図	159
挿図141 DUGⅧ溝址30、柱穴	161
挿図142 DUGⅧ溝址31、柱穴	162
挿図143 DUGⅧ溝址32	163
挿図144 DUGⅧ土坑44・45、柱穴	164
挿図145 DUGⅧ柱穴(1)	165
挿図146 DUGⅧ柱穴(2)	166
挿図147 DUGⅨ基本土層図	167
挿図148 DUGⅨ50号住居址	168
挿図149 DUGⅨ50号住居址カマド	169
挿図150 DUGⅨ51号住居址	170
挿図151 DUGⅨ52号住居址	171
挿図152 DUGⅨ52号住居址焼土	172
挿図153 DUGⅨ53・55号住居址	173
挿図154 DUGⅨ53号住居址カマド	174
挿図155 DUGⅨ54号住居址	174
挿図156 DUGⅨ56・57号住居址	175
挿図157 DUGⅨ57号住居址カマド、焼土1・2	176
挿図158 DUGⅨ58号住居址	177
挿図159 DUGⅨ59・61号住居址	178
挿図160 DUGⅨ60号住居址	179
挿図161 DUGⅨ60号住居址カマド	180
挿図162 DUGⅨ70号住居址	181
挿図163 DUGⅨ竪穴状遺構 1	182
挿図164 DUGⅨ掘立柱建物址19	183
挿図165 DUGⅨ杭列 1	184
挿図166 DUGⅨ溝址20	185

挿図167 DUGⅨ溝址33・34	186
挿図168 DUGⅨ溝址55	187
挿図169 DUGⅨ柱穴	188
挿図170 DUGⅩ基本土層図	189
挿図171 DUGⅩ62号住居址	190
挿図172 DUGⅩ63号住居址	191
挿図173 DUGⅩ64・72号住居址	192
挿図174 DUGⅩ65号住居址	193
挿図175 DUGⅩ66号住居址カマド	194
挿図176 DUGⅩ66号住居址	195
挿図177 DUGⅩ67・68号住居址	197
挿図178 DUGⅩ69号住居址	198
挿図179 DUGⅩ72号住居址カマド	199
挿図180 DUGⅩ75号住居址	200
挿図181 DUGⅩ小整穴2	201
挿図182 DUGⅩ掘立柱建物址20	202
挿図183 DUGⅩ掘立柱建物址21	203
挿図184 DUGⅩ掘立柱建物址22	204
挿図185 DUGⅩ溝址23・36・37	206
挿図186 DUGⅩ溝址27・38・42	207
挿図187 DUGⅩ溝址35Ⅰトレンチ	208
挿図188 DUGⅩ溝址35Ⅱ・Ⅲトレンチ	209
挿図189 DUGⅩ溝址35Ⅳトレンチ	210
挿図190 DUGⅩ溝址39・40・41・42・43	212
挿図191 DUGⅩ溝址44	214
挿図192 DUGⅩ溝址45・46・47	216
挿図193 DUGⅩ溝址48、櫛列1・2	217
挿図194 DUGⅩ溝址49・50・51・52・53・54	219
挿図195 DUGⅩ柱穴(1)	221
挿図196 DUGⅩ柱穴(2)	222
挿図197 DUGⅩ柱穴(3)	223
挿図198 DUGⅩ柱穴(4)	224
挿図199 DUGⅩ柱穴(5)	225
挿図200 DUGⅩ柱穴(6)	226

挿図201 DUGX柱穴 (7)	227
挿図202 DUGX柱穴 (8)	228
挿図203 DUGI・II・IIIトレンチ	229
挿図204 HSZ I I号住居址	236
挿図205 HSZ I方形周溝墓1・2	237・238
挿図206 HSZ I方形周溝墓1、土器棺墓	239
挿図207 HSZ I土器集中区1・2	240
挿図208 HSZ II 4号住居址	242
挿図209 HSZ II 5号住居址	243
挿図210 HSZ II竪穴伏遺構1・2	244
挿図211 HSZ II方形周溝墓5	245
挿図212 HSZ II方形周溝墓4	246
挿図213 HSZ II方形周溝墓6	248
挿図214 HSZ II溝址1	249
挿図215 HSZ II土坑5・8・9・10、柱穴	250
挿図216 HSZ II土坑6・7・11、柱穴	251
挿図217 HSZ II柱穴 (1)	252
挿図218 HSZ II柱穴 (2)	253
挿図219 HSZ III 2号住居址	254
挿図220 HSZ III 3号住居址	255
挿図221 HSZ III方形周溝墓3・7、土坑4	256
挿図222 HSZ III土坑3	257
挿図223 HSZ III土坑1・2柱穴	258
挿図224 HSZ V溝址2土層図	260
挿図225 HSZ V全体図	260
挿図226 HSZ VI基本土層図	261
挿図227 HSZ VI全体図	261
挿図228 HSZ I・II・IIIトレンチ	262
挿図229 YBUI 1号住居址	266
挿図230 YBUI 2号住居址	267
挿図231 YBUI 2号住居址炭化材分布	268
挿図232 YBUI・II・III・IVトレンチ	269
挿図233 YBUI全体図	270
挿図234 NGHトレンチ配置図	274

Ⅰ 経 過

1. 調査に至るまで

昭和63年度において、上郷町飯沼丹保地区に農村基盤総合整備事業（集落型）が昭和64～68年度で施工されることが決定した。当該地域は上郷町有数の遺跡地帯で、一丁田・釜ノ口・ママ下・堂垣外・丹保・矢鋸・橋爪・長橋・藪上遺跡に工事範囲がかかることが明らかとなった。そこで、工事を実施する上郷町役場産業課と協議を重ね、昭和63年9月27日に長野県教育委員会文化課指導主事・上郷町役場産業課担当職員・上郷町教育委員会担当職員による保護協議を実施し、遺跡の一部が破壊されることが余儀なくなったために、事前に発掘調査を実施して記録保存を計ることとなった。なお、円滑な発掘調査の実施を計るため、「上郷町埋蔵文化財調査委員会」を組織することとした。

その後、事業規模や計画の変更等があり、その都度産業課と調整を重ねた。また、年度毎に県教育委員会文化課指導主事を加えた保護協議を実施し、その結果一丁田・釜ノ口・矢鋸遺跡が調査対象から除外されることとなった。

そして、平成5年7月1日に、飯田市と上郷町の市町合併が行われ、飯田市教育委員会が事業を引き継いで実施することとなった。なお、年度毎の保護対象遺跡は以下のとおりである。

平成元年度…藪上遺跡・堂垣外遺跡の発掘調査

平成2年度…堂垣外遺跡・橋爪遺跡の発掘調査

平成3年度…丹保遺跡・長橋遺跡・橋爪遺跡の発掘調査

平成4年度…堂垣外遺跡の発掘調査、藪上遺跡の整理作業、丹保遺跡の整理・報告書刊行

平成5年度…堂垣外遺跡・橋爪遺跡・長橋遺跡の整理・報告書刊行、藪上遺跡の報告書刊行

2. 調査の経過

平成元年度 平成元年10月5日に重機を使って堂垣外遺跡第Ⅰ地区の拡張から開始し、並行して作業協力員の協力を得て調査を始めた。調査区が狭いために3日間という短期間で終了した。

平成元年10月9日に藪上遺跡第Ⅰ地区の調査を開始した。沖積地のため遺構検出面の把握が困難であったが順次調査を済ませ、また第Ⅰ～Ⅵトレンチを設定して周辺地域の状況を確認して、12月25日に藪上遺跡におけるすべての作業を終了した。その間、12月10日に現地見学会を実施したところ、約60名の参加があった。

12月1日に重機を使ってトレンチを設定し、遺構が確認できる箇所は拡張して堂垣外遺跡第Ⅱ

・Ⅲ地区とし、12月6日から第Ⅱ地区の調査を開始した。順次第Ⅳ・Ⅴ地区と調査を済ませ、第Ⅵ地区を拡張して一部の調査を実施し、平成2年3月30日に平成元年度の作業が終了した。

平成2年度 平成2年4月24日に堂垣外遺跡第Ⅵ地区の調査から開始した。遺構・遺物が多出したが、8月20日までにカマドの断ち割り調査を除いたすべての作業が終了した。その間7月31日から8月2日の間に、耕作の関係で残っていた第Ⅳ地区南部の調査を済ませた。

8月17日から重機を使って橋爪遺跡第Ⅰ地区の拡張を開始し、8月20日に堂垣外遺跡から移動して作業協力員の協力で調査を開始した。8月31日までに、第Ⅰ～Ⅲトレンチを含めてすべての作業を終了し、耕作が終了する10月まで中断することとなった。耕作が終了した10月15日に、重機を導入し作業協力員の協力を得て、橋爪遺跡第Ⅱ地区の調査を開始し、11月21日までに第Ⅲ～Ⅵ地区・第Ⅳ～Ⅹトレンチを含めて橋爪遺跡におけるすべての作業が終了した。

11月7日に調査の主体を橋爪遺跡から移動し、堂垣外遺跡第Ⅷ地区の調査を開始し、順次堂垣外遺跡第Ⅸ・Ⅹ地区と調査を済ませ、平成3年3月30日にはすべての作業が終了した。

その間、平成5年8月18日に堂垣外遺跡第Ⅵ地区、12月23日に堂垣外遺跡第Ⅷ地区の現地見学会を実施し、合計120名の参加があった。

平成3年度 平成3年4月23日から重機を導入して長橋遺跡のトレンチを設定し、4月25日に作業協力員の協力を得て調査を開始する。遺構・遺物がほとんどなく、拡張しての調査が不要と判断できたので、測量をのぞいた調査は4月26日に終了した。引き続き橋爪遺跡の第Ⅹトレンチの調査を4月30日の1日で済ませ、本報告書に関わる調査は終了した。

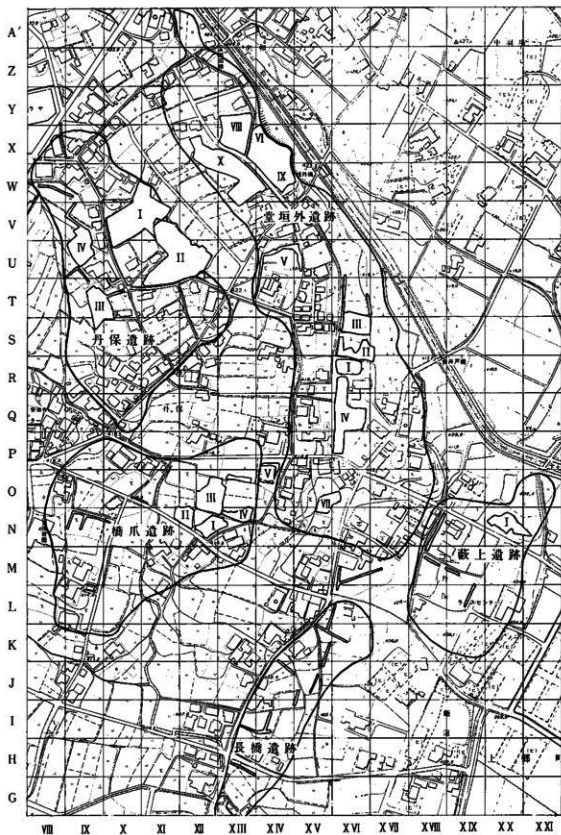
平成4年度 平成4年6月28日に堂垣外遺跡第Ⅷ地区の竹藪の片付けを行い、7月1日に重機を導入し作業協力員の協力を得て調査を開始する。7月8日までにすべての作業が終了する。

11月24日から敷上遺跡の遺物整理を行い、平成5年1月25日までに、遺物洗浄・注記・復元の作業を行った。

平成5年度 平成5年4月6日から橋爪遺跡の遺物の洗浄作業を開始し、平成6年2月9日までに堂垣外遺跡を含めて遺物の復元等を行い、並行して各遺跡の図面の整理を実施し、2月に遺構トレースを済ませて、本報告書刊行となった。

3. 調査の方法

農村基盤整備事業（集落型）丹保地区工事に関わる遺跡は、複数にわたりかつ広大な面積に及んでおり、総合的に調査する必要がある。そこで、丹保地区全体に国家座標軸第Ⅷ系を使って50m四方の大グリットを設定し、その中に2m四方の小グリットをおとして、調査測量に当たることとした。大グリットの南北方向はアルファベットの英文字、東西方向をローマ数字を使い、小グリットの南北方向はアルファベットの小文字のa～y、東西方向は算用数字の1～25を使って表すこととした。また、重機やベルトコンベアーを使ってできるだけ効率的な調査を行った。



挿図 1 大グリッド設定図及び発掘調査地区

4. 調査組織

① 上郷町埋蔵文化財調査委員会（昭和62年4月～平成5年6月）

顧問	山田 隆士（町長）		
会長	小室 伊作（教育委員会委員長 ~3.4）	北原 勝（同左 3.6~）	
副会長	中田 裕康（産業林務常任委員長 ~3.3）	横田 昭男（同左 3.4~）	
	牧野 光弥（文化財保護委員長）		
委員	北原 勝（教育委員 ~3.5）	麦島 正吉（文化財保護委員）	
	井浦 汪（教育委員 3.6~）	小木曾英寿（同上）	
	矢崎 和子（同上）	菊本 正義（同上）	
	北原政治郎（同上）	稲垣 隆（同上）	
	吉川 昭文（教育委員会教育長）	篠木 俊寛（建設常任委員長 ~3.4）	
	中田 裕康（建設常任委員長 3.5~）	岡田 道人（丹保地区）	
	今村 善興（日本考古学協会員）	野口 兼昭（同上）	
	佐藤 甍信（同上）	岡田 勇雄（同上）	
	岡田 正彦（同上）		
事務局員	吉川 昭文（教育委員会教育長）	北原 克司（産業課課長 ~2.3）	
	林 慶一（同上 事務局長）	菅沼 広二（同上 ~3.3）	
	吉川 勝一（同上 社会教育課長）	池田 丈夫（同上 3.4~）	
	山下 誠一（同上 社会教育係）	中園 紘（同上 課長補佐）	
	吉川 金利（同上）	井上 弘司（同上 工務係長）	
	下島 美和（同上 ~3.3）	小室 勇治（同上 主事）	
	牧内 功（同上 4.4~）	角池 紀子（教育委員会主査 3.4~）	
	下平 博行（同上 5.4~）		

② 飯田市教育委員会（平成5年7月~）

安野 節（社会教育課長）	原田 吉樹（社会教育課文化係長）
岡田 茂子（社会教育課社会教育係）	小林 正春（社会教育課文化係）
吉川 豊（社会教育課文化係）	山下 誠一（同上）
馬場 保之（同上）	吉川 金利（同上）
渋谷恵美子（同上）	福沢 好晃（同上）
下平 博行（同上）	

③ 調査団

調査担当者	山下 誠一											
調査主任	吉川 金利											
調査員	下平 博行			伊藤 泉 (梓川高等学校教諭)				桜下 光男 (飯田高等学校教諭)				
調査補助員	市瀬 慎子											
作業協力員	新井 幸子	池田 一夫	池戸 大八	井坪 芳一	伊藤 愛子	伊藤 千代	伊藤 秀代	伊藤 実美	市岡いく子	市岡 喜里	今村 俱栄	岩崎由紀子
	太田 沢男	岡島 亘	岡田 勇雄	岡田 栄子	岡田 金持	岡田 匡平	岡田健一郎	岡田 言康	岡田 幸	岡田 里美	岡田 順子	岡田 順治
	岡田 泰治	岡田 多助	岡田 千文	岡田 勉	岡田とみ子	岡田 正人	岡田 昌伸	岡田美津子	岡田やえ子	岡田 安浩	岡田 美明	岡田 喜雄
	岡田 美子	岡田 米蔵	岡田 紀子	岡田 道人	岡田 松宣	岡田 清平	岡田 博光	岡田 公一	大原 久和	大島 秀子	川尻 英人	上沼 文代
	上沼さちこ	上沼美代子	上沼 泰子	川上 一子	北林 覚男	北側 陸	北原久美子	北原 すい	北原 裕子	北原 与市	木下喜代恵	久保田祐子
	桑原かほる	榑原 秀之	榑原 正彦	小西 広司	小西 弘之	小西 誠	小林百合子	小林 馨	小平 静男	小平 幸雄	桜井 峯子	佐々木喜代
	佐々木 啓	酒井 春子	塩沢 定美	篠田せい子	篠田 豊治	下井 正俊	下井 清美	下沢 貞満	下沢 敏文	下沢志げる	下平 脩二	菅沼 庄三
	杉田 孝史	末元 勝義	杉戸 重義	瀬古 郁保	竹内 博男	竹村 一二	田中さち子	田中 弘	田中 吉秋	田平 秀人	寺平 崇	中島 銀
	中島 潤子	中島 みね	中原 友江	中山 邦子	西山あい子	野口 章人	野口 兼昭	野牧 安美	原 祐三	原 礼三	林 貢	林 初美
	早川さち子	早川 洋子	広瀬しず子	樋本 宣子	福沢トシ子	福田 千八	古井 純男	古林登志子	古林 清志	藤本 精一	前沢江里子	松下 光利
	松沢美和子	正木実恵子	松沢 晃好	松田紀美子	松田 博恵	松岡 武文	松島 宣明	宮沢 由充	宮沢紀美子	宮沢 サチ	宮沢 よね	宮沢 利男
	宮脇 直人	水落佳代子	壬生 一雄	壬生 順子	麦島 孝男	麦島きよの	村沢千代江	矢沢 善雄	矢花喜代子	山田 恵	吉川 佐一	吉川 正美
	吉川なみえ	吉川紀美子	吉川 恒男	吉川 聖	吉川 金治	吉川 精一	吉川多恵子	吉川 武司	吉川多勢子	吉川 敏博	吉川 敏寛	吉川 智明
	吉川ひで子	吉川 浩之	吉川美佐子	吉川 道男	吉川陸一郎	若松富美子						

II 遺跡の立地と環境

1. 自然的環境

堂垣外遺跡・橋爪遺跡・藪上遺跡・長橋遺跡の所在する長野県飯田市上郷は、長野県の南端を南北に走行する南・中央アルプスの谷間に広がる飯田盆地の中央に位置する。上郷を象徴する野底山が北西にあり、ここを源として清流野底川と土曾川が南流して飯田松川と天竜川に注いでいる。上郷の東側には天竜川を境として喬木村が、西は野底川をはさんで飯田市街地が、南は飯田松川を境として飯田市松尾が、北は土曾川によって高森町と飯田市座光寺がそれぞれ隣接する。面積は約26km²で、東西に細長い緩傾斜の地域である。一帯は諏訪湖に源を発して南流する天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至る人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として、高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱの五段階に編年されている。上郷の地形の特徴として、地区中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱとがみられる。その段丘崖の比高差は約50mあり、前者には黒田地帯が、後者には別府・飯沼地帯がある。低位段丘Ⅱ地帯は天竜川の現河床面海拔398 mとの比高差30～3 mを測り、大段丘崖下を中心に湧水や地下水が豊富である。そのため、かつての沼沢となっていた凹地は、現在では典型的な水田地帯となっている。この段丘中央部を国道153号線が、突端部を農免道路が南北に走行する。ちなみに、低位段丘Ⅱ地帯は三大別でき、天竜川現河床面に近い海拔398～405mの南条面、それから一段高い海拔407～418mの別府面、さらに上段の飯沼面に細別される。

堂垣外遺跡・橋爪遺跡・藪上遺跡・長橋遺跡は飯田市上郷飯沼丹保地区に所在し、堂垣外遺跡・橋爪遺跡は低位段丘Ⅱ飯沼面、藪上遺跡は低位段丘Ⅱ南条面、長橋遺跡は低位段丘Ⅱ別府面に立地する。堂垣外遺跡は土曾川に沿う細長い微高地上に立地し、南側は窪地となっている。橋爪遺跡は周囲を湿地帯で囲まれた微高地上に立地する。藪上遺跡は堂垣外遺跡の東側に位置し、北側が土曾川・東側が天竜川の氾濫原となり、飯田・下伊那のなかでも天竜川との比高差が少ない遺跡の一つである。長橋遺跡は南条面と別府面を分ける段丘上に細長く立地しており、南東側は全面広範囲の湿地帯となる。それぞれの遺跡は湿地帯等で隔てられてはいるが近接しており、密接な関連を持っている。その地目は水田が主で、宅地化された箇所も多い。

洪水などの自然災害の危険があるとはいえ、生産地や湧水などの生活条件に恵まれ、人々が生活するのに都合よい自然条件といえる。

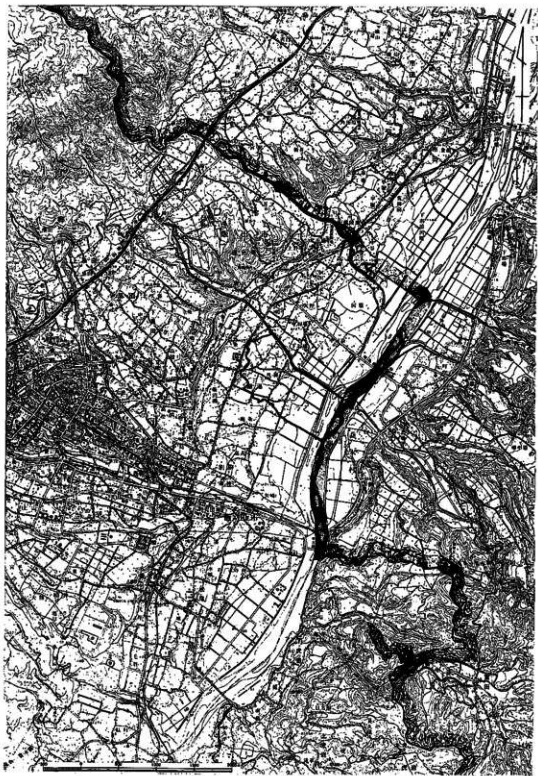


插图2 丹保地区位置图

2. 歴史的環境

飯田市上郷の遺跡調査は、大正13年鳥居龍藏博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂する際、市村成人氏と郡下一帯を調査したのを端緒とする。現在の上郷の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査により明確にされたもので、一般遺跡69カ所・古墳32基・中世城跡3カ所の合計104遺跡が登録され、平成元年3月に古墳4基が追加された。一般遺跡を時代別に区分すると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。

まず上郷の歴史的変遷を概観してみると、旧石器時代の遺構・遺物は現在のところない。上郷最古の文化は、上段の姫宮遺跡出土の表裏縄文土器片と、同じく柏原A遺跡出土の石器剥片とにより、縄文時代草創期からその黎明を知ることができる。次の縄文時代早期になると比較的山寄りの八王子遺跡など5遺跡から、押型文土器や繊維を含む条痕文及び燃糸文土器が出土しており、平成元年1月の西浦遺跡の町道新設に伴う調査において押型文の住居址が検出されている。約6000年前の縄文時代前期の遺跡は姫宮・日影林・大明神原など8遺跡があるが、いずれも上段の中位段丘と低位段丘Ⅰ地帯であり、下段の飯沼・別府地域からの発見がなく、未だ沖積地帯への進出はなかったと考えられていたが、町道改良による矢崎遺跡の発掘調査において前期後半の竪穴住居址が検出されており（上郷町教育委員会1989B）、見直しが必要となった。しかし、次の縄文時代中期になると、低位段丘Ⅱ地帯の南条面下段を除き、全地区に遺物の散布が目立ち、人々の生活の舞台の広がりを示している。特に中期の遺跡49カ所中、栗屋元・大明神原遺跡は重要遺跡である。この後に続く約4000～3000年前の縄文時代後期には遺跡は極端に減少し、上段を中心にして8遺跡が判明している。さらに、最終末の縄文時代晩期の遺跡は3カ所が知られていたが、近年矢崎遺跡より該期土器片が多量に発見され（上郷町教育委員会1988）、弥生時代の始まりとも関連して、その出土意義が注目されている。

次の弥生時代は水稻栽培を経済基盤とする新文化であり、下伊那地方へは美濃・尾張・三河地方から東漸したものと推定される。弥生時代前期の遺物は少なく、中期に至って遺跡数が増える。特に、南条面に立地する棚田遺跡は、県下初の弥生時代の水田址が発見されたことで有名である（上郷町教育委員会1987）。また、該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍に集中することから、低位段丘Ⅱ地帯にみられた湿地帯を利用しての水稻耕作の展開が類推されている。約1800年前の弥生時代後期になると、その遺跡は山麓地帯から天竜川氾濫原に至る間に44カ所あり、高燥段丘上での陸耕と稲作が考えられる。その代表的なものが、住居址43軒を検出した高松原遺跡（飯田高等学校1977・上郷町教育委員会1984）と木炭棺などの新知見を提供した垣外遺跡（上郷町教育委員会1989A）である。

古墳時代は集落址と墓域に区別される。上郷の古墳は煙藏古墳を含めて36基で、その大部分は



神圖3 臺上外・八木・臺上・成精湖附近地圖及比南辺圖

別府地籍の台地端に立地するが、いずれも後期古墳であり、天神塚と番神塚の両前方後円墳以外は全て円墳である。当時の集落は古墳の近在にみられ、現在のところ上段がなく、下段の経済的基盤の豊かな地域に発見されている。代表的な集落として、古墳時代の前期及び後期の土師器が出土した雨条の藪越遺跡（上郷町教育委員会1991）と飯沼北の的場遺跡がある。また、矢崎遺跡内には煙滅した鳥屋場古墳と久保古墳があり、当該期の土師器や須恵器が周辺一帯から発見されている。

次の奈良・平安時代の遺物は全地区内に散布しているが、下段地帯の栗沢川・土曾川の右岸に所在する高屋・堂垣外遺跡には多量の須恵器片がみられる。また、昭和62年度に調査した矢崎遺跡は平安時代の大集落址で、大規模な鍛冶遺構の検出とフイゴ羽口や鉄滓等の多量の出土遺物により（上郷町教育委員会1988）、上郷町の重要遺跡となった。この低位段丘Ⅱ地帯は、伊那郡衙と推定される飯田市座光寺の恒川遺跡群と同一段丘面上にあり、しかも古代条里制遺構の存在が地割と地名から推測される地帯であり、古代史研究上注目すべき地域である。また、海拔410mラインは郡と国府を結ぶ官道東山道の通過候補地であり、製鉄史研究者の注目の的となっている。この地方は『和名抄』、『伊呂波字類抄』等の文献から、古代伊那郡五郷のひとつである麻績郷に所属し、平安時代末期には近衛家領の郡戸庄であった。

なお、堂垣外遺跡は昭和58年、橋爪遺跡は昭和62年に、町道新設・改良に先立ち発掘調査が実施されており（上郷町教員委員会1983・上郷町教員委員会1990）、これを第Ⅰ次調査とする。本報告書の対象を第Ⅱ次調査とする。



III 調査結果

1. 堂垣外遺跡

堂垣外遺跡では第Ⅰ～Ⅹ地区と第Ⅰ～Ⅲトレンチの調査を実施した。調査面積と検出した遺構は以下のとおりである。

第Ⅰ地区	439㎡、掘立柱建物址1棟、溝址・溝状遺構3本、柱穴
第Ⅱ地区	906㎡、掘立柱建物址2棟・竪穴状遺構2軒・小竪穴1軒・溝址6本・土坑15基・柱穴
第Ⅲ地区	948㎡、溝址3本
第Ⅳ地区	3,344㎡、溝址10本・土器棺墓1・柱穴・穴
第Ⅴ地区	444㎡、調査遺構なし
第Ⅵ地区	2,015㎡、竪穴住居址22軒・掘立柱建物址7棟・溝址4本・土坑4基・柱穴・粘土探掘坑
第Ⅶ地区	551㎡、溝址1本
第Ⅷ地区	1,726㎡、竪穴住居址17軒・掘立柱建物址7棟・溝址13本・土坑2基・柱穴
第Ⅸ地区	1,056㎡、竪穴住居址12軒・掘立柱建物址1棟・小竪穴1基・溝址3本・杭列1本・柱穴
第Ⅹ地区	3,230㎡、竪穴住居址10軒・掘立柱建物址3棟・小竪穴1基・溝址20本・柵列2本・柱穴
第Ⅰトレンチ	68㎡、調査遺構なし
第Ⅱトレンチ	34㎡、調査遺構なし
第Ⅲトレンチ	66㎡、調査遺構なし

1) 第Ⅰ地区

(1) 基本層序

溝址3東側の南に面する壁面で作成した。

1層：暗灰褐色土、畑の耕土である。

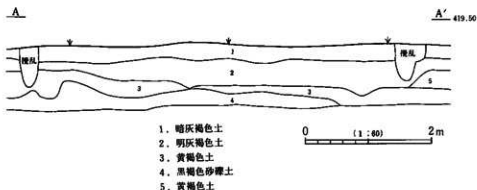
2層：明灰褐色土

3層：黄褐色土

4層：黒褐色砂礫土

5層：黄褐色土

遺構検出面は3・4層下の黄色土であり、遺構検出はやや困難であった。5層の黄褐色土は洪水による堆積と考えられ、第IV地区にも広がっていた。



挿図4 DUG I 基本土層図

(2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址7（挿図5）

XIV R13qを中心にして検出し、全体を調査した。1×3間の掘立柱建物址で、桁行7.2m・梁行4.9mを測る。柱間は桁行2.4m・梁行4.9mを測り、桁行方向はN76°Wを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形で、径27～14cm・深さ27～14cmを測る。

時期の決め手となる遺物に欠けるが、周辺の状況からすれば中世に位置づくと考えられる。

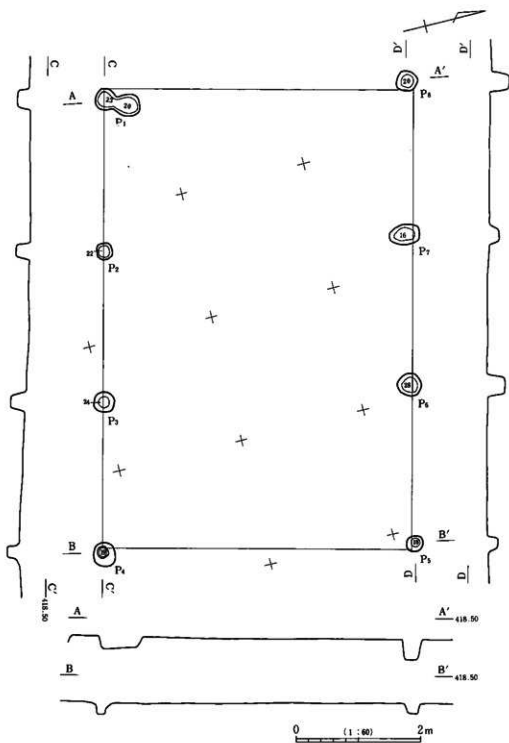
(3) 溝 址

② 溝址2（挿図6）

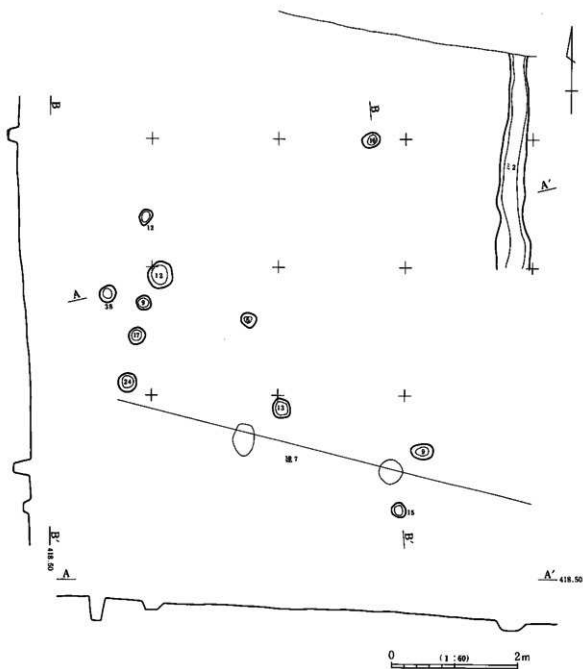
XIV R14sからXIV R14vにかけて検出した。調査延長は4.3mで、両側に連続すると考えられるが、南側では調査時期の違いで検出面をやや深く掘り下げてしまったことがあって検出できなかった。方向はほぼ直線的で、N1°Eを示す。幅56～24cm・深さ15～10cmを測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は砂が主体となっており、一時的な小川の痕跡と考えられる。

出土遺物は古墳時代の土師器・須恵器蓋坏、打製石斧がある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



挿図5 DUG I 獨立柱建物址 7



DUG I 溝址2、柱穴

② 溝址3 (挿図7)

INR60からINR8vにかけて
 検出した。調査延長は14.4mで、
 第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地区に連続する。
 方向はほぼ直線的で、N18° E
 を示す。幅2.7~1.2m・深さ77
 ~60cmを測り、断面形は基本的に
 逆台形を呈し、えぐれて段をな
 す箇所が認められる。覆土は砂が
 主体となっており、複雑な堆積
 をなしており、長期間水が流れ
 たことを示している。

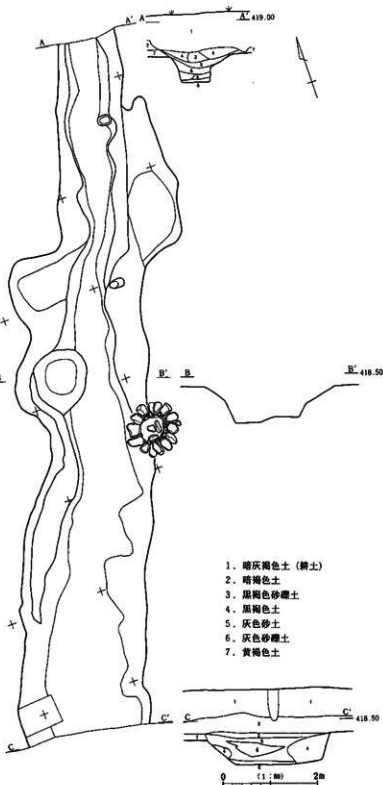
出土遺物少なく、土師器坏
 青磁片がある。

本址位置づけは第Ⅳ地区の溝
 址3の記述の中で行う。

③ 溝址4 (挿図8)

INR9tからINR10vにかけて
 検出した。調査延長は4.6mで、
 両側に延長するかは不明である。
 方向はほぼ直線的で、N35° E
 を示す。幅53~10cm・深さ17~
 7cmを測り、断面形は逆台形を
 呈する。本址を検出した層位が
 やや深かったこともあって両側
 に延長はしていないが、第Ⅱ地
 区の溝址4から連続していると
 考えられる。いわば、底に近い
 部分を把握したことになる。

遺物の出土はない。



挿図7 DUG I 溝址3、井戸址1

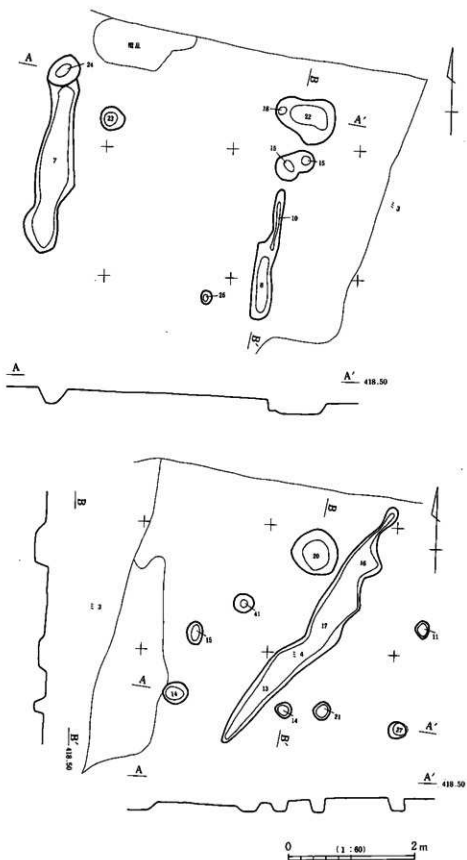


插图8 DUG I 溝址4、柱穴

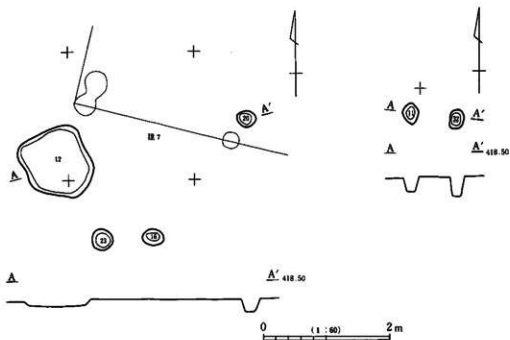
(4) 井戸址

① 井戸址 1 (挿図 7)

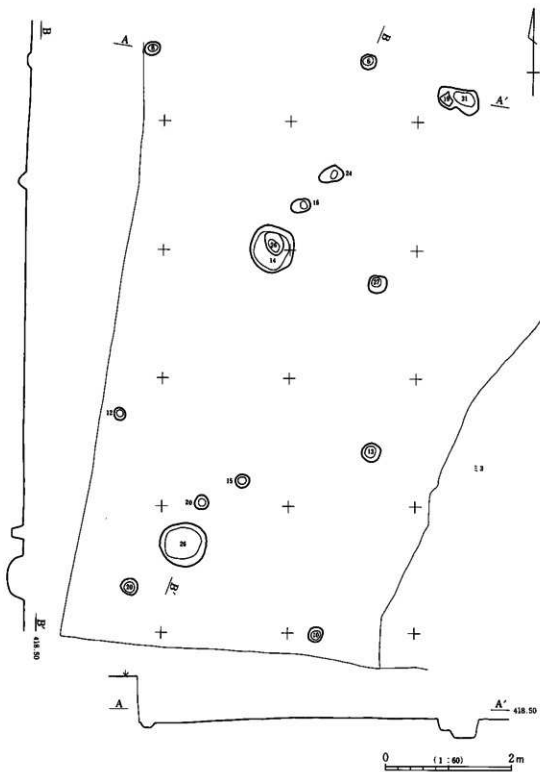
ⅩR8rで検出し、古墳時代前期の溝址 3 を切る。30cm前後の石を直径110cmの円形に組んで、内径は50cmを測る。石組は6段まで組まれているのは確認したが、それ以上掘り下げたの調査は行わなかった。中は土と石で埋められていた。

(5) 柱 穴

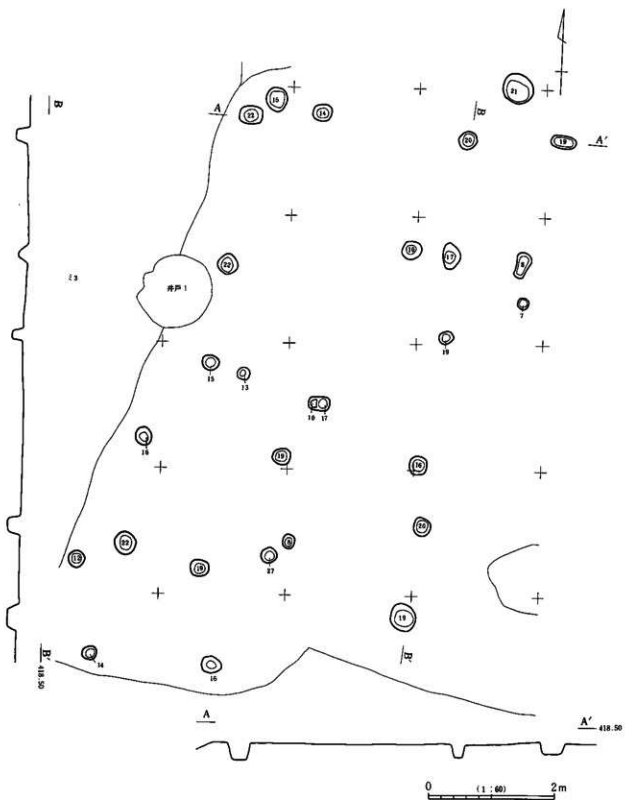
掘立柱建物址 7 で把握できた柱掘り方以外にも、掘立柱建物址の柱穴と考えられる穴が認められる。掘立柱建物址として把握することはできなかったが、挿図 6・8・9・10・11 で示した。中央部から西側にかけて集中し、東側ではほとんど認められない。検出面が少し深かったこともあり、把握できなかった穴の存在も考慮にいれる必要がある。径30~20cmの円形を呈し、深さ20~10cm前後を測る穴が多い。



挿図 9 DUG I 柱穴(1)



挿図10 DUG I 柱穴(2)



挿図11 DUG I 柱穴(3)

2) 第II地区

(1) 基本層序

東部壁穴状遺構1西側の南に面する壁面と、西部溝址3東側の南に面する壁面で示した。

1層：灰褐色土、畑の耕土である。

2層：明灰褐色土

3層：暗灰褐色土

4層：暗灰褐色砂礫土

5層：暗褐色土

6層：黄褐色土

遺構検出面は5・6層下の黄色土であり、西部の方が黄味が強かったが、いずれにせよ、遺構検出は容易であった。



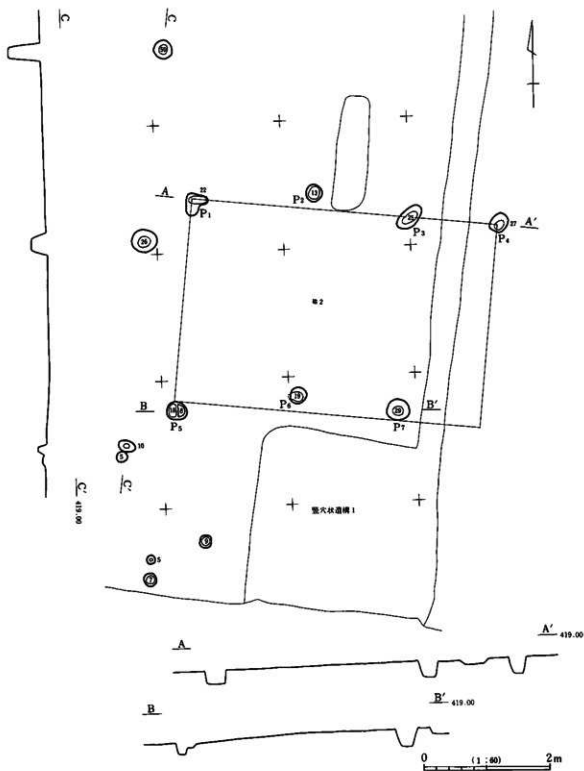
挿図12 DUG I 基本土層図

(2) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址2 (挿図13)

XWR25xを中心にして検出し、全体を調査した。1×3間の掘立柱建物址で、桁行4.8m・梁行3.2mを測る。柱間は桁行1.9・1.5m、梁行4.9mを測り、桁行方向はN83°Wを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形で、径34~25cm・深さ29~13cmを測る。南東端の柱穴は未検出で、P2・P6の位置が若干北側にずれる。

時期の決め手となる遺物に欠ける。



挿圖13 DUG II 獨立柱建物址2、柱穴

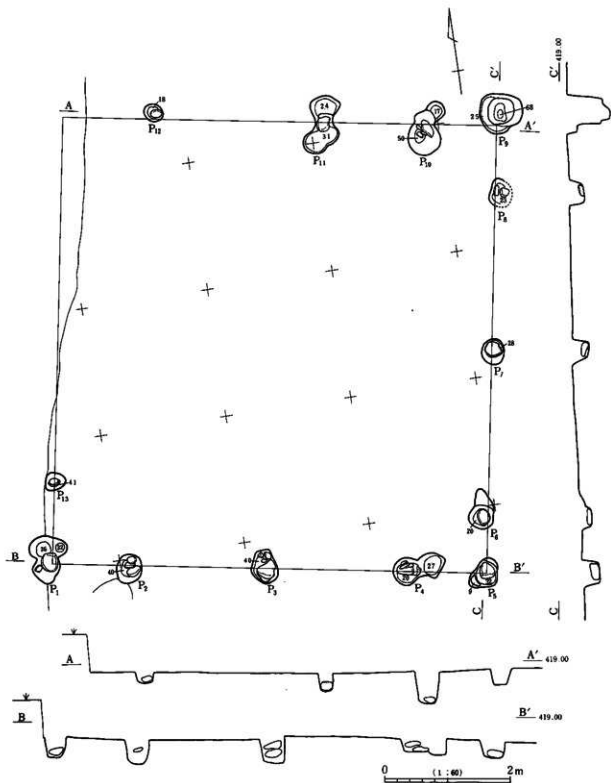


插图14 DUG II 掘立柱建物址3

② 掘立柱建物址3 (挿図14)

ⅨS4cを中心に検出した。西側が水路により未調査となり、3本の柱穴が調査できなかった。4×4間の掘立柱建物址で、桁行7.0m・梁行6.8mを測る。柱間は桁行2.6・2.2・1.8・1.2m、梁行2.6・2.4・1.2・1.0mを測り、桁行方向はN10° Eを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形で径54~28cmを測り、他の穴と重複するためか変形のもの認められる。柱掘り方の底に礎石があり、P9は新しいと考えられ、石が抜かれた可能性が高い。

遺物の出土はほとんどないが、周辺状況からみれば中世に位置づく。

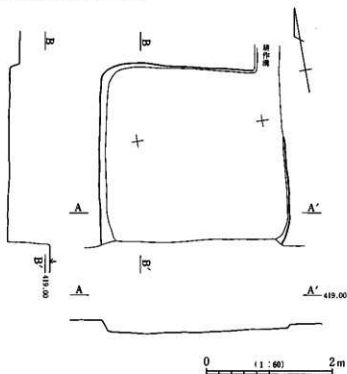
(3) 竪穴状遺構・小竪穴

① 竪穴状遺構1 (挿図15)

ⅨR25vを中心に検出し、両側が一部調査できなかった。耕作の溝に切られる。東西方向の長さが3.0mを測り、東西方向の長さは2.8mと推定できる。壁高は19~8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全面砂利が敷いてあり、炭が床面上に分布する。

出土遺物は近世~近代の陶磁器片6点・土師器片6点・瓦片1点、鉄器がある。

出土遺物から近世以降に位置づけられる。



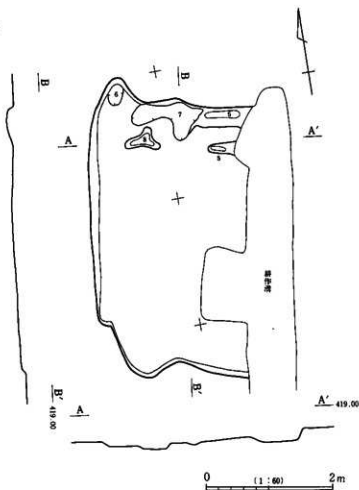
挿図15 DUG II 竪穴状遺構1

② 竪穴状遺構 2 (挿図16)

XⅢS3dを中心にして検出し、東壁全面耕作の溝に切られる。南北方向の長さが4.2mを測る隅丸長方形の竪穴状遺構である。壁高は9～4cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は全面軟らかく、極めて不良であり、床面があったものか疑問が残る。北壁に近い床面上に浅い周溝・穴があるが、役割は不明である。

出土遺物は明治20年の一銭銅貨がある。

出土遺物から明治時代以降に位置づけられる。



挿図16 DUG II 竪穴状遺構2

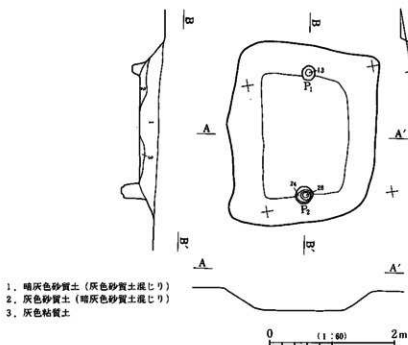
② 小竪穴 1 (挿図17)

XⅢS11bを中心にして検出し、全面を調査した。2.8×2.3mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN10° Eを示す。壁高は36～23cmを測り、極めて緩やかに立ち上がる。床面は軟らかく、不良である。主柱穴はP1・P2の2本である。

出土遺物は極めて少なく、須恵器壺片1点・常滑壺片2点・土師器坏片3点がある。

当初小竪穴として調査したために小竪穴として記述したが、竪穴住居址とするのが妥当と考えられる。

出土遺物が少なく詳細には分からないが、中世に位置づけられる。



挿図17 DUG II 小竪穴 1

(4) 溝 址

① 溝址 3 (挿図18)

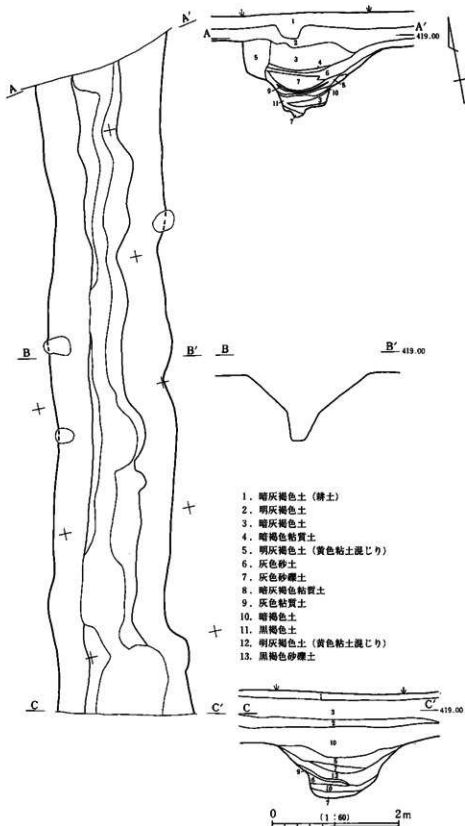
XWR9xからXWS10dにかけて検出した。調査延長は10mで、第I・III・IV地区に連続する。方向はほぼ直線的で、 $N11^{\circ} E$ を示す。幅1.3m・深さ108~78cmを測り、断面形は基本的に逆台形を呈し、えぐれて段をなす箇所が認められる。覆土は砂が主体となっており、複雑な堆積をなしており、長期間にわたって水が流れたことを示している。

出土遺物は古墳時代前期の遺物と中世の遺物が認められる。後者は周辺に存在する柱穴に付随する遺物と考えられ、前者が本址に直接関連する。土師器壺・高環、打製石斧・抉入打製石彫丁、釘等がある。

出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。

② 溝址 4 (挿図19)

XWR12wからXWS14dにかけて検出した。中世の土坑32・36・39・柱穴に切られる。調査延長は10.8mで、南側は第I地区に連続し、北側は用地外で調査できなかった。方向はほぼ直線的で、 $N31^{\circ} E$ を示す。幅225~96cm・深さ36~26cmを測り、断面形は基本的に逆台形を呈し、底がえ



挿図18 DUG II 溝址 3

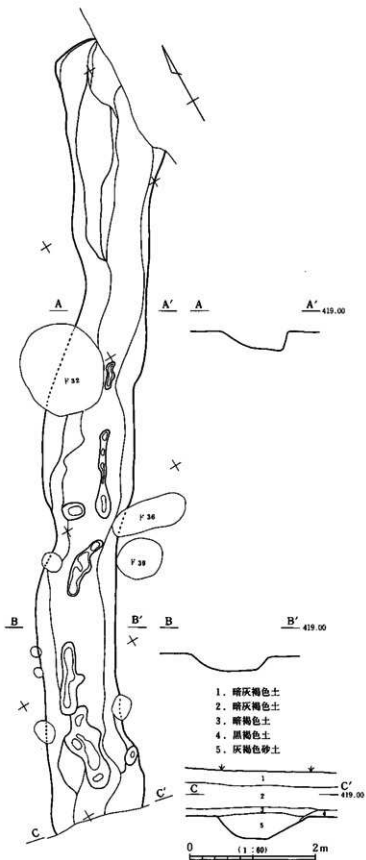


插图19 DUG II 溝址 4

ぐれる箇所が認められる。覆土は灰褐色砂土のほぼ一層であり、短期間に堆積したことを示している。

出土遺物は古墳時代後期の土師器片3点・打製石斧1点・鉄滓1点がある。

出土遺物から古墳時代後期の可能性が強い。

③ 溝址5 (挿図20)

XWS4jからXWS5iにかけて検出した。調査延長は6.1mで、南西側に延長する。方向はほぼ直線的で、N29° Eを示す。幅54~14cm・深さ29~6cmを測り、断面形は不定形である。覆土は灰白色砂土のほぼ一層で、短期間に水が流れたことを示している。遺構の状況から自然の川の流路であり、その底部を把握したと考えられる。

出土遺物は少なく、中世陶器片4点・土師器片1点がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

④ 溝址6 (挿図21)

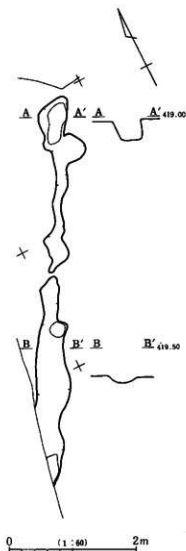
XWR14uからXWS24iにかけて検出した。調査延長は30.4mで、両側に延長する。方向はほぼ直線的で、N38° Eを示す。幅4.4~1.6m・深さ34~12cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。覆土は灰黄褐色土のほぼ一層で、水が流れた痕跡は認められない。

出土遺物は土師器環・須恵器環・山茶碗、打製石斧がある。

出土遺物から平安時代から中世に位置づけられる。

⑤ 溝址7 (挿図22)

XWR22vからXWS24gにかけて検出した。調査延長は20.8mで、途中で断絶する。方向は緩く曲がりながら、N13° Eを示す。幅170~40cm・深さ23~2cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は灰白色砂土のほぼ一層で、短期間に水が流れたことを示している。遺構の状況から自然の川の流路であり、そ



挿図20 DUG II 溝址5

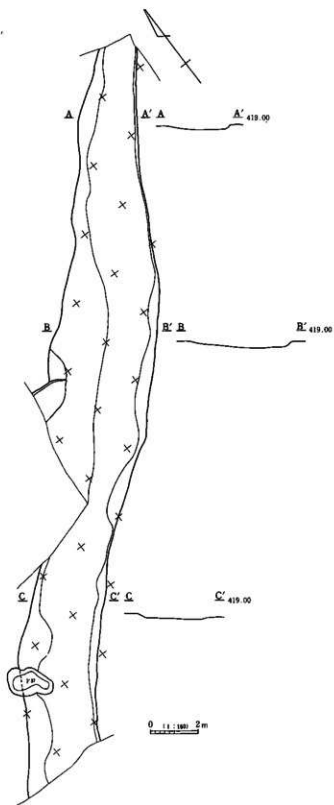


插图21 DUG II 沟址6、土坑37

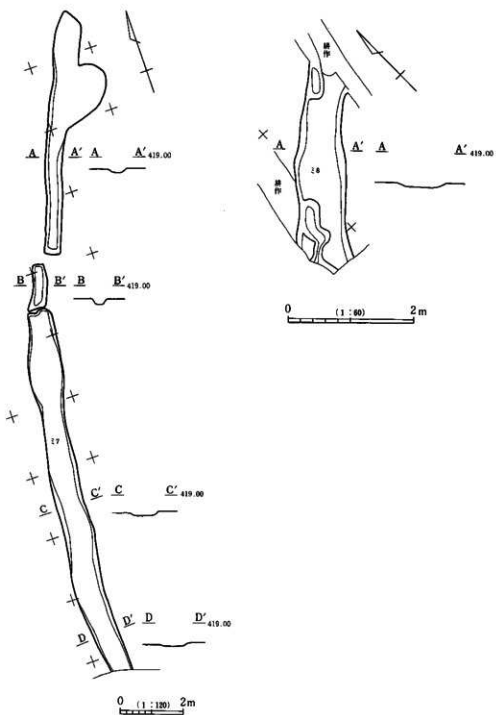


插图22 DUG II 溝址 7·8

の底部を把握したと考えられる。

出土遺物は少なく、中世陶器片1点・打製石斧1点がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑥ 溝址8 (挿図22)

XⅡR3vからXⅡR4vにかけて検出した。調査延長は3mで、両側を耕作溝に切られる。方向はほぼ直線的で、N46°Eを示す。幅80～60cm・深さ10～4cmを測り、断面形は逆台形をなす。遺構の性格は不明である。

出土遺物は近世以降の瓦と打製石斧2点がある。

(5) 土坑・柱穴

① 土坑25 (挿図23)

XⅡS5hで検出した。282×113cmの長い楕円形を呈し、深さは10cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土は灰白色砂土である。

出土遺物は中世陶磁器片がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

② 土坑26 (挿図23)

XⅡS4fで検出した。96×68cmの不整形を呈し、深さは45cmを測る。断面形は逆台形を呈し、石や砂利で埋められている。

出土遺物は近世陶磁器片と瓦がある。

出土遺物から近世以降に位置づけられる。

③ 土坑27 (挿図23)

XⅡS3gで検出した。南北方向が152cmを測る方形を呈し、西側は調査できなかった。深さは11cmを測り、断面形は盤状を呈する。

出土遺物は中世陶器片1点ある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

④ 土坑28 (挿図24)

XⅡS3cで検出した。120×105cmの不整形で、深さは35cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は中世陶器片が2点ある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑤ 土坑29 (挿図24)

XⅡS2bで検出した。114×85cmの楕円形を呈し、深さは30cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は近世陶器片と瓦がある。

出土遺物から近世以降に位置づけられる。

⑥ 土坑30 (挿図25)

XⅡS6dで検出した。280×180cmの不整形で、深さは8cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。

出土遺物は山茶碗鉢・碗、土師器坏等がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑦ 土坑31 (挿図23)

XⅡS4eで検出した。78×74cmの歪んだ円形を呈し、深さは40cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は須恵器・中世陶器片が1点ずつある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑧ 土坑32 (挿図26)

XⅡS13bで検出し、古墳時代後期の溝址4を切る。150×140cmの円形で、深さは33cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

出土遺物はないが周辺の状況から中世に位置づく可能性が高い。

⑨ 土坑33 (挿図25)

XⅡS12dで検出した。148×75cmの丸みを帯びた長方形を呈し、深さは26cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は山茶碗鉢1点がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑩ 土坑34 (挿図25)

XⅡS12cで検出した。120×88cmの歪んだ楕円形を呈し、深さは31cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物はない。

出土遺物はないが周辺の状況から中世に位置づく可能性が高い。

⑪ 土坑35 (挿図27)

XWS 12bで検出した。68×58cmの不整形で、深さは27cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は中世陶器片が1点がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑫ 土坑36 (挿図27)

XWR 13yで検出した。古墳時代後期の溝址4を切る。122×46cmの丸みを帯びた長方形で、深さは121cmを測る。断面形は柱状である。

出土遺物はない。

⑬ 土坑37 (挿図21)

XWR 15yで検出し、溝址6を切る。192×114cmの不整形で、深さは44cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は平安時代の須恵器環が1点ある。

⑭ 土坑38 (挿図29)

XWS 15dで検出し、東側が用地外で半分程調査した。南北方向が145cmの楕円形で、深さは53cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は中世陶器片が1点がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑮ 土坑39 (挿図26)

XWR 13yで検出した。74×65cmの円形を呈し、深さは21cmを測る。断面形は逆台形を呈し、上層に石11ヶが認められた。

出土遺物はない。

⑯ 柱穴 (挿図23～29)

柱穴が溝址6の西側の第Ⅱ地区南東部に集中する。直径40～20cmの円形で、深さは40～10cmが大半を占める。これらは中世の掘立柱建物址の柱穴と考えられるが、あまりにも重複が著しいので、それぞれの関連を把握するには至らなかった。また、小溝状の遺構もあるが、柱穴との関連を持つと考えられる。

遺物は中世の陶磁器類が柱穴内や周辺から出土している。

詳細な位置づけはできないが、中世のやや長い期間にわたると考えている。

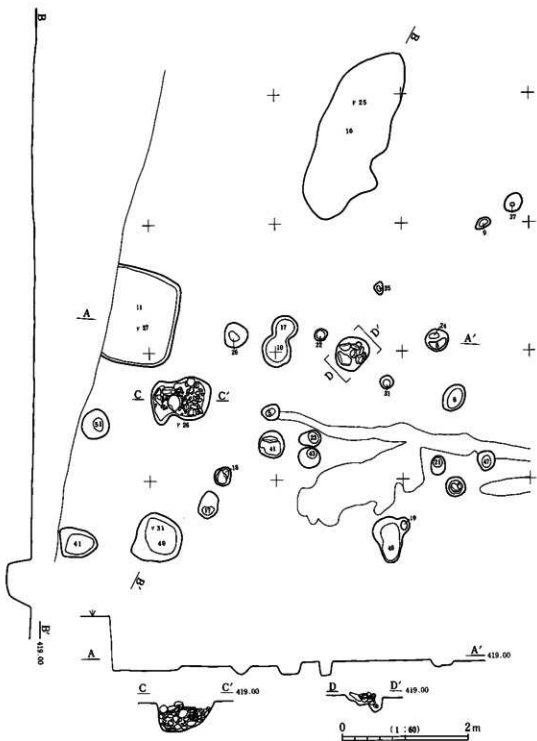


插图23 DUG II 土坑25·26·27·31、柱穴

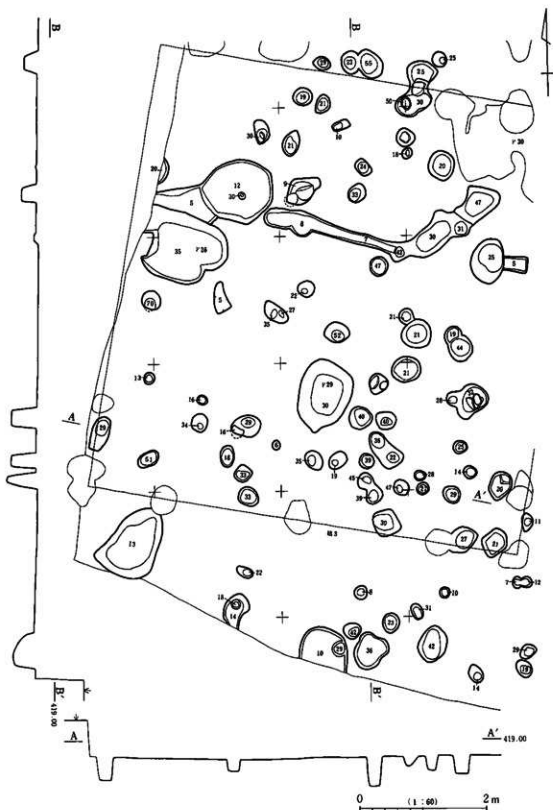


插图24 DUG II 土坑28·29、柱穴

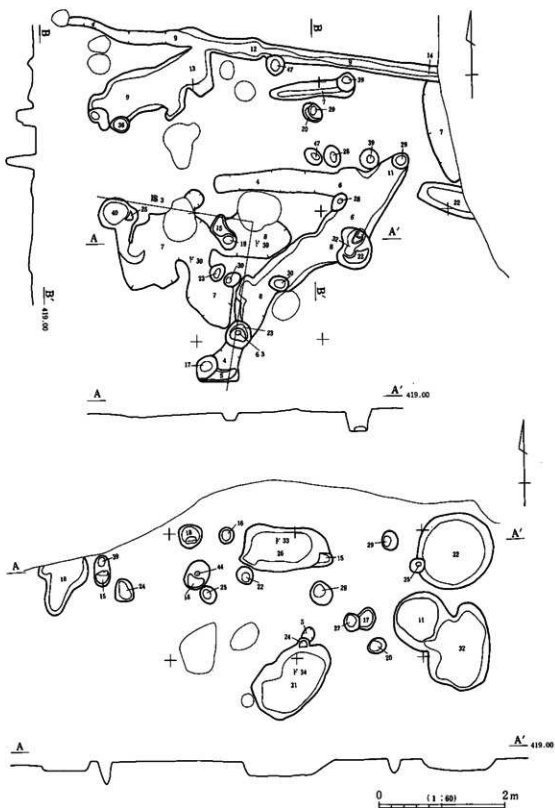
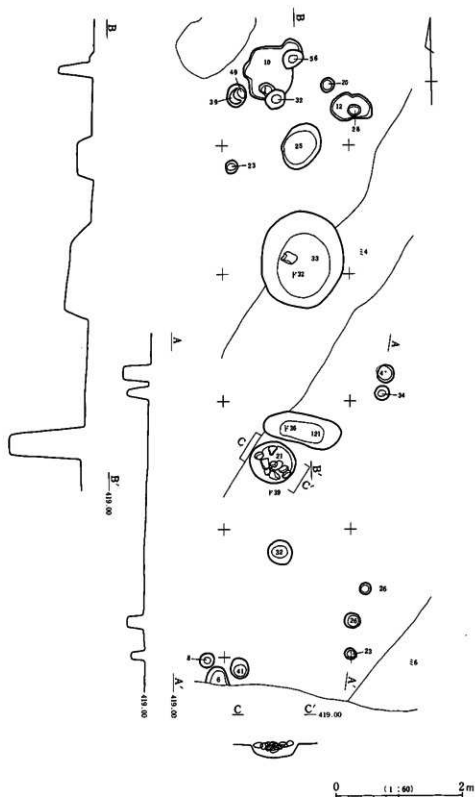


插图25 DUG II 土坑30·33·34、柱穴



挿図26 DUG II 土坑32・36・39、柱穴

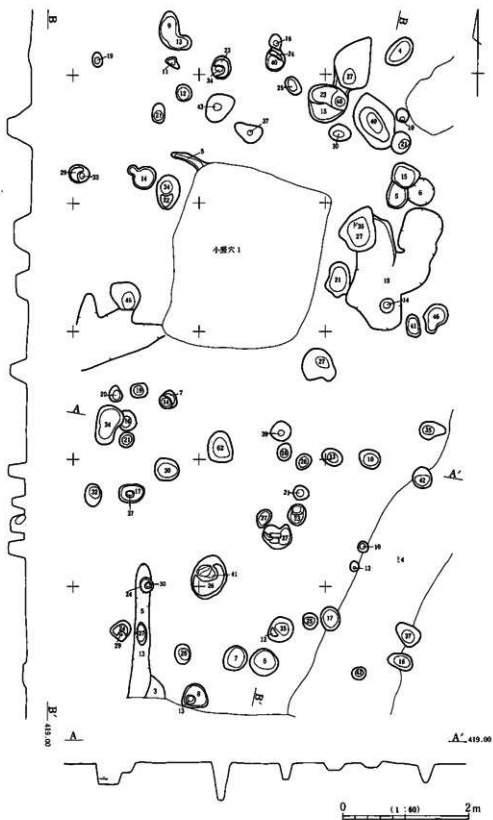


插图27 DUG II 土坑35、柱穴

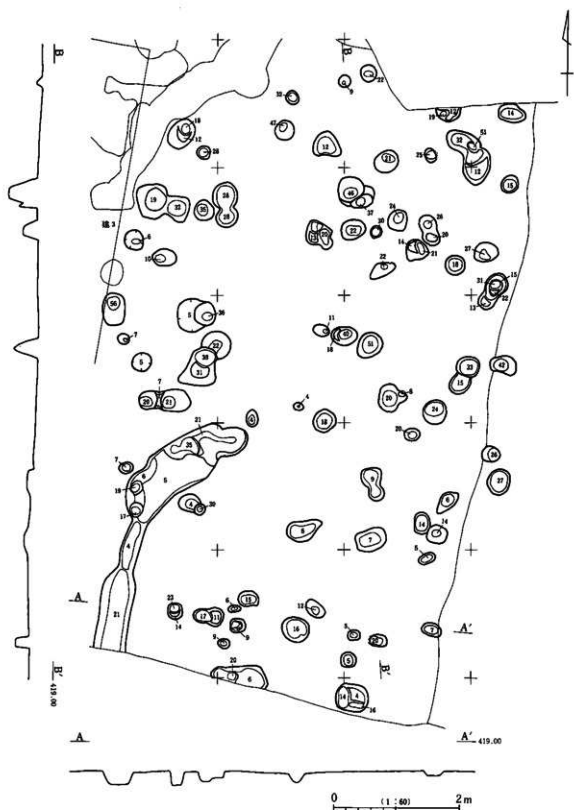


插图28 DUG II 柱穴

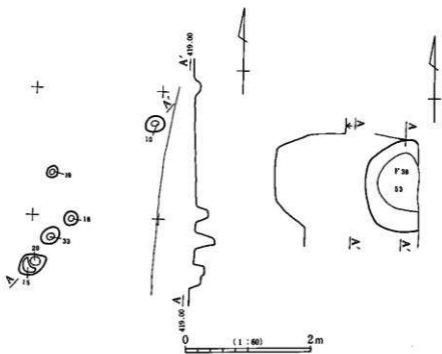


插图29 DUG II 土坑38、柱穴

3) 第Ⅲ地区

(1) 基本層序

溝址3東側の南に面する壁面で示した。

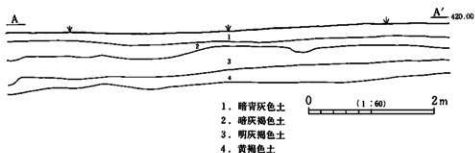
1層：暗青灰色土、水田の耕土である。

2層：暗灰褐色土

3層：明灰褐色砂土

4層：黄褐色土

遺構検出面は4層下のくすんだ黄色土である。



挿図30 DUG III 基本土層図

(2) 溝 址

① 溝址3 (挿図31)

XWS11pからXWT13bにかけて検出した。調査延長は24mで、南側の第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ地区に連続する。方向はゆるく蛇行して、 $N4^{\circ}E$ を示す。幅4.0～1.1m・深さ93～58cmを測り、断面形は基本的に逆台形を呈し、底部がえぐれて深くなる箇所が認められた。覆土は砂が主体の複雑な堆積をなしており、長期間にわたって水が流れたことを示している。

出土遺物は古墳時代前期の土師器片10点と打製石斧・抉入打製石廬丁が1点ずつある。

出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。

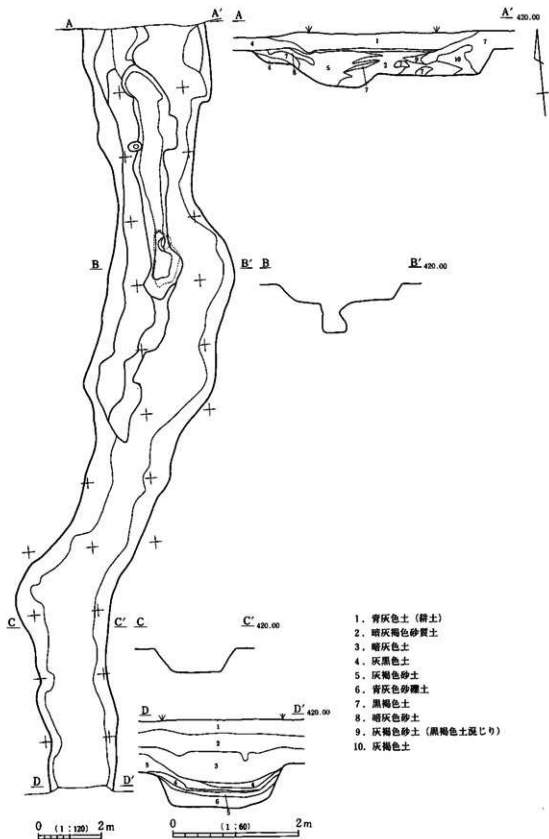


插图31 DUG III 溝址 3

② 溝址9 (挿図32)

ⅨS24nからⅨS12qにかけて検出した。溝址9を切る。調査延長は25.4mで、東側に連続する。方向はほぼ直線的で、 $N74^{\circ}W$ を示す。幅110~20cm・深さ55~6cmを測り、30~20cmの部分が多い。断面形は基本的に逆台形を呈し、底がえぐれる箇所が認められる。覆土は砂が主体であり、短期間に水が流れたことを示している。遺構の状況から自然の川の流路であり、その底部を把握したと考えられる。

平安時代の土師器片10点がある。

時期は不明である。

③ 溝址10 (挿図32)

ⅨS20oからⅨS20qにかけて検出し、溝址9に切られる。調査延長は5.3mで、両側に延長する。方向はほぼ直線的で、 $N12^{\circ}E$ を示す。幅90~40cm・深さ50~14cmを測り、断面形は不定形である。覆土は灰白色砂土のほぼ一層で、短期間に水が流れたことを示している。遺構の状況から自然の川の流路であり、その底部を把握したと考えられる。

出土遺物は土師器片2点・須恵器高坏片1点がある。

時期は不明である。

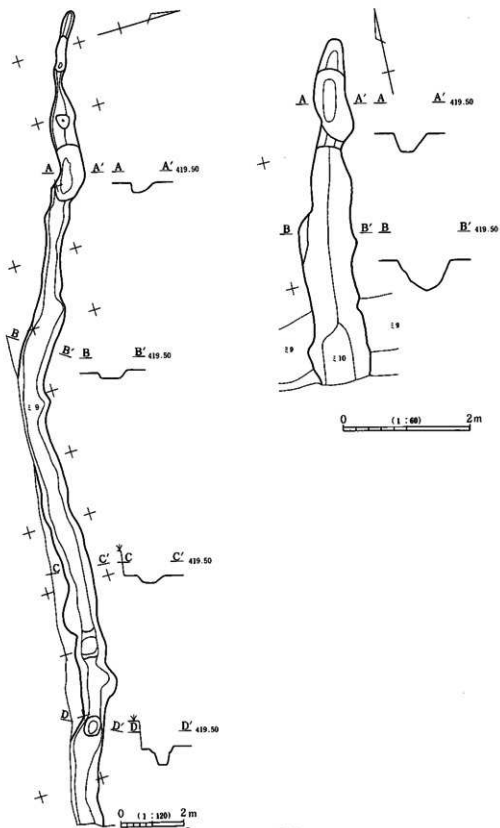


插图32 DUG III 溝址 9·10

3) 第IV地区

(1) 基本層序

調査延長が100mにもおよぶ広い範囲であるので、土層の状況も一様ではない。溝址11北側の西に面する壁面と溝址16東側の東に面する壁面で示した。

1層：暗灰褐色土、畑の耕土である。

2層：明灰褐色土

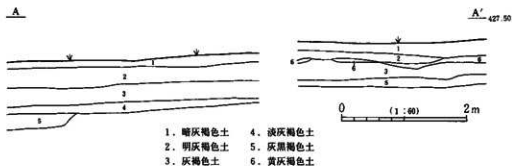
3層：灰褐色土

4層：淡灰褐色土

5層：灰黒褐色土

6層：黄灰褐色土

遺構検出面も一様でなく、黄青灰色砂土・黄灰色土等で、南側では礫が混じる。



挿図33 DUG IV 基本土層図

(2) 溝 址

① 溝址3 (挿図34・35・36)

XVP24oからXWR5mにかけて検出した。調査延長は96mで、北側の第I・II・III地区に連続する。方向はほぼ直線的で、 $N4^{\circ}E$ を示す。幅3.8～0.2m・深さ112～20cmを測り、南側になるほど幅が狭く深さが浅くなり、確認できなくなった。断面形は基本的に逆台形を呈し、底部がえぐれて深くなる箇所が認められた。覆土は砂が主体となっており、複雑な堆積をなしており、長期間にわたって水が流れたことを示している。

また、XVR24gからXWR4mにかけて調査延長14.5mの溝を調査した。幅4.4～1.8m・深さ82～39cmを測り、方向は $N38^{\circ}E$ を示す。断面形は基本的に逆台形を呈し、段をなす箇所が多い。当初基盤の把握ができなかったために掘り過ぎた可能性がある。土層から溝址3を切るが、溝址3がある程度埋まった段階で方向を変えた可能性がある。一応、溝址3の分流と把握しておく。

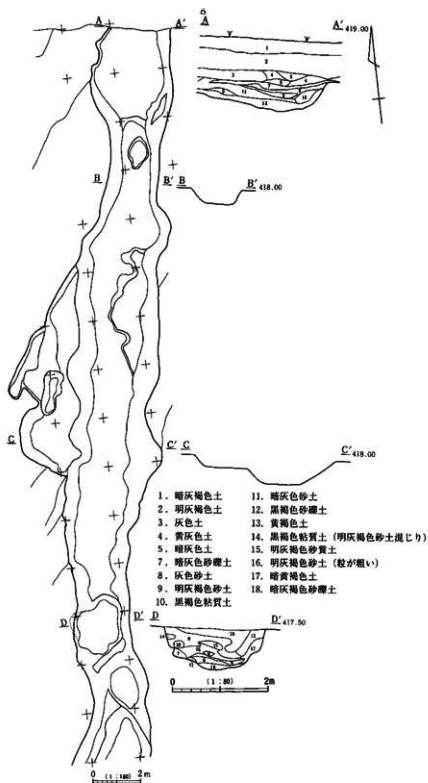


插图34 DUG IV 溝址 3

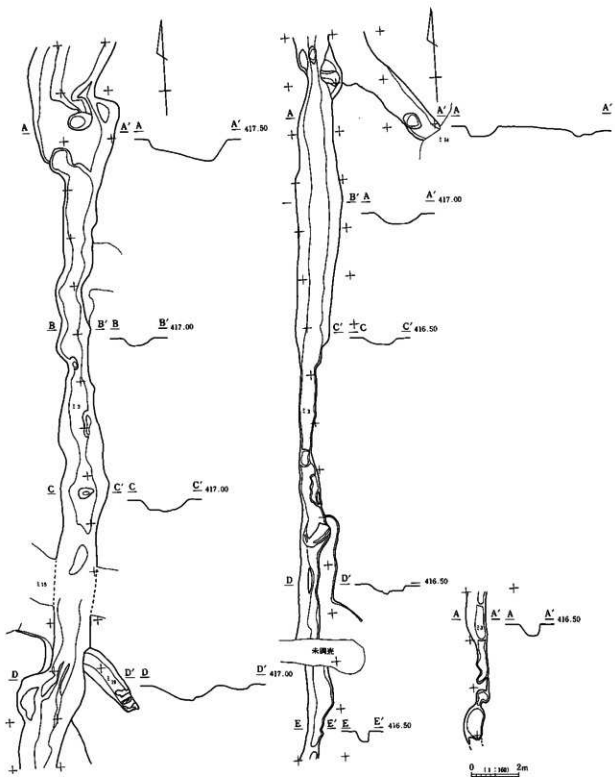
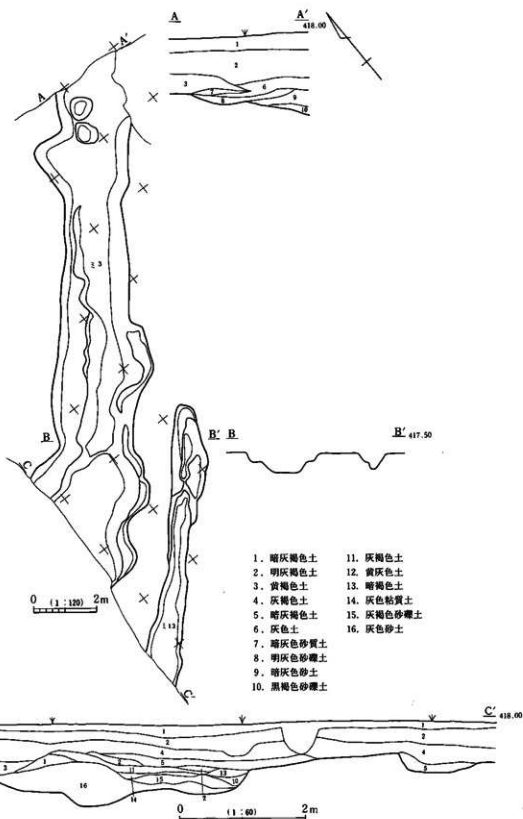


插图35 DUG IV 溝址 3 · 19



挿圖36 DUG IV 溝址 3 · 13

出土遺物は古墳時代前期の土師器が主体で、打製石斧等がある。上層から古墳時代前期の壺が2点出土しており、埋没時期の決め手となる。

出土遺物から埋没時期は古墳時代前期に位置づけられる。

溝址3は、北側の第Ⅲ地区から南側の第Ⅳ地区までの約180m連続する。方向も直線的で、規格性の高い掘り方等を考慮すれば、人為的に掘削された用水路といえる。

② 溝址11 (挿図37)

IVQ25yからIIR11iにかけて検出した。古墳時代の溝址3を切るが、同時に掘り下げたので、平面図ではこの箇所を示せなかった。調査延長は23.8mで、南西側に延長する。方向はほぼ直線的で、N36°Eを示す。幅114~76cm・深さ46~21cmを測り、断面形は逆台形をなす。

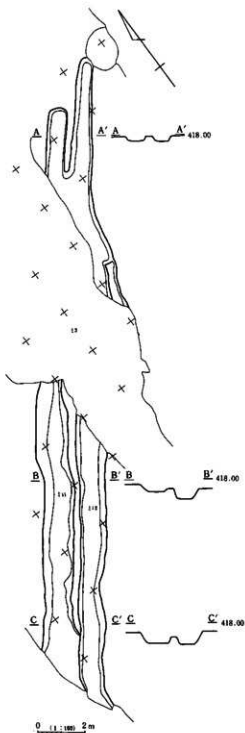
出土遺物はない。

③ 溝址12 (挿図37)

IVQ24xからIIR12iにかけて検出した。古墳時代の溝址3を切るが、同時に掘り下げたので、平面図ではこの箇所を示せなかった。調査延長は26.8mで、南西側に延長する。方向はほぼ直線的で、N36°Eを示す。幅130~60cm・深さ42~13cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は流れ込みによる土師器片3点と近世陶磁器片1点がある。

溝址11ともほぼ方向が同じであり、規格・覆土も似ているので、両遺構とも近世以降に位置づけられる。



挿図37 DUG IV 溝址11・12

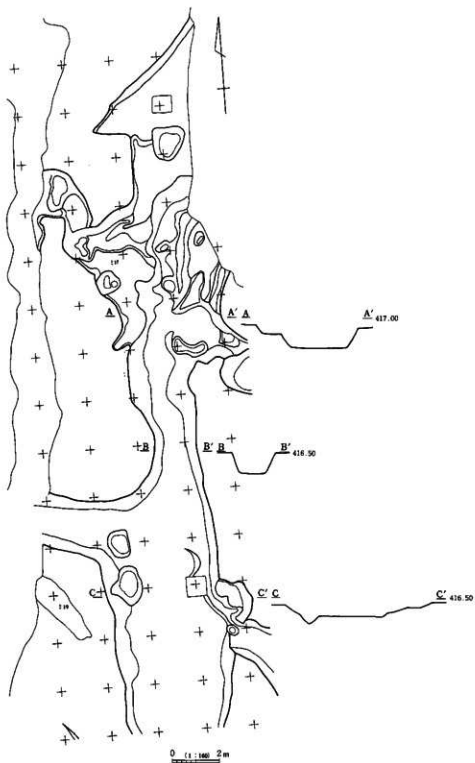


插图38 DUG IV 溝址14·17

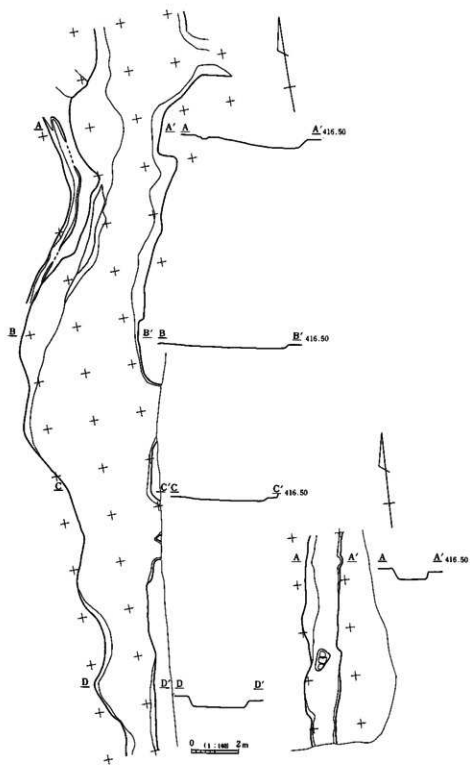


插图39 DUG IV 溝址14

④ 溝址13 (挿図36)

XII R 24eからXII R 2hにかけて検出した。調査延長は8.4mで、南西側に延長する。方向は直線的にN42° Eを示し、幅120～50cm・深さ61～28cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は土師器片2点と打製石斧2点がある。

⑤ 溝址14 (挿図38・39)

XII P 2mからXII Q 6uにかけて検出した。調査延長は69mで、両側に延長する。方向はほぼ直線的で、N8° Eを示す。幅5.0～1.0m・深さ92～10cmを測り、南側になるほど幅が狭くて深さが浅くなる。断面形は基本的に逆台形を呈し、南側の浅い箇所は皿状となる。

出土遺物は少なく、土師器壺・甕の破片が35点ある。

⑥ 溝址15 (挿図40・41)

XII Q 8gからXII Q 1mにかけて検出し、溝址3・14と重複する。調査延長は20mで、西側に延長する。幅226～94cm・深さ69～20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は少なく、土師器壺・甕の破片が35点ある。

⑦ 溝址16 (挿図41)

XII Q 11lからXII Q 8pにかけて検出した。調査延長は12mで、北側に延長する。幅140～62cm・深さ33～24cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物はない。

⑧ 溝址17 (挿図41)

XII Q 9iからXII Q 3sにかけて検出し、溝址3・14と重複する。調査延長は22mで、幅128～20cm・深さ45～16cmを測り、断面形は不定形である。

出土遺物は弥生土器片が1点ある。

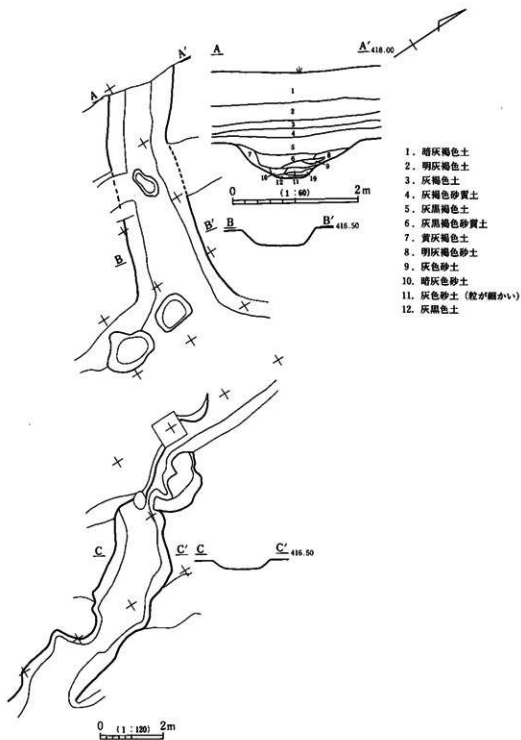
⑨ 溝址18 (挿図41)

XII Q 9gからXII Q 8pにかけて検出した。調査延長は19mで、北側に延長する。方向はほぼ直線的で、N4° Wを示す。幅216～90cm・深さ62～19cmを測り、断面形は不定形である。

出土遺物は少なく、古墳時代前期の台付甕・須恵器坏等がある。

溝址15・16・17・18は XII Q の f 列あたりで合流して、幅9～8mの大きな溝となる。遺構や土層の観察から自然の川の流路の痕跡と考えられる。

この部分からは打製石斧・有肩扇状形石器・磨製石斧等が出土した。



挿図40 DUG IV 溝址15

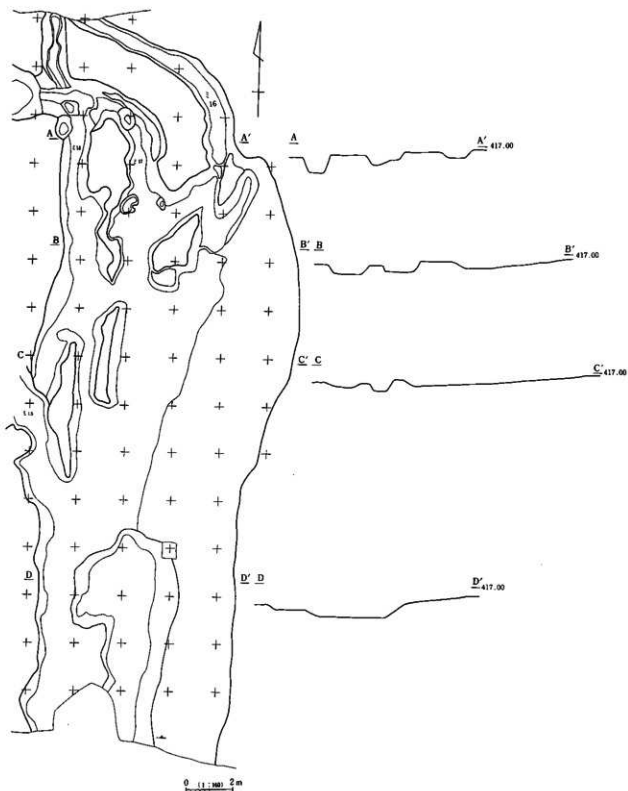


插图41 DUG IV 沟址15·16·17·18

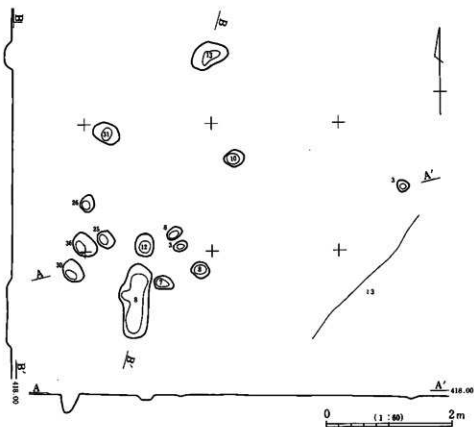
個々の溝址の詳細な位置づけはできないが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて存在した可能性が高い。

⑩ 溝址19 (挿図35)

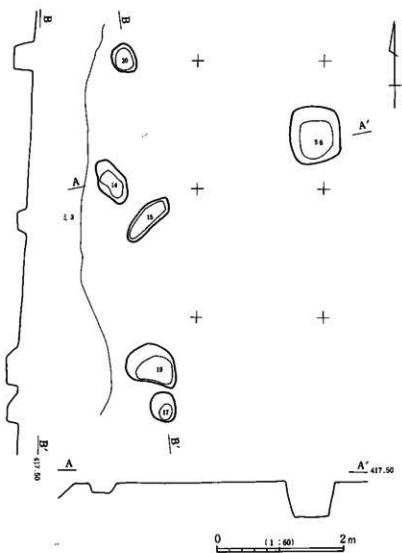
ⅡQ3jからⅡQ1kにかけて検出し、溝址3と重複する。調査延長は6.2mで、西側に延長する。方向は直線的でN44°Wを示し、幅104~60cm・深さ20~5cmを測り、断面形は不定形である。出土遺物は弥生土器片2点・土師器片3点がある。

(3) 柱穴・穴

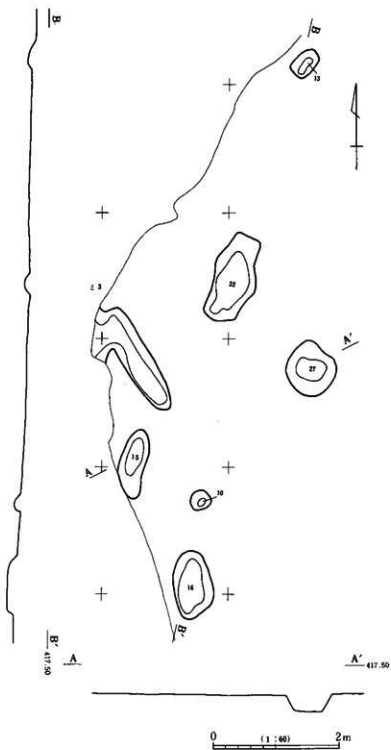
柱穴・穴がわずかに認められた。溝址3分流北側・溝址12南側・溝址16東側の3箇所に集中する。挿図42・43・44・45で平面図を示した。挿図43の溝址3分流北側集中箇所は、第Ⅰ・Ⅱ地区との柱穴と関連する中世に位置づく可能性が高い。他は時期・性格とも不明である。



挿図42 DUG IV 柱穴・穴(1)



挿図43 DUG IV 柱穴・穴(2)



挿圖44 DUG IV 柱穴・穴(3)

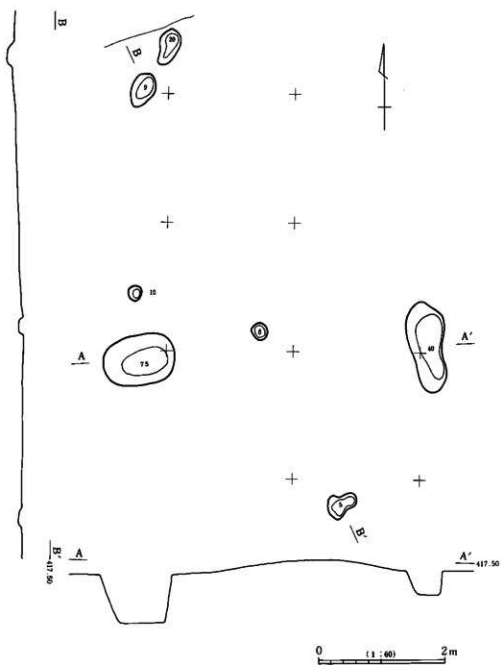


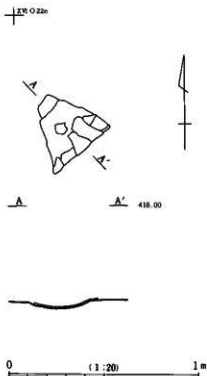
插图45 DUG IV 柱穴·穴(4)

(4) 土器棺墓

① 土器棺墓1 (挿図46)

XV O 22nで調査した。重機で表土を除去した時に上半分くらいを破壊してしまい、下半分くらいを調査した。わずかに地山を掘り窪めて弥生時代前期の深鉢が横位にしておかれており、周辺に焼土・煤がわずかに認められた。

弥生時代前期の土器棺墓である。



挿図46 DUG IV 土器棺墓1

5) 第V地区

(1) 基本層序

東側中央の東に面する壁面で示した。

1層：暗青灰色土、水田の耕土である。

2層：暗青灰色土（鉄分沈殿）、水田の床土

3層：明灰黒色土

4層：暗灰黒色土

5層：明灰褐色土（鉄分沈殿）

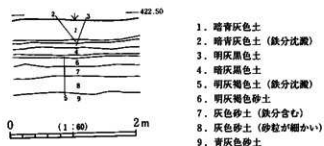
6層：明灰褐色砂土

7層：灰色砂土（鉄分含む）

8層：灰色砂土（砂粒が細かい）

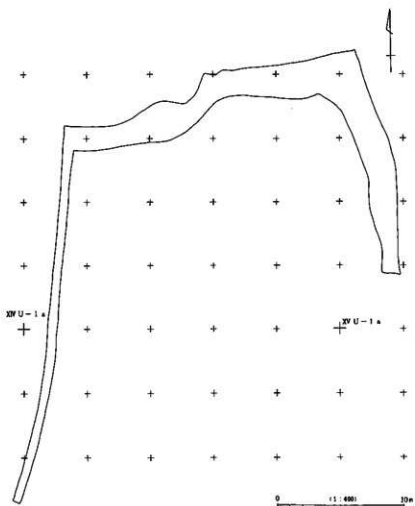
9層：青灰色砂土

3・4・5層は旧水田面と考えられる。9層の青灰色砂土が基盤かどうかは不明である。



挿図47 DUG V 基本土層図

第V地区は調査対象地域の端にトレンチを設定して遺跡の状況を確認した。北西側の一部をのぞいて全面湿地帯で湧水も著しく、拡張しての調査は行わなかった。



挿図48 DUG V 全体図

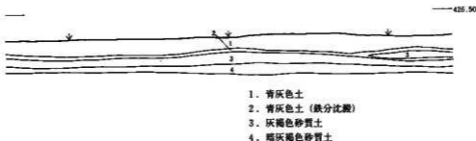
6) 第VI地区

(1) 基本層序

中央部の東に面する壁面で示した。

- 1層：青灰色土、水田の耕土である。
- 2層：青灰色土（鉄分沈殿）、水田の床土
- 3層：灰褐色砂質土
- 4層：暗灰褐色砂質土

遺構検出面は4層下の黄色粘土で、比較的容易に遺構検出ができた。



挿図49 DUG VI 基本土層図

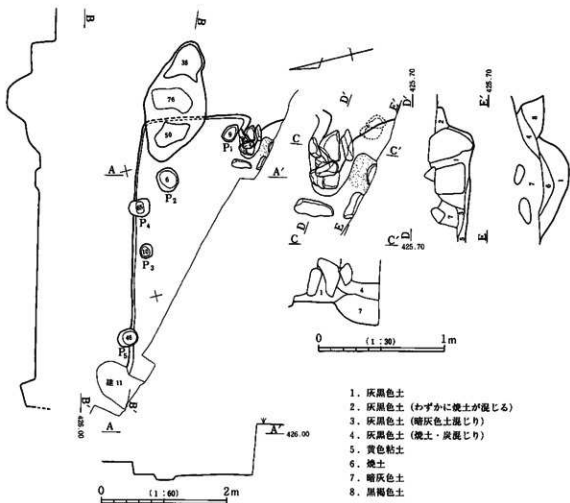
(2) 竪穴住居址

① 4号住居址（挿図50）

XW2vを中心にして検出し、南側が道路となる。道路開設時の第I次調査で南側が確認されており、2回に分けてほぼ全体を調査したことになった。奈良時代の掘立柱建物址11に切られ、北東隅の大穴を切る。4.0×4.8mと推定される隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN107° Eを示す。壁高は25～20cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はほぼ平坦で、たたき状に堅く良好である。主柱穴は不明で、P1・P2・P3の役割も不明である。P4・P5は本址に付属しない。カマドは東壁中央に位置する石芯粘土カマドで、今回は左袖と焚口部を確認できた。左袖は7ヶの石を組み合わせており、その西側にはカマドに使用した可能性のある石が2ヶ認められた。焚口部の焼土は比較的多かった。

出土遺物は極めて少ないが、カマド付近から土師器甕が出土した。他に、須恵器甕・蓋・坏がある。

出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。



挿図50 DUG VI 4号住居址

② 8号住居址 (挿図51)

IX 9kを中心として検出し、奈良時代後期の9号住居址に切られるため、約半分を調査した。東西方向が6.6mを測る隅丸方形と思われる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は最大18cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南西壁下を除きほぼ全周に幅24~11cm・深さ11~4cmの周溝が巡る。床面は貼床でしまりが良好である。主柱穴はP1~4で、P3・P4は9号住居址の調査時に穴底のみ確認した。カマドは確認できなかったが、9号住居址に破壊された可能性がある。

出土遺物は床面からやや浮いた状態で多くが出土し、土師器壺・甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・高坏、碧玉製の管玉がある。

出土遺物より古墳時代後期後半に位置づけられる。

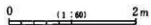
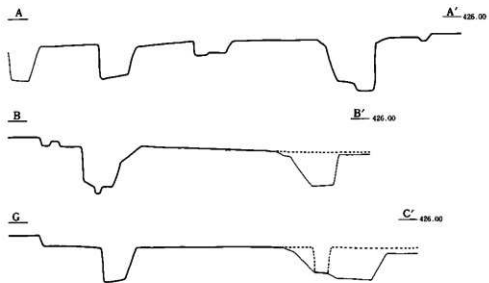
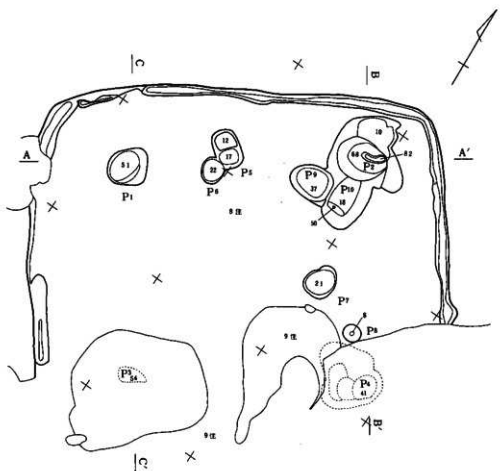
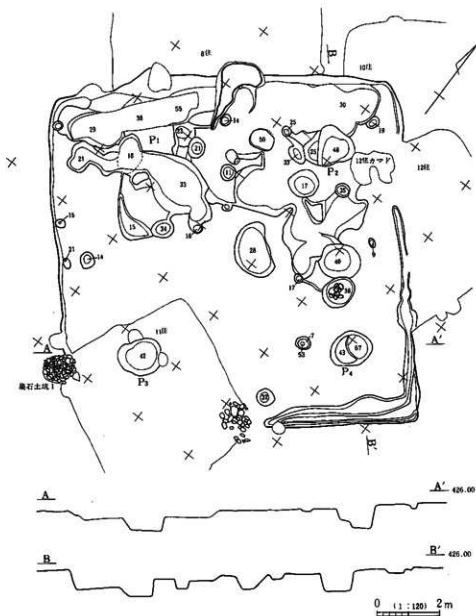


插图51 DUG VI 8号住居址



挿図52 DUG VI 9号住居址

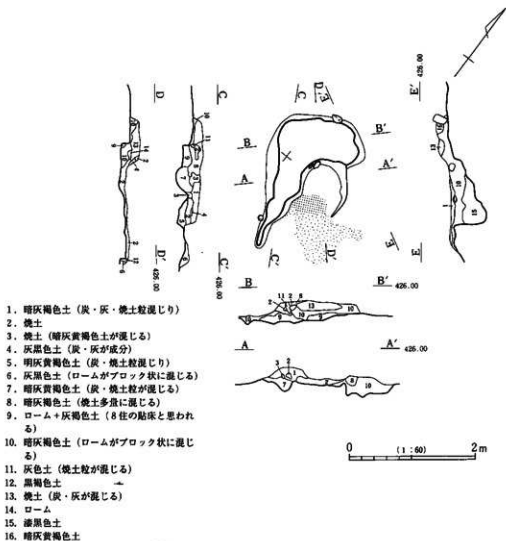
③ 9号住居址 (挿図52・53)

IXX11iを中心として検出し、中世の11号住居址に切られるため、3/4強を調査した。古墳時代後期前半の10号住居址・古墳時代後期後半の8号住居址を切り、奈良時代後半の12号住居址・中世の11号住居址に切られる。10.8×11.1mを測る隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN38°Wを示す。壁高は最大23cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南東壁下に幅66～28cm・深さ11～

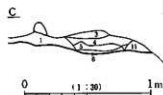
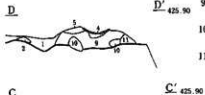
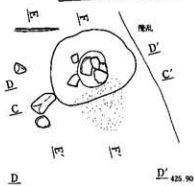
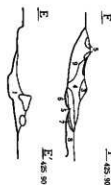
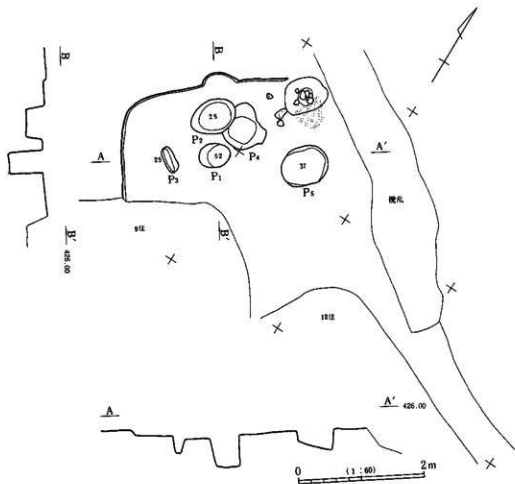
6 cmの周溝が巡る。一部は12号住居址の貼床を除去した段階で確認した。床面は部分的に焼土粒を大量に含む土を用いた貼床になっており、全般的にしまりが良好である。支柱穴はP1～4である。支柱穴を含めて多くの柱穴類は前述した貼床を除去した際に確認した。カマドは北西壁中央に位置する粘土カマドで全体的に崩り過ぎてしまった。焚口部は焼土が多く、また、加熱のため、非常に硬化していた。

出土遺物は多く、覆土から床面まで広範囲に出土している。また、住居址床面中央部に、人頭大～拳大の礫に混じて遺物が出土している。土師器甕・鉢・蓋、須恵器甕・鉢・坏・蓋・盤・皿・平瓶、性格不明の鉄器等がある。遺構確認時、覆土上層から丸柄を、床面よりやや浮いた位置で2式の轡が出土している。

出土遺物より奈良時代後半に位置づけられる。



挿図53 DUG VI 9号住居址カマド



1. 暗褐色土 (灰・焼土粒が混じる)
2. ローム (1が多少混じる)
3. 灰黄褐色砂質土
4. 灰黒褐色粘質土
5. 焼土
6. ローム (焼けて硬く、ボロボロしている)
7. 暗褐色土 (焼土が混じる)
8. 暗褐色土 (ロームがブロック状に混じる)
9. 灰黒褐色粘質土 (焼土粒が混じる)
10. 暗灰色粘質土 (焼土が多少混じる)
11. 暗灰色粘質土 (ロームがブロック状に混じる)

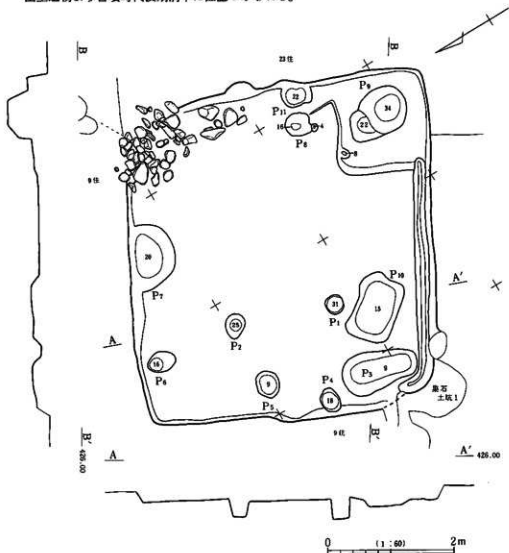
挿図54 DUG VI 10号住居址

⑩ 10号住居址 (挿図54)

X121を中心として検出し、約1/3を調査した。奈良時代後半の9・12号住居址に切られる。主軸に直行する方向が6mの隅丸方形と推定される竪穴住居址で、主軸方向はN35°Wを示す。南東側のプランは確認できなかった。壁高は最大11cmを測りやや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴はP1で、他のピットの性格は不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドと考えられるが、上部が削平されており残存状態は悪い。中央部にカマドで使用されたとと思われる土師器甕の胴部片を検出した。焚口部には焼土が多く残存していた。

出土遺物は少なく、土師器甕等が出土している。

出土遺物より古墳時代後期前半に位置づけられる。

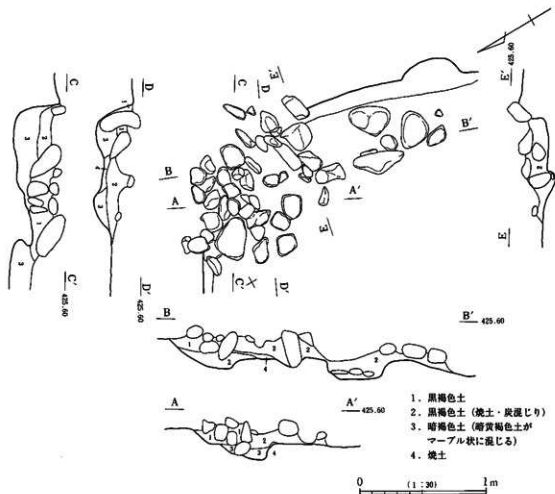


挿図55 DUG VI 11号住居址

⑤ 11号住居址 (挿図55・56)

INX121を中心として検出し全体を調査した。奈良時代後半の9号住居址と平安時代前半の23号住居址を切る。5.3×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN120° Wを示す。壁高は21~12cmを測りやや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴は不明で、他の穴の性格も不明である。カマドは東隅に位置する石組カマドで、底部に焼土を確認した。出土遺物は、土師器環・羽釜、灰釉陶器碗・長頸壺、山茶碗、白磁、刀子、鉄滓等があり、多くがカマド周辺から出土している。

出土遺物より中世に位置づけられる。



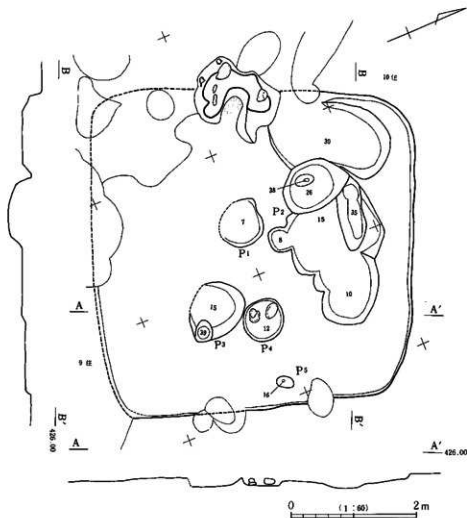
挿図56 DUG VI 11号住居址カマド

⑥ 12号住居址（挿図57・58）

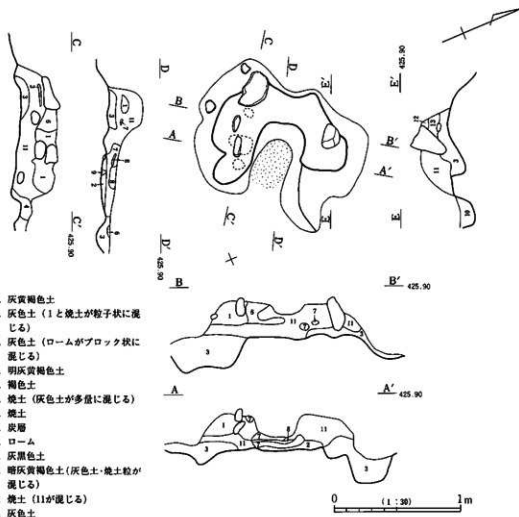
XN X13kを中心として検出し、2/3強を調査した。古墳時代後期前半の10号住居址・奈良時代後半の9号住居址を切る。4.7×4.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN67° Wを示す。壁高は最大23cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は貼床になっておりしまりはあまりない。主柱穴は不明で他の穴の性格も不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、焚口部に大量な焼土・炭を確認した。

出土遺物は、須恵器環・蓋、土師器甕、フイゴの羽口、鉄滓等がある。

出土遺物より奈良時代後半に位置づけられる。



挿図57 DUG VI 12号住居址



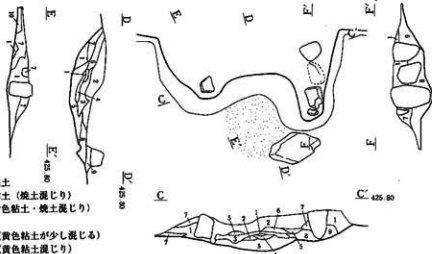
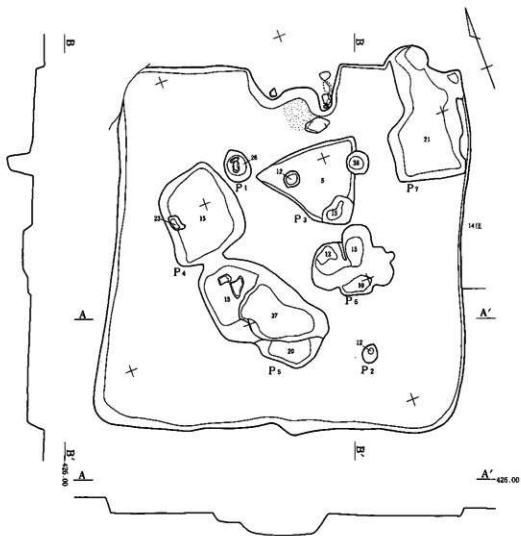
挿図58 DUG VI 12号住居址カマド

⑦ 13号住居址 (挿図59)

IN X 2bを中心に検出し、全体を調査した。掘立柱建物址10・11を切り、平安時代後半の14号住居址・近代の粘土採掘坑に切られる。5.6×5.6mの隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向はN27° Eを示す。壁高は25～6cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良である。主柱穴はなく、床面上に大きな穴があるが、直接本址に関連する可能性は薄い。カマドは北壁中央に位置する石芯粘土カマドで、左袖に1ヶ・右袖に3ヶの石を用いている。焚口部の焼土は多く、焼け固まって堅くなっていた。

出土遺物は、土師器壺、須恵器壺・坏・長頸壺、鉄滓、フイゴ羽口等がある。

出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

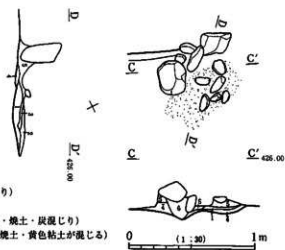
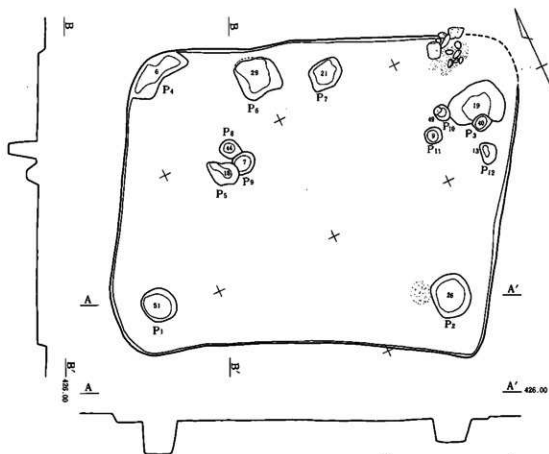


1. 黄色粘土
2. 黄色粘土 (焼土混じり)
3. 灰 (黄色粘土・焼土混じり)
4. 焼土
5. 焼土 (黄色粘土が少し混じる)
6. 焼土 (黄色粘土混じり)
7. 灰黒色砂質土 (黄色粘土混じり)
8. 灰黒色砂質土 (焼土・炭混じり)

9. 灰黒色砂質土
10. 暗灰色土

0 (1:50) 2m

挿図59 DUG VI 13号住居址カマド



1. 焼土
2. 焼土 (暗灰色土混じり)
3. 黄色粘土
4. 黄色粘土 (暗灰色土・焼土・炭混じり)
5. 暗灰色土 (わずかに焼土・黄色粘土が混じる)
6. 雑瓦

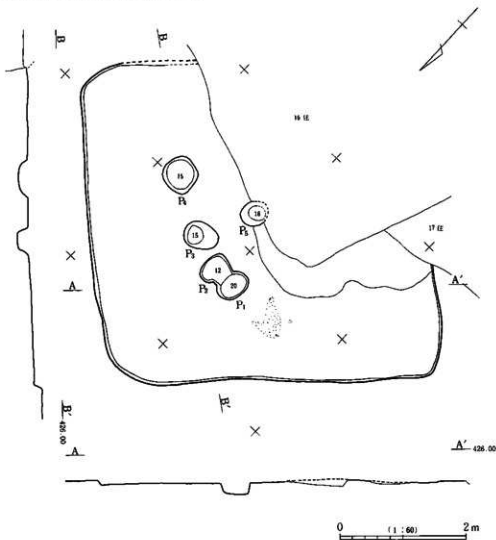
挿図60 DUG VI 14号住居址

⑧ 14号住居址（挿図60）

XIX 5bを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の溝址21、掘立柱建物址10、奈良時代の13号住居址を切る。4.8×6.1mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN25° Eを示す。壁高は16~1cmを測り、上部を削平されている。床面は全体に軟らかく不良であるが、一部に堅い箇所を認めた。主柱穴は不明である。カマドは北東壁東隅寄りに位置する石組カマドで、残存状態は悪い。左袖の石1ヶが残るのみで、焚口部の焼土の上に袖石が散乱していた。

出土遺物は、土師器杯・鉢、須恵器杯、灰釉陶器碗、山茶碗碗、焼成粘土がある。また、P3からは碗状の形をした漆の皮膜が出土し、その脇には鉄器がみられた。

出土遺物から中世に位置づけられる。

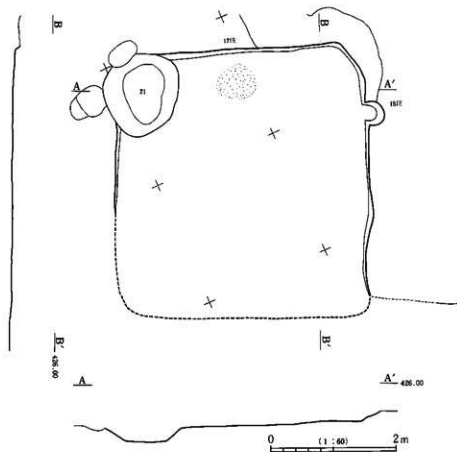


挿図61 DUG VI 15号住居址

⑨ 15号住居址 (挿図61)

IXW7yを中心にして検出し、約2/3を調査した。古墳時代後期の溝址20・21を切り、平安時代前半の16・17号住居址に切られる。5.1×5.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN136°Eを示す。上部が削平されておりプランなど不明瞭な箇所がある。壁高は最大10cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良であるが、一部に堅い箇所を認めた。溝址20と切り合う部分は床面を掘り過ぎてしまった。主柱穴は不明である。カマドは確認できなかったが、16号住居址に破壊されたと考えられる。

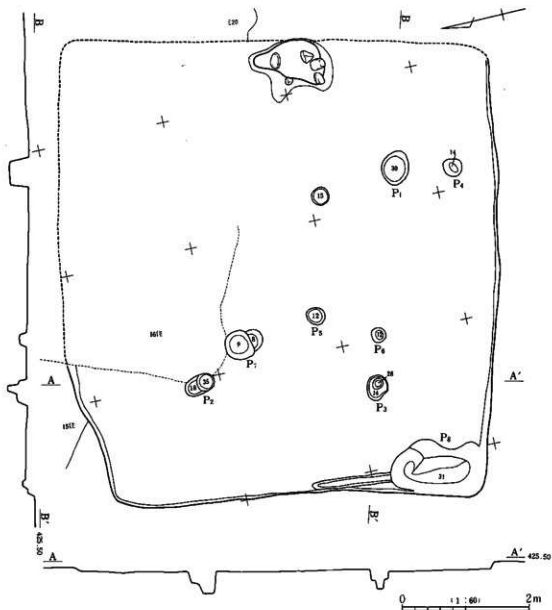
出土遺物は、土師器甕、須恵器坏・鉢・盤・長頸壺、フイゴの羽口、鉄滓等が出土している。出土遺物から奈良時代に位置づけられる。



挿図62 DUG VI 16号住居址

⑩ 16号住居址 (挿図62)

XNW7wを中心にして検出し、2/3程を調査した。古墳時代後期の溝址20と平安時代前半の15号住居址を切り、平安時代前半の17号住居址に切られる。南北方向が4mを測る隅丸方形の堅穴住居址で、主軸方向はN66°Wを示すと考えられる。壁高は最大18cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は一部貼床になるが、全体的に不良である。支柱穴やP1の役割は不明である。カマド



挿図63 DUG VI 17号住居址

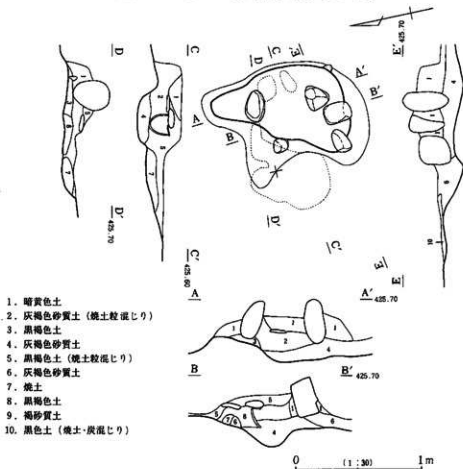
は確認できなかったが、北西壁中央やや内側に焼土が認められた。

出土遺物は多く、土師器甕・坏、須恵器坏、灰釉陶器皿・長頸壺、鉄滓がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

⑭ 17号住居址（挿図63・64）

ⅡW6uを中心にして検出し、4/5程を調査した。プラン確認ができず、上面を削平してしまった。また、調査時点で遺構の切り合いの新旧関係の把握ができず、16号住居址を先に調査してしまつた。古墳時代後期の溝30と平安時代前半の16号住居址を切る。7.1×6.6mと推定される隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN66°Wを示すと考えられる。壁高は最大18cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は遺構の切り合い箇所を除きまわりが良好である。主柱穴は、P1～P3であるが、他の穴の性格は不明である。カマドは住居址東側中央に位置する石芯粘土カマドで、中央部にカマドで使用されたと思われる土師器甕が残存していた。



挿図64 DUG VI 17号住居址カマド

出土遺物は多く、土師器壺・坏、須恵器坏、灰釉陶器碗、鉄滓等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

⑫ 18号住居址（挿図65）

XN X10aを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の溝址21を切る。4.5×4.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN60° Wを示す。壁高は24～9cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝が東隅から北東壁中央の壁下に認められた。長さ2.1m・幅10～8cm・深さ3cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴やP1～P8の役割は不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、両袖に2ヶずつの石を用いているが、右袖の1ヶは攪乱を受けて残っていない。支脚石は本来の位置から右側に倒れている。また、天井石がカマド南側に残っていた。

出土遺物は多く、覆土中に石とともに入っていた。土師器壺・坏・皿、須恵器坏、灰釉陶器碗・皿・長頸壺、鉄器がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

⑬ 19号住居址（挿図66・67・68）

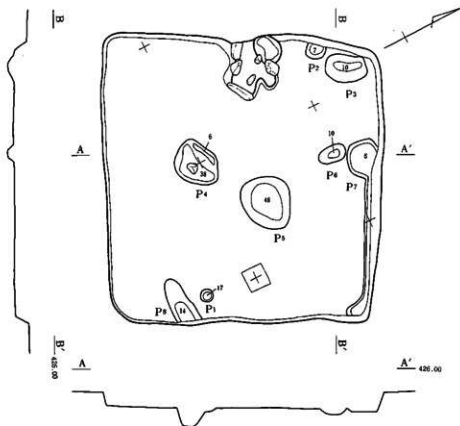
XN X17iを中心にして検出し、全体を調査した。中世の20号住居址に切られる。6.0×5.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、長軸方向はN76° Wを示す。壁高は20～7cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。周溝が南壁下と西壁から北壁下に認められた。幅26～19cm・深さ10～3cmを測る。床面は凹凸があるが、たたき状に堅く良好である。主柱穴はP16・P17・P14・P2で、主軸に直交する方向に細長い楕円形をなし、割り材使用の柱が考えられる。P10は本址を切る。床面下に穴が多く、暗灰褐色土に黄色粘土・焼土・炭が混じる土で埋められていた。挿図67で示しておいた。カマドは西壁中央やや南西隅寄りに位置する石芯粘土カマドである。左袖の石2ヶが残るのみで残存状態が悪く、構造を把握するには至らなかった。焚口部の焼土は多く、焼け固まっていて皿状に窪んでいた。

出土遺物は多く、カマド脇のP12とP1にまとまっていた。土師器壺、須恵器壺・四耳壺・蓋・坏、釘等がある。

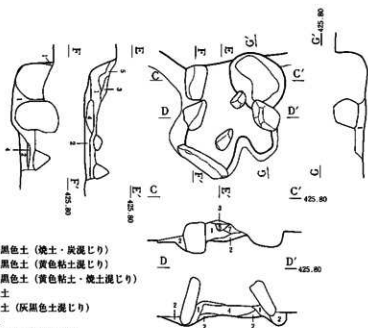
出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

⑭ 20号住居址（挿図66・69）

XN X19iを中心にして検出し全体を調査した。奈良時代の19号住居址、平安時代の21号・22号住居址を切る。4.4×3.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN116° Eを示す。壁高は16～9cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1・P5・P3・P2である。カマドは南東隅に位置する石芯粘土カマドで、残存状態はよい。袖石に3ヶ



0 (1:50) 2m



1. 灰黒色土 (焼土・炭混じり)
2. 灰黒色土 (黄色粘土混じり)
3. 灰黒色土 (黄色粘土・焼土混じり)
4. 焼土
5. 焼土 (灰黒色土混じり)
6. 炭
7. 炭 (灰黒色土混じり)

0 (1:20) 1m

挿図65 DUG VI 18号住居址

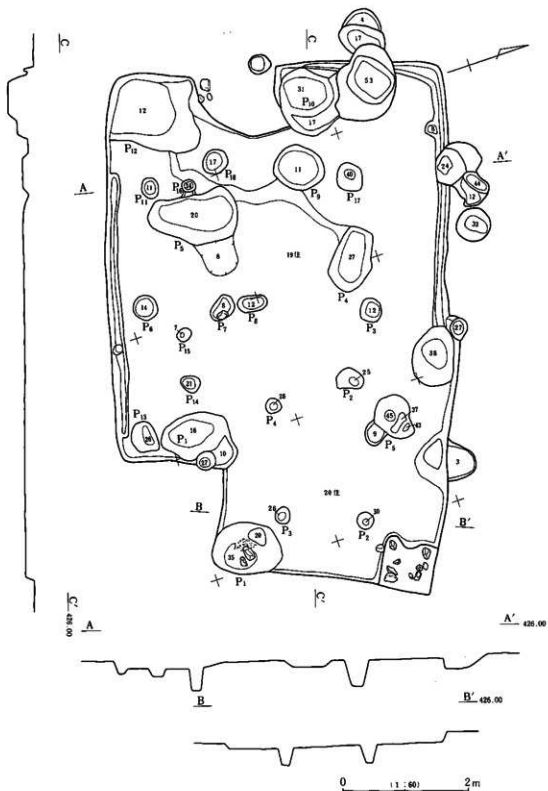
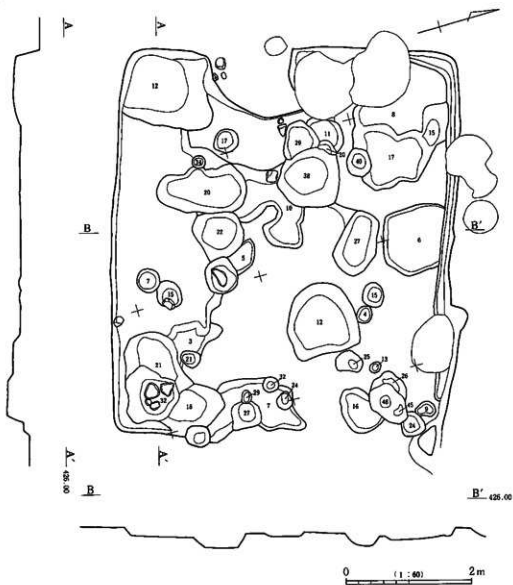


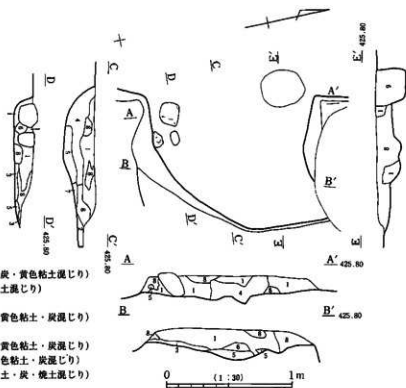
插图66 DUG VI 19号·20号住居址

の石を使い、小さな石で補強している。中央部にも石が多く落ち込んでいた。焚口部の焼土は少なかった。

出土遺物は床面上から出土し、土師器高足高台杯、灰釉陶器碗・山茶碗、刀子等がある。出土遺物から中世に位置づけられる。



挿図67 DUG VI 19号住居址ハリ床下



1. 暗灰色土（焼土・炭・黄色粘土混じり）
2. 暗灰色土（黄色粘土混じり）
3. 暗灰色土
4. 暗灰色土・焼土（黄色粘土・炭混じり）
5. 焼土
6. 焼土（暗灰色土・黄色粘土・炭混じり）
7. 炭（暗灰色土・黄色粘土・炭混じり）
8. 黄色粘土（暗灰色土・炭・焼土混じり）
9. 暗灰褐色土

挿図68 DUG VI 19号住居址カマド

⑮ 21号住居址（挿図70）

XIX 19gで南東隅を検出して竪穴住居址であることが分かった。中世の20号住居址に切られ、平安時代の22号住居址を切る。南東側が水田の造成で削平され、全体の1/4程を調査した。規模・平面形・主軸方向とも不明である。壁高は13～8cmを測り、上部を削平されている。床面は大部分が22号住居址の覆土中にハリ床される。その他の住居址施設は不明である。

出土遺物は少なく、須恵器蓋・坏がある。

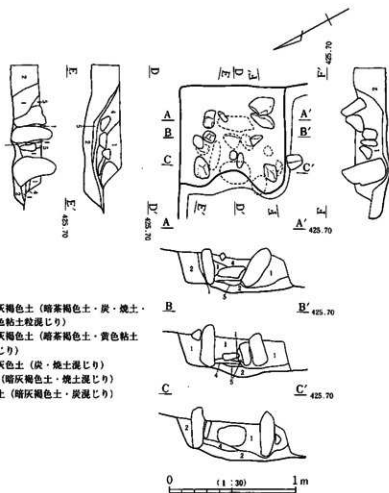
切り合い関係等から平安時代に位置づけられる。

⑯ 22号住居址（挿図71）

XIX 20hを中心にして検出した。平安時代の21号住居址、中世の20号住居址に切られ、南東側が水田の造成で削平され、全体の1/2程を調査した。南西・北東方向が4.7mを測る竪穴住居址である。壁高は33～16cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。その他の住居址施設は不明である。

出土遺物は少なく、土師器甕・坏、須恵器蓋・坏等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



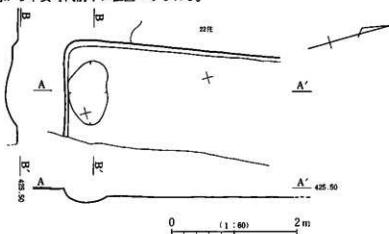
挿図69 DUG VI 20号住居址カマド

⑩ 23号住居址 (挿図72・73)

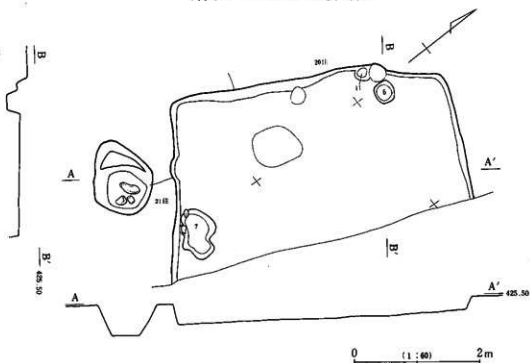
XNW14dを中心にして検出し、全体を調査した。中世の11号住居址に切られ、弥生時代中期の溝址22、平安時代の26号住居址を切る。9.0×8.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は、N 118° Eを示す。壁高は42～16cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南西壁と北東壁の一部は段をもつ。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1～P4で、P4は不整形である。床面の中央部から南西壁際へ、周溝状の小溝が一部断絶しながら5.4×3mの長方形に検出された。間仕切りの役割と考えられる。カマドは南東壁中央に位置する石芯粘土カマドで、両袖に15ヶの石を用い、両袖とも石を二重に使っていた。焚口部の焼土は多く、一部の壁面とともに焼け固まって堅くなっていた。両袖の間が1.3mを測る、規模が雄大なカマドである。土層をみると、壁際に黄色粘土が層に入っている。意図的に埋められたと考えられ、壁面の構造と関連する可能性が高い。

遺物は比較的多く、覆土中から床面上で出土した。土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏・甃・長頸壺・円面碗、灰釉陶器碗・皿・蓋・長頸壺、刀子、白玉等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



挿図70 DUG VI 21号住居址



挿図71 DUG VI 22号住居址

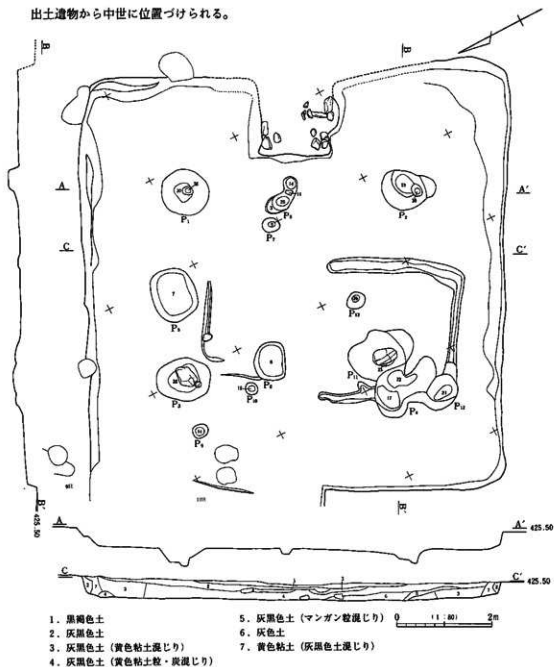
㊦ 24号住居址 (挿図74)

X#W14uを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の溝址20を切り、平安時代の25号住居址に切られる。4.5×4.3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN102° Eを示す。

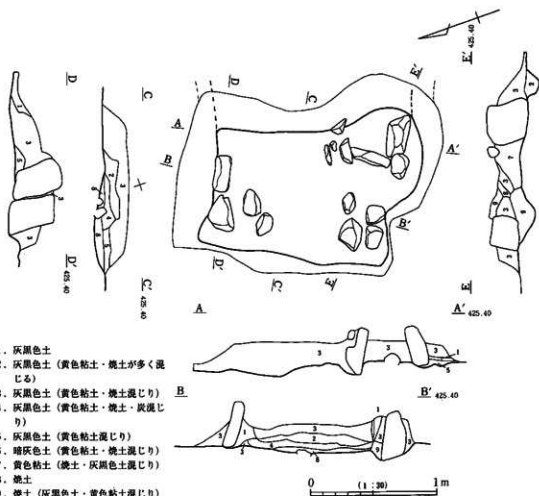
壁高は15~1cmを測り、上部を削平されている。床面は全体に軟らかく不良である。支柱穴は不明である。カマドは北東隅に位置する石芯粘土カマドで、左袖に3ヶ、右袖に2ヶの石を用い、小さな石で補強していた。粘土はあまり認められず、焚口部の焼土は少ない。

出土遺物は少なく、山茶碗・刀子がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。



挿図72 DUG VI 23号住居址



1. 灰黒色土
2. 灰黒色土 (黄色粘土・焼土が多く混じる)
3. 灰黒色土 (黄色粘土・焼土混じり)
4. 灰黒色土 (黄色粘土・焼土・炭混じり)
5. 灰黒色土 (黄色粘土混じり)
6. 暗灰色土 (黄色粘土・焼土混じり)
7. 黄色粘土 (焼土・灰黒色土混じり)
8. 焼土
9. 焼土 (灰黒色土・黄色粘土混じり)

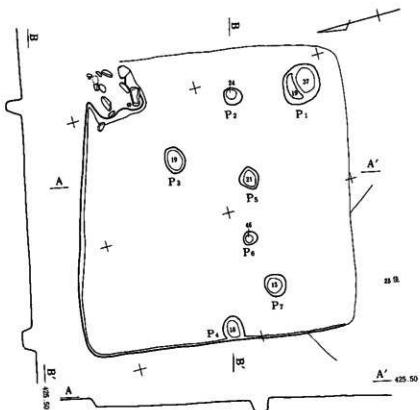
挿図73 DUG VI 23号住居址カマド

㊦ 25号住居址 (挿図75)

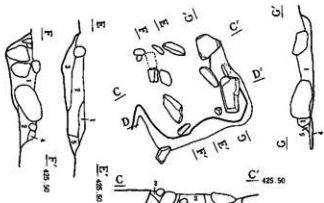
XW12tを中心にして検出し、全体を調査した。中世の24号住居址に切られる。4.3×5.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN139° Eを示す。壁高は10~1cmを測り、上部を削平されている。床面は全体に軟らかく不良である。カマドは南東壁中央に位置し、焚口部の焼土が残るのみで、構造等を把握することはできなかった。

出土遺物は極めて少なく、須恵器甕・坏、焼成粘土等がある。また、置カマドの破片と考えられる遺物が出土した。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



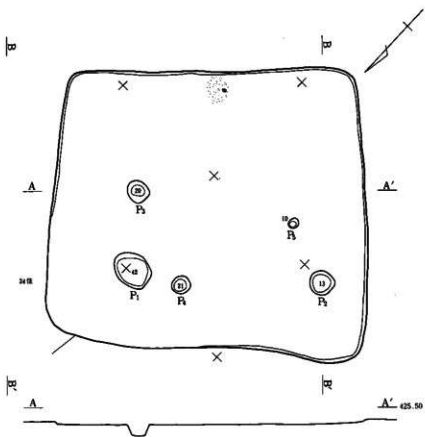
0 (1:60) 2m



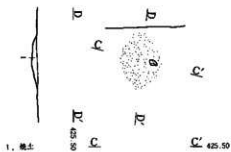
1. 灰褐色土 (暗茶褐色土混じり)
2. 灰褐色土 (焼土・炭混じり)
3. 灰褐色土 (焼土混じり)
4. 焼土 (灰褐色土・炭混じり)
5. 炭 (焼土・灰褐色土混じり)

0 (1:30) 1m

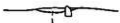
挿図74 DUG VI 24号住居址



0 (1:60) 2m



1. 遗址



0 (1:30) 1m

插图75 DUG VI 25号住居址

㊦ 26号住居址 (挿図76)

XNX16bを中心にして検出し、全体の3/4程を調査した。平安時代の23号住居址に切られ、奈良時代の27号住居址を切る。北東南西方向の長さが5.0mの竪穴住居址である。壁高は38～28cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。P5は浅く窪んで、編物用の石錘14ヶがおいてあった。

出土遺物は覆土中に石とともに入っていた。土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏、灰釉陶器長頸壺・碗、編物用の石錘、鉄器・鉄滓・フイゴ羽口等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

㊧ 27号住居址 (挿図76)

XNX17aを中心にして検出し、全体の1/3程を調査した。平安時代の24号住居址に切られ、南東側が水田の造成で削平され、古墳時代後期の溝址20を切る。北東南西方向の長さが4.7mの竪穴住居址である。壁高は36～27をcm測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。

出土遺物は少なく、須恵器甕・坏等がある。

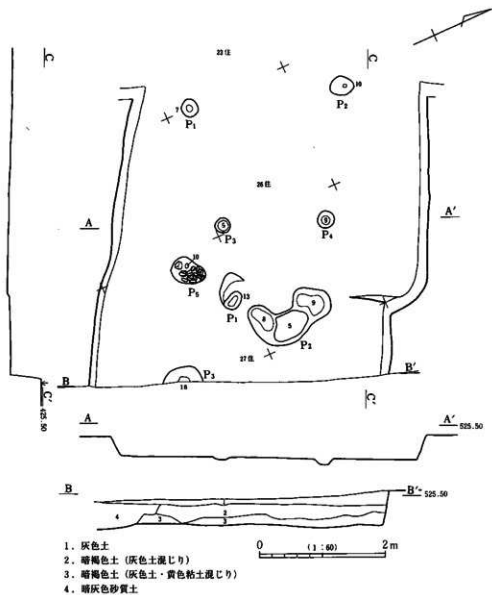
出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

㊨ 28号住居址 (挿図77)

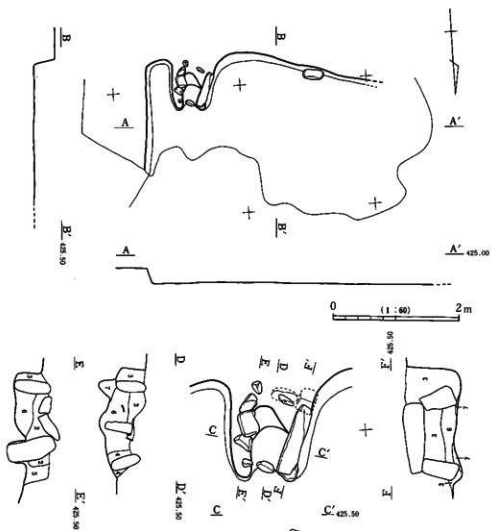
XNW16wでカマドを検出し、竪穴住居址であることが分かった。溝址22の覆土中につくられていて当初溝址20を掘り下げたため、北側・西側の住居址範囲や床面は確認できなかった。古墳時代後期の溝址20を切る。主軸方向はN86°Wと推定される。壁高は39～19cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は確認できた細線で示した内側はたたき状に堅く良好である。カマドは南壁南東隅寄りに位置する石芯粘土カマドで、両袖は2ヶの石を置き、その上に細長い石を差し渡しで乗せて袖としている。ただし、左袖の上に乗せた石は割れている。中央部にも石が立ててあり、支脚石も確認できた。焚口部の焼土は少ない。煮炊きに使用した甕が中央部を主体に認められた。

出土遺物は土師器甕・坏が多く、須恵器坏、釘等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



挿図76 DUG VI 26号・27号住居址



1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 (焼土混じり)
3. 暗褐色土 (暗灰褐色土混じり)
4. 暗灰褐色土
5. 暗灰褐色土 (暗褐色土混じり)
6. 暗灰褐色土 (焼土・炭混じり)
7. 暗黄褐色土 (暗褐色土混じり)
8. 炭
9. 焼土

挿図77 DUG VI 28号住居址

(3) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址4 (挿図78)

XII X6pを中心にして検出した。北東側が土管川により削平された崖となっており、桁行の規模の不明な掘立柱建物址である。梁行は5.4m、柱間は桁行で2.4・1.6m、梁行で2.1・1.2mを測る。桁行方向はN41° Eを示す。柱掘り方は丸みを帯びた長方形で、径204~82cm・深さ42~8cmを測る。P7は2本の柱を埋めており、P6は一部粘土採掘坑に切られる。

時期の特定できる遺物の出土はない。

② 掘立柱建物址5 (挿図79)

XII X25sを中心にして検出した。南隅が用水路で未調査となり、北隅が粘土採掘坑に切られる。5×6間の掘立柱建物址で、桁行10.2・梁行7.1mを測る。柱掘り方は合計7本確認できなかった。柱間は桁行で1.0・0.8m、梁行で0.8・0.6mを測り、桁行方向はN59° Eを示す。柱掘り方は丸みを帯びた長方形で、径102~76cm・深さ38~15cmを測る。P1・P2・P3・P6・P7・P8・P10・P11・P15は底で柱痕が確認できた。

時期の特定できる遺物の出土はない。

③ 掘立柱建物址6 (挿図80)

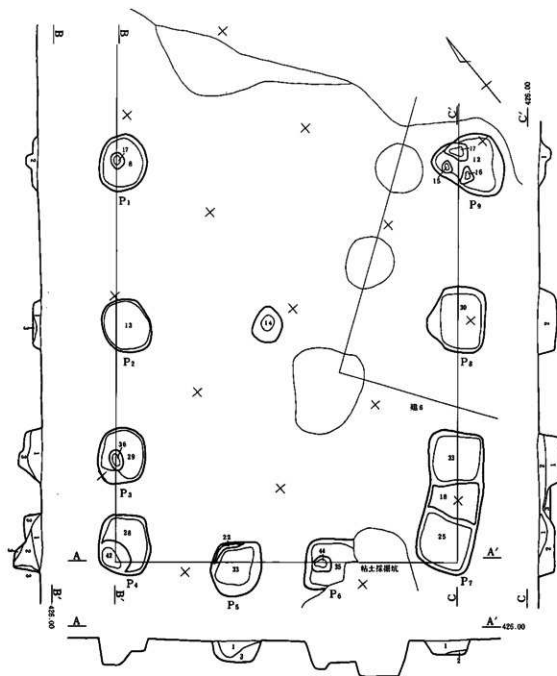
XII X8oを中心にして検出した。北東側が土管川により削平された崖となっており、桁行の規模の不明な掘立柱建物址である。梁行の柱掘り方は確認できなかった。梁行は5.6m、柱間は桁行で1.7mを測る。桁行方向はN57° Eを示す。柱掘り方は楕円形で、径84~70cm・深さ20~9cmを測る。P6は他の穴と重複している。

時期の特定できる遺物の出土はない。

④ 掘立柱建物址8 (挿図81)

XII X6gを中心にして検出した。粘土採掘坑に切られる。3×3間の掘立柱建物址で、桁行4.5・梁行4.2mを測る。柱掘り方は西隅で2本確認できなかった。柱間は桁行で1.5・1.3m、梁行で1.6・1.3・1.2mを測り、桁行方向はN26° Wを示す。柱掘り方は楕円形で、2本の柱が埋められるP2は長方形を呈する。径210~87cm・深さ58~41cmを測る。P1・P2・P4・P5・P7・P8は柱痕が確認できた。

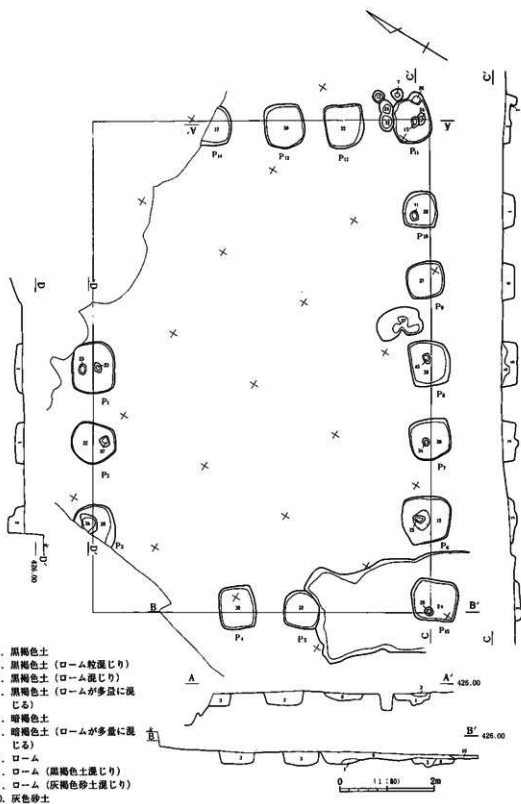
時期の特定できる遺物の出土はない。



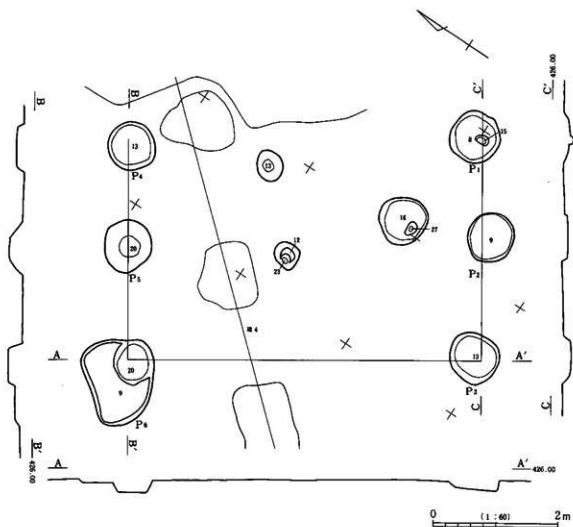
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土 (黄褐色土混じり)
3. 黄褐色土 (黒褐色土混じり)

0 (1:60) 2m

挿図78 DUG VI 掘立柱建物址4



挿図79 DUG VI 掘立柱建物址 5

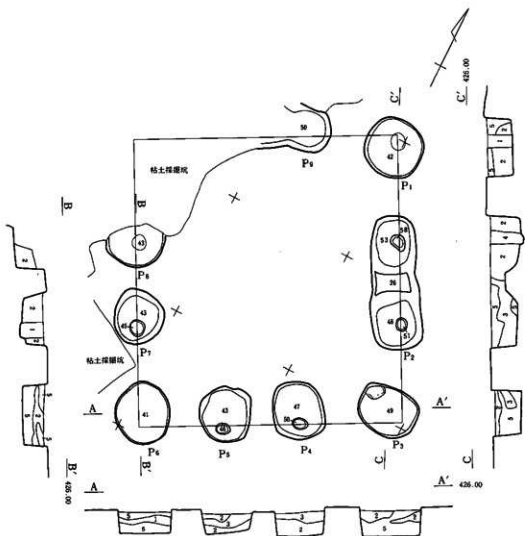


挿図80 DUG VI 掘立柱建物址 6

⑤ 掘立柱建物址 9 (挿図82)

ⅡX23I付近で7ヶの柱穴が「L」字状にならなかったので掘立柱建物址とした。粘土採掘坑に切られ、西側は確認できなかった。3×3間と推定される掘立柱建物址で、桁行4.5・梁行4.2mを測る。柱間は桁行で1.5・1.3m、梁行で1.3・0.8・0.6mを測り、桁行方向はN49°Wを示す。柱掘り方は楕円形で、径68~26cm・深さ19~6cmを測る。規模や柱掘り方の様相が他の掘立柱建物址と異なり、時期も異なる可能性がある。

時期の特定できる遺物の出土はない。



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. 暗灰色土 | 4. 灰色土 (黄色粘土混じり) |
| 2. 暗灰色土 (黄色粘土混じり) | 5. 黄色粘土 (暗灰色土混じり) |
| 3. 暗灰色土 (黄色粘土が多く混じる) | |

挿図81 DUG VI 掘立柱建物址 8

⑥ 掘立柱建物址10 (挿図83)

XN X5dを中心にして検出した。掘立柱建物址 8・粘土採掘坑に切られ、奈良時代の13号住居址・中世の14号住居址に切られる。4×3間の掘立柱建物址で、桁行8.2・梁行5.5mを測る。柱掘り方は南東側で4本確認できなかった。柱間は桁行で2.05m、梁行で2.0・1.5mを測り、桁行方向はN 2° Wを示す。柱掘り方は不整形で、径110~72cm・深さ55~15cmを測る。

時期の特定できる遺物の出土はない。

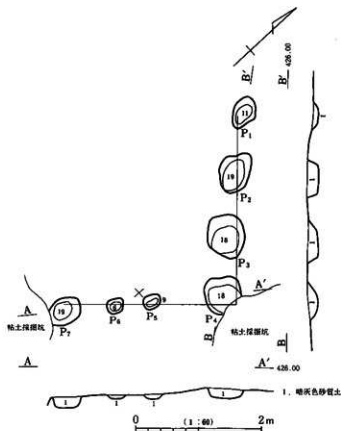
⑤ 掘立柱建物址11 (挿図84)

XNW1yを中心にして検出した。奈良時代の13号住居址に切られ、南西側が道路で未調査となる。2×3間と推定される掘立柱建物址で、桁行5.4・梁行3.7mを測る。柱廻り方は切り合いや未調査で5本確認できなかった。柱間は桁行で1.8mを測り、桁行方向はN35。Eを示す。柱廻り方は長方形で、径112~82cm・深さ48~30cmを測る。

P2・P3は柱痕が確認できた。

P6から須恵器環が出土した。

出土遺物と切り合い関係から奈良時代後半に位置づけられる。



挿図82 DUG VI 掘立柱建物址 9

(4) 溝 址

① 溝址 1 (挿図85)

ⅡX23aからⅡX21dにかけて検出した。南側の第Ⅰ次調査溝址1と北西側の第Ⅳ地区溝址1に連続する。ローマウンドを切り、粘土採掘坑に切られる。調査延長は7mで、北西側では上層を水田の造成で削平されていた。方向はほぼ直線的にN30°Wを示す。幅100~10cm・深さ47~5cmを測り、断面形は不定形で、深くえぐられた箇所や2段に落ち込みをなす部分が認められた。覆土は砂が主体となり、水が流れたことを物語っている。

出土遺物は弥生時代中期の壺・甕と打製石斧等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

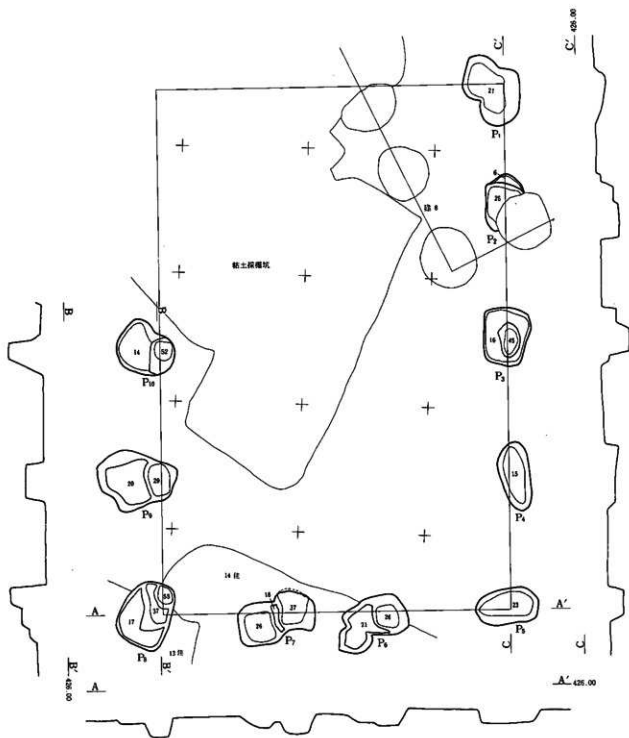
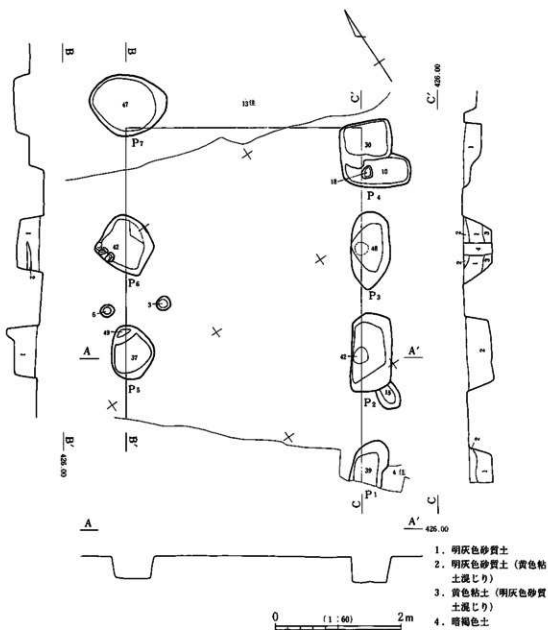
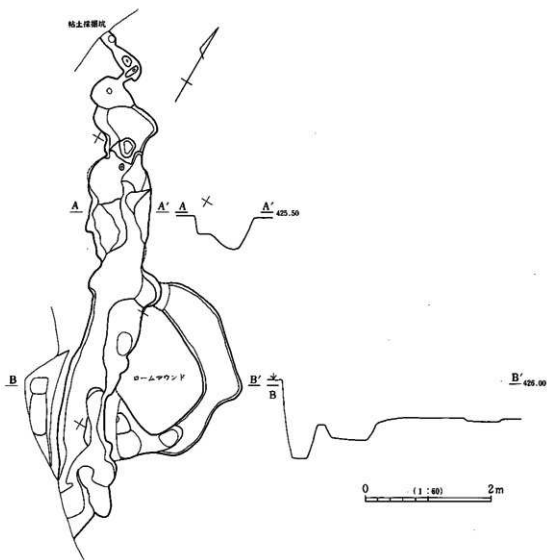


插图83 DUG VI 掘立柱建物址10



挿図84 DUG VI 掘立柱建物址11



挿図85 DUG VI 溝址 1

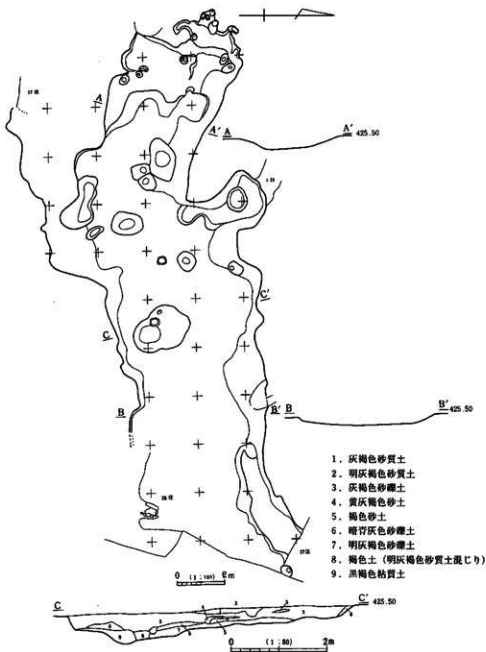
② 溝址20 (挿図86)

XNW16wからXNW6xにかけて検出した。奈良時代の14号住居址、平安時代の16号・17号・28号住居址、中世の24号住居址に切られる。調査延長は22mで、北西側の第Ⅷ地区、東側の第Ⅸ地区の溝址20に連続する。第Ⅵ地区西側では検出できなかったが、水田の造成や粘土探掘坑によって削られたと考えられる。方向はほぼ直線的で、N90°Wを示す。幅7～4m・深さ40～30cmを測り、断面形は不定形で、深くえぐられた箇所や2段に落ち込みをなす部分が認められた。覆土は砂が主体となり、水が流れたことを物語っている。

出土遺物は多く、土器器甕・瓶・坏・高坏、須恵器甕・甕・埴瓶・長頸壺・坏・高坏、灰釉陶

器碗、鉄器・銅器・鉄滓等がある。

出土遺物は古墳時代に主体に、奈良時代から平安時代である。奈良時代から平安時代の壜穴住居址と重複していることもあり、主体となる遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



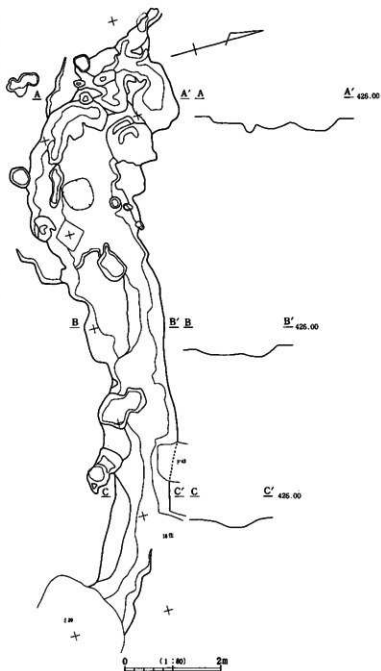
挿図86 DUG VI 溝址20

③ 溝址21 (挿図87)

ⅩⅦW9yからⅩⅦX4bにかけて検出した。奈良時代の13号・15号住居址、平安時代の18号住居址、中世の14号住居址に切られる。調査延長は12.4mで、東側は溝址20と重複し、西側は水田の造成や粘土採掘坑によって削られたと考えられる。方向は緩く曲がりながら、N75°Wを示す。幅240～190cm・深さ22～16cmを測り、深くえぐれる箇所では58cmとなる。断面形は不定形で、深くえぐられた箇所や2段に落ち込みをなす部分が認められた。覆土は砂が主体となり、水が流れたことを物語っている。遺構の状況や覆土が似通っていてかつ同一時期の溝址20と関連が考えられる。溝址20の分流とするのが妥当といえる。

出土遺物は多く、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・坏・高坏・甕、鉄滓等ある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



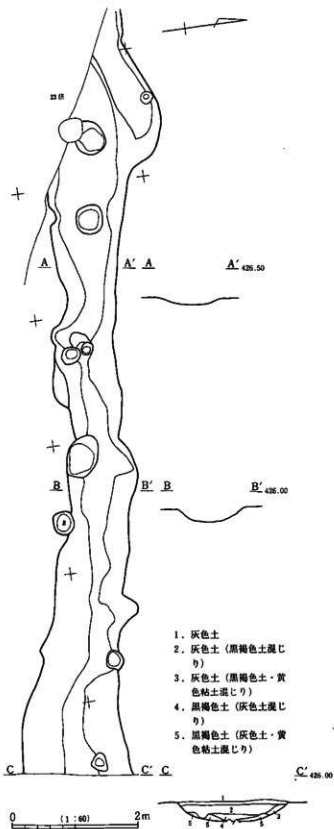
挿図87 DUG VI 溝址21

④ 溝址22 (挿図88)

IX X19eからIX X13fにかけて検出した。奈良時代の9号住居址、平安時代の23号住居址、中世の11号住居址に切られ、東側は水田の造成で削平される。調査延長は12mで、西側は検出できなかったが、第VIII地区溝址22に連続する。方向はほぼ直線的で、N82° Wを示す。幅174~68cm・深さ32~8cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は灰色土・黒褐色土が主体で、水が流れた痕跡は認められない。

出土遺物は、弥生中期土器壺・甕、打製石斧、鉄滓等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



挿図88 DUG VI 溝址22

(5) 土坑・柱穴

柱穴はほぼ全体に認められる。ただし、水田による削平を受け、かつ粘土探掘坑がある西側では少ない。壊されてしまった柱穴の存在も考慮にいれる必要がある。個々の説明は省くが、遺構図は挿図90～98ですべて掲載した。

① 土坑40（挿図89）

XII X 1bで検出し、奈良時代の13号住居址に切られる。178×108cmのゆがんだ楕円形を呈し、深さは61cmを測る。断面形は不定形である。遺構の状況が不定形で、あまり人為的な様相はみいだせない。

時期を決定する遺物は出土しなかった。

② 土坑41（挿図89）

XII X 2dで検出し、粘土探掘坑に切られる。130×125cmのゆがんで丸みを帯びた方形を呈し、深さは53cmを測る。断面形は不定形である。遺構の状況が不定形で、あまり人為的な様相はみいだせない。

時期を決定する遺物は出土しなかった。

③ 土坑42（挿図90）

XII X 10cで検出した。130×120cmの丸みを帯びた方形を呈し、深さは20cmを測る。中央部に15cm前後の石12ヶが認められ、断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は須恵器片3点・灰軸陶器片1点がある。

時期を決定する遺物は出土しなかった。

④ 土坑43（挿図90）

XII X 8aで検出し、古墳時代後期の溝址21を切る。118×80cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。断面形は逆台形をなす。

出土遺物は土師器・須恵器・フイゴ羽口がある。

主体をなす遺物が中世の土師器環であり、中世に位置づく可能性が高い。

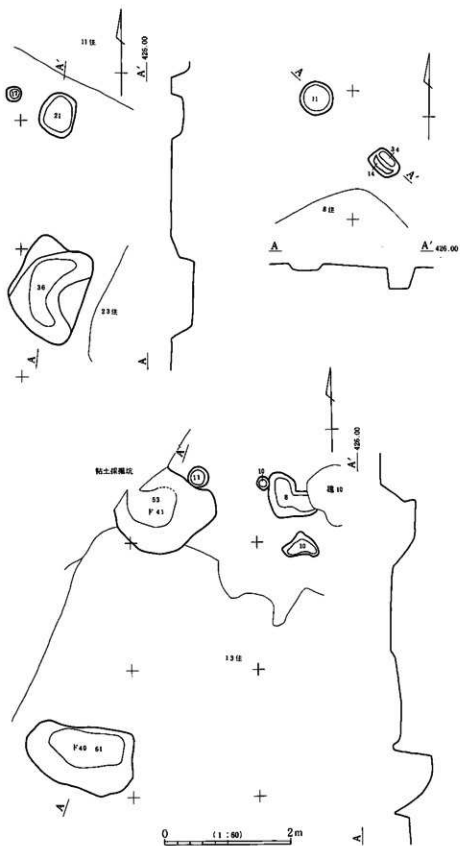


插图89 DUG VI 土坑40·41、柱穴

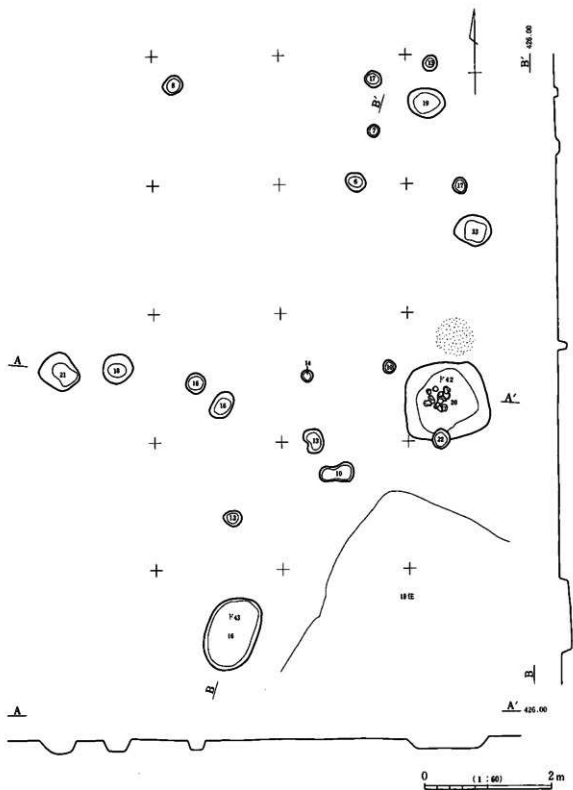
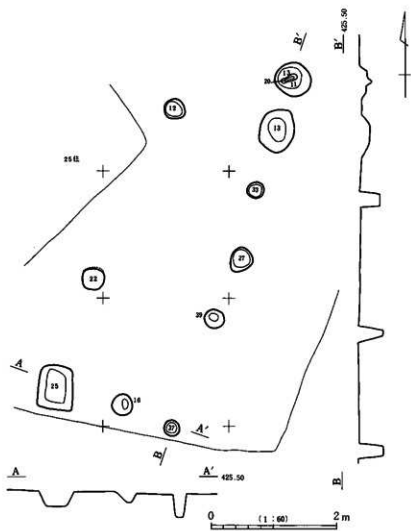
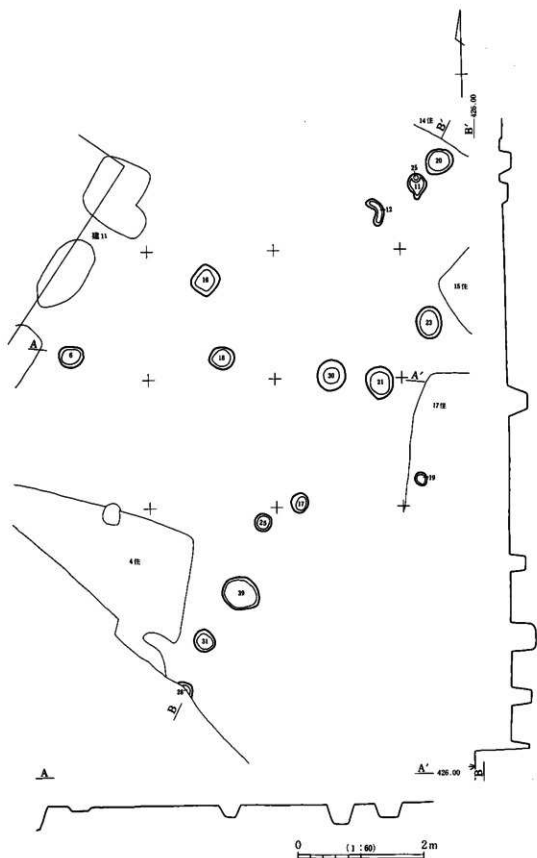


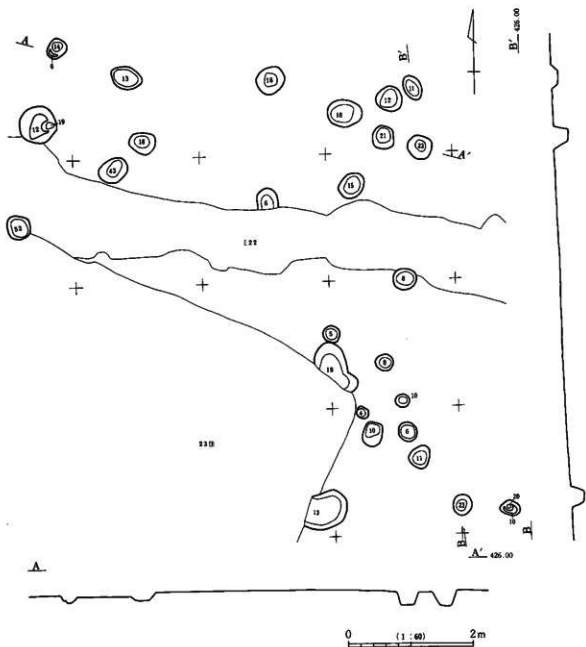
插图90 DUG VI 土坑42·43、柱穴



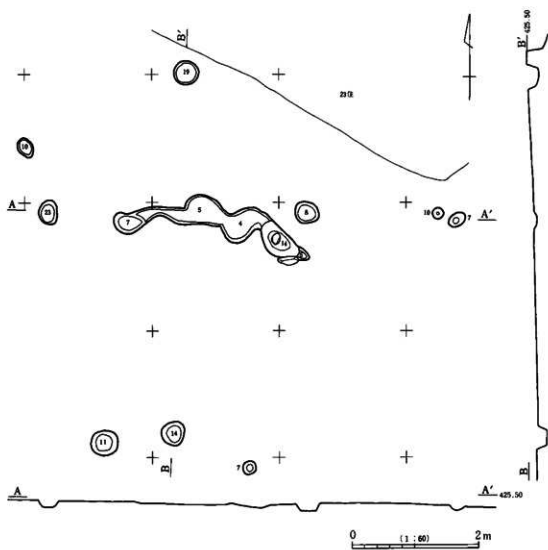
挿圖91 DUG VI 柱穴(1)



挿図92 DUG VI 柱穴(2)



挿圖93 DUG VI 柱穴(3)



挿図94 DUG VI 柱穴(4)

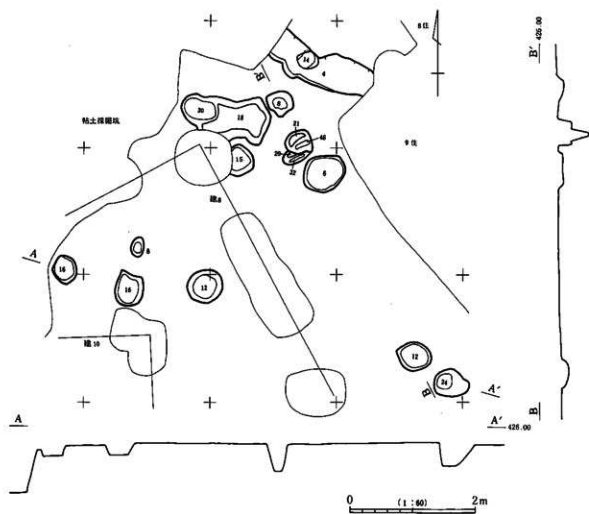


插图95 DUG VI 柱穴(5)

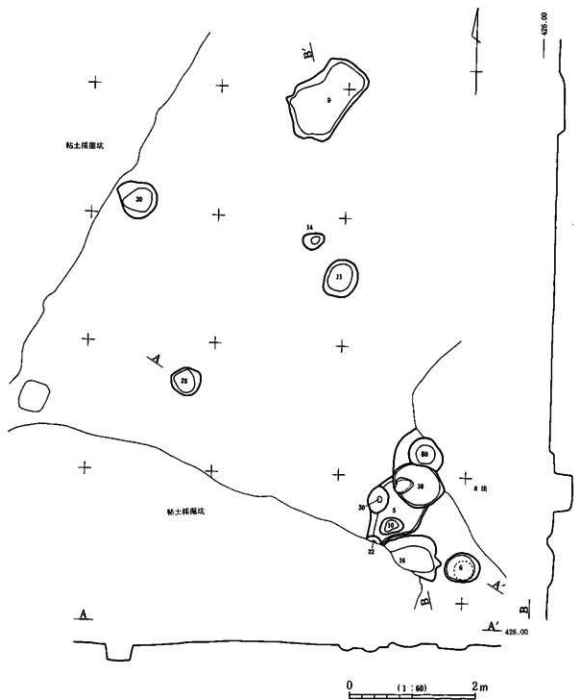
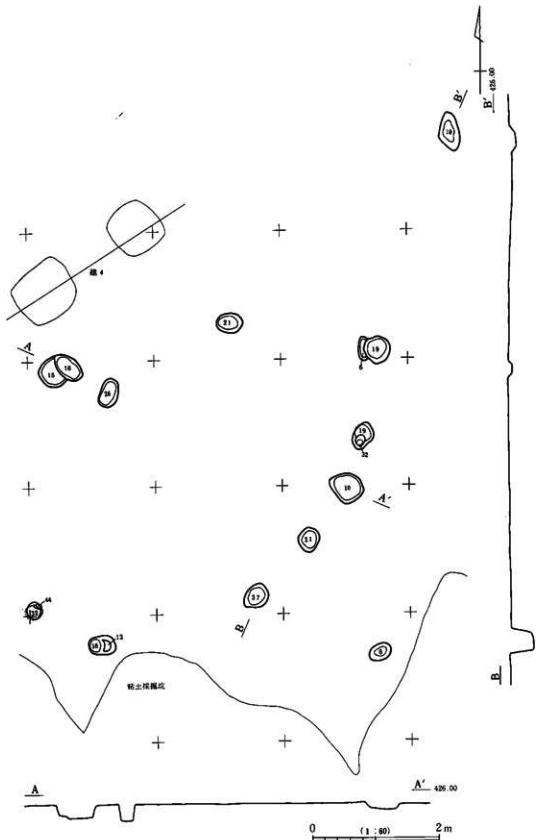
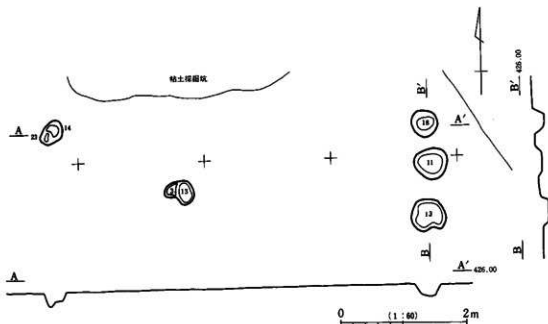


插图96 DUG VI 柱穴(6)



挿圖97 DUG VI 柱穴(7)



挿図98 DUG VI 柱穴(8)

(6) 粘土探掘坑

明治時代中頃から大正時代始めにかけて、丹保地区在住の吉川輝氏の先祖が当地で瓦を焼いていたことが伝えられている。粘土も近所で採掘していたといわれており、今次調査でその痕跡が確認された。第VI地区の西側と北西側に2箇所の粘土を採掘した穴があり、あとは埋められている。いずれも、穴がいくつも重複しており、長期間にわたる粘土採掘を物語っている。北側の粘土探掘坑の北側にも砂で埋められた落ち込みがあり、同様な穴と考えられたが、掘り下げなかった。

埋めた土の中に、古墳時代から平安時代の遺物が含まれていた。該期の遺構を破壊していると考えられ、堂垣外遺跡の全容を知る上では残念な遺構となった。



插图99 DUG VI 粘土探坑(1)

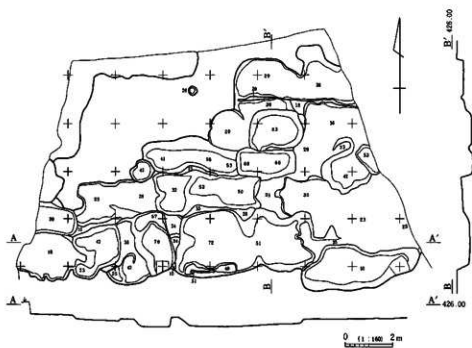
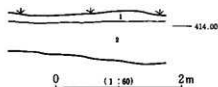


插图100 DUG VI 粘土探掘坑(2)

7) 第VII地区

(1) 基本層序



調査区北壁で示した。

1層：灰黒色砂質土（耕土）

2層：褐色土

遺構検出面は2層下の青灰色砂土である。

挿図101 DUG VII 基本土層図

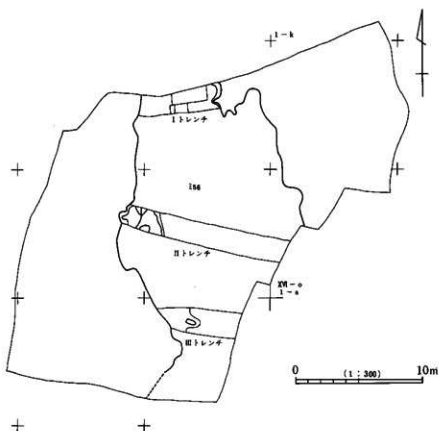
(2) 溝 址

① 溝址56 (挿図102・103)

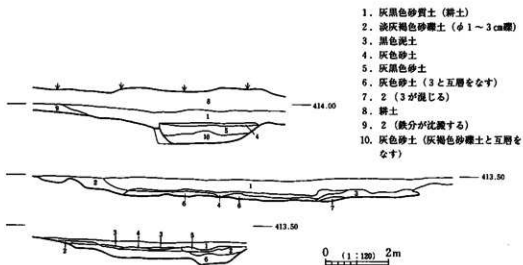
IVO21hからIVN22vにかけて、調査区中央を縦断する溝址である。3本のトレンチを設定し、試掘した結果、自然流路と判断したため、トレンチ調査のみで終了した。方向はほぼ直線的でN 22° Wを示す。幅14.9～5.9mで、調査箇所では深さは最大66cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は流れ込みと思われる縄文時代の打製石斧と時期不明の横刃型石器がある。

時期決定の根拠に欠け、時期不明である。



挿図102 DUG VII 全体図



挿図103 DUG VII 溝址56土層図

8) 第Ⅷ地区

(1) 基本層序

溝址27東側の南に面する壁面で示した。

- 1層：青灰色土、水田の耕土である。
- 2層：青灰色土（鉄分沈澱）、水田の床土
- 3層：暗青灰色土、旧水田面
- 4層：灰黒色土
- 5層：灰色砂質土

遺構検出面は4・5層の黄色粘土であるが、調査区北側の溝址が多い箇所では粘質が弱くなって黄色土となる。



挿図104 DUG VII 基本土層図

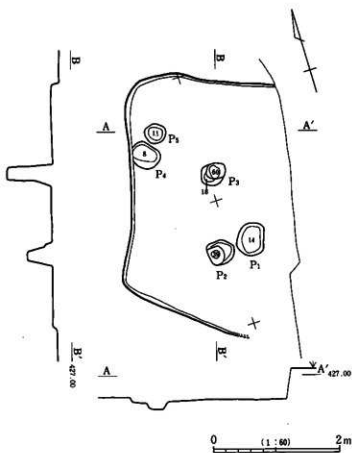
(2) 竪穴住居址

① 29号住居址（挿図105）

ⅡY22cを中心にして検出し、東側が水路で全体の1/2程を調査した。古墳時代後期の37号・47号住居址を切る。南北方向が3.8mを測る竪穴住居址である。壁高は13～2cmを測り、上面を削平されたのか浅い。床面はほんの一部でたたき状に堅いが、全体に軟弱で不良である。主柱穴は不明で、床面上のP1～P5の役割も不明である。

遺物は北側の床面上から覆土にかけてまとまって出土した。ほぼ同じつくりの土師器高足高台の坏が多く、他に山茶碗碗がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。



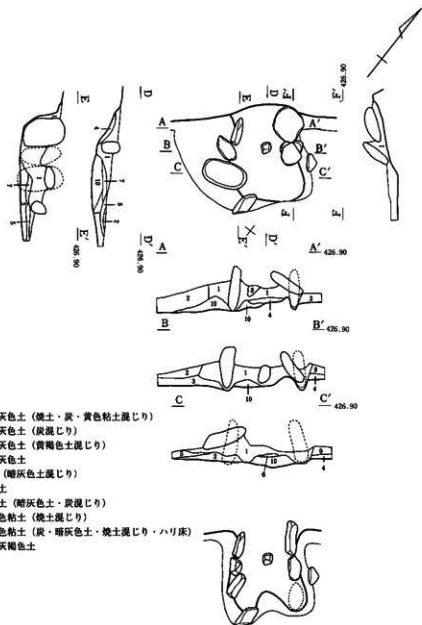
挿図105 DUG VII 29号住居址

② 30号住居址 (挿図106・107)

X15yを中心にして検出した。古墳時代後期の38号住居址・奈良時代の31号住居址に切られる。4.6×5.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN39° Wを示す。壁高は20～1cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が31号住居址に切られる箇所と南東側を除いて認められた。本来は全周していた可能性がある。幅34～14cm・深さ15～3cmを測る。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1・P2・P5で、南隅の主柱穴は穴に切られて不明である。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、表土除去の時に重機のツメで壊されて、石が本来の位置から移動してしまった。石がおかれた位置は特定できたので復元図を作成して断ち割りの土層図の下に割りつけておいた。両袖に3ヶずつの石を用いている。焚口部の焼土は少ない。

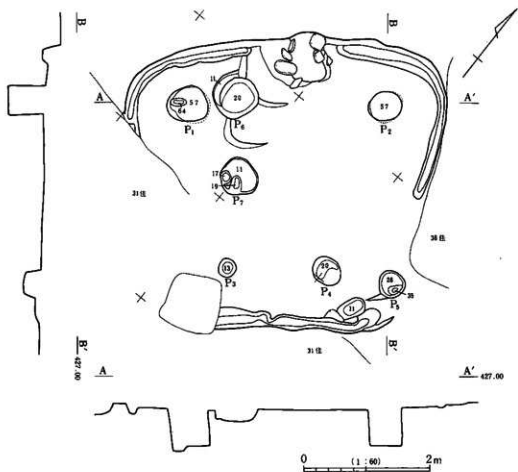
出土遺物は少なく、土師器壺・坏・高坏、須恵器等がある。

出土遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。



1. 暗灰色土 (焼土・炭・黄色粘土混じり)
2. 暗灰色土 (炭混じり)
3. 暗灰色土 (黄褐色土混じり)
4. 暗灰色土
5. 炭 (暗灰色土混じり)
6. 焼土
7. 焼土 (暗灰色土・炭混じり)
8. 黄色粘土 (焼土混じり)
9. 黄色粘土 (炭・暗灰色土・焼土混じり・ハリ床)
10. 黄灰褐色土

挿図106 DUG VII 30号住居址カマド



挿図107 DUG W 30号住居址

③ 31号住居址 (挿図108・109)

X15Wを中心にして検出した。古墳時代後期の30号・48号住居址と掘立柱建物址18を切る。南側は水田の造成で削平されている。主軸に直交する方向の長さは推定で、9.0×9.4mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN83°Wを示す。壁高は25~2cmを測り、残存部分は少ない。床面は一部黄色粘土のハリ床となるが、全体に軟弱で不良である。北壁・西壁・東壁のやや内側の床面上に8ヶの石を検出した。また、東壁中央部は外側に張り出して2ヶの石が確認できた。その間には小さな石や須恵器破片がおかれていた。竪穴内に礎石を持つと考えられ、柱間は北側で2.4・1.9m、東側で2.0・1.9・1.2mを測る。東側の張り出し部は入り口施設と考えられる。P10は床面上に焼土があり、掘り下げると炭・焼土が混じる暗灰褐色土で埋めてあった。底は灰色土に暗灰色土が混じる土で堅くなっていた。意図的に埋められたと考えられる。その他に役割の特

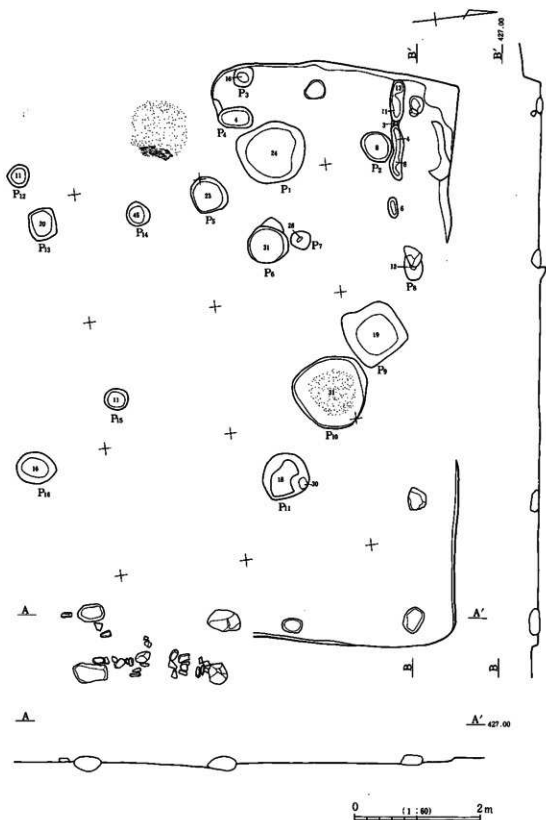
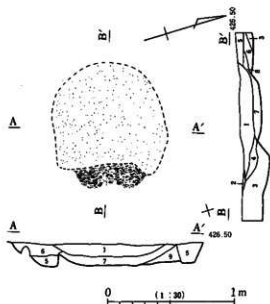


插图108 DUG VII 31号住居址

定できる穴はない。カマドは西壁中央に位置し、焚口部の焼土のみ残っていた。火床は皿状に窪んで下に黄色土が張っており、焼土が顕著に認められた。また、断ち割り調査で袖石の痕跡と考えられる部分が認められたので、石芯カマドと考えられる。

出土遺物は少なく、土師器甕、須恵器蓋・環・甕等がある。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。



1. 焼土
2. 炭 (焼土・暗灰色土混じり)
3. 暗灰色土
4. 暗灰色土 (黄色粘土粒混じり)
5. 暗灰色土 (焼土・黄色粘土混じり)
6. 暗灰色土 (焼土混じり)
7. 黄色粘土
8. 黄色粘土 (焼土・暗灰色土がわずかに混じる)
9. 暗褐色土 (黄色粘土粒混じり)

挿図109 DUG VII 31号住居址カマド

④ 32号住居址 (挿図110)

ⅩⅩY16bを中心にして検出し、ほぼ全体を調査した。古墳時代後期の38号住居址に切られる。6.1×6.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN19° Wを示す。壁高は22～2cmを測り、緩やかな壁面をなす。周溝が38号住居址に切られる箇所と北東隅付近を除いて認められた。幅24～16cm・深さ24～2cmを測る。床面は全体に軟弱で不良である。主柱穴はP1～P4で、底部が主軸に直交する方向に細長く窪み、割り材使用の柱が考えられる。カマドは北西壁中央やや北隅よりに位置する粘土カマドで、残存状態が悪く本来の形を把握するには至らなかった。焚口部の焼土は少ない。

出土遺物は少なく、土師器甕・環・高環等がある。

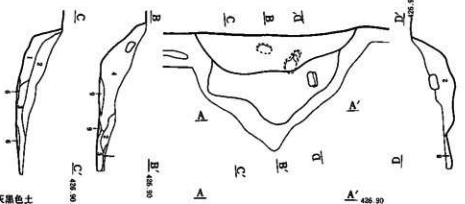
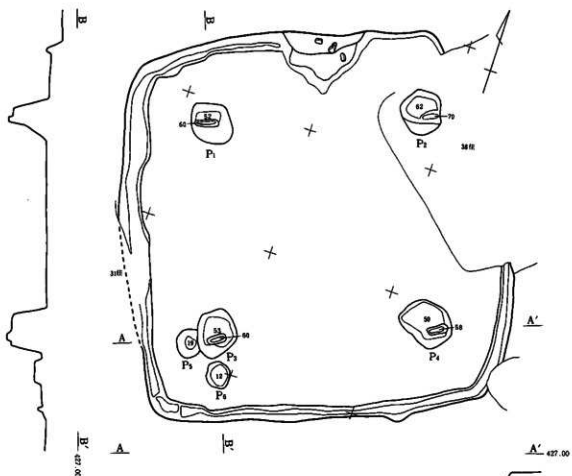
出土遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。

⑤ 33号住居址 (挿図111)

ⅩⅩX18vを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の47号・49号住居址を切る。3.5×3.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、長軸方向はN48° Eを示す。壁高は18～12cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は黄色粘土のハリ床であるが、軟らかく不良である。主柱穴・カマドもなく、P1～P3も本址に直接関連しないと考えられる。

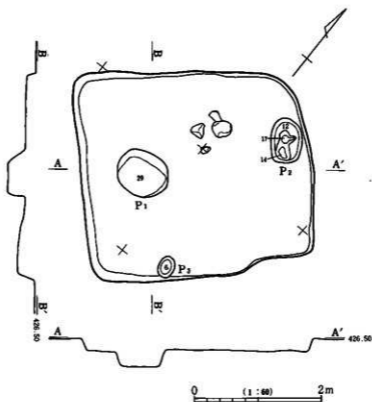
出土遺物は少なく、土師器甕・高環、須恵器蓋・環があり、蓋には「上」の刻書が認められた。

出土遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。



1. 灰黒色土
2. 灰黒色土 (黄色粘土・焼土混じり)
3. 灰黒色土 (焼土がわずかに混じる)
4. 灰黒色土 (焼土・炭・黄色粘土混じり)
5. 灰黒色土 (焼土・炭混じり)
6. 黄色粘土
7. 黄色粘土 (焼土・灰黒色土混じり)
8. 黄色粘土 (焼土がわずかに混じる)
9. 焼土

挿図110 DUG VII 32号住居址



挿図111 DUG VII 33号住居址

⑥ 34号住居址 (挿図112・113)

II Y 16fを中心にして検出し、全体を調査した。弥生時代中期の35号住居址、古墳時代後期前半の36号住居址を切る。5.7×6.0mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN33° Eを示す。壁高は26～3 cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。周溝が北東壁中央から南西壁南隅よりまで壁下に認められた。幅30～13cm・深さ10～2 cmを測る。床面は全体に軟弱で不良である。主柱穴はP1～P4で、P2・P4は底部が主軸に直交する方向に細長く窪み、割り材使用の柱が考えられる。カマドは北西壁中央やや北隅よりに位置する粘土カマドで、粘土が残るのみで、残存状態が悪く本来の形を把握するには至らなかった。焚口部の焼土は多く、焼け固まってかたくなっていた。

出土遺物は少なく、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕、刀子、焼成粘土土等がある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。

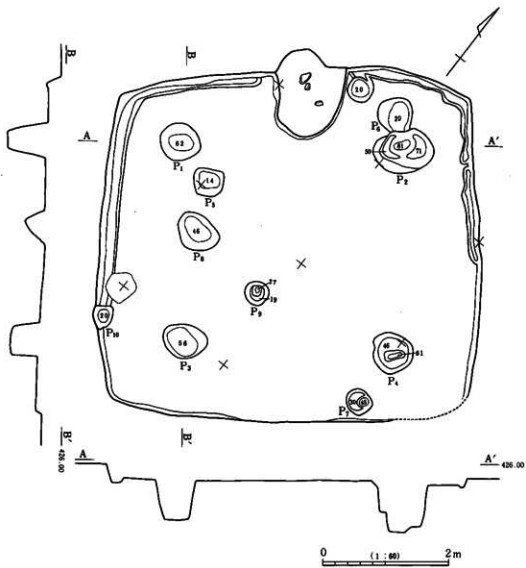
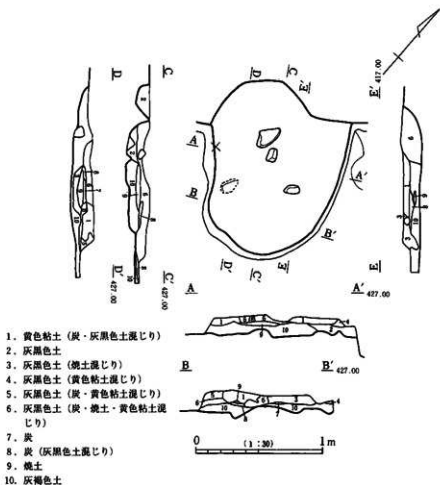


插图112 DUG VII 34号住居址



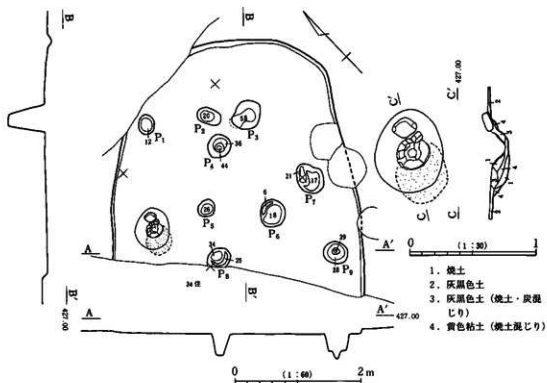
挿図113 DUG VII 34号住居址カマド

⑦ 35号住居址 (神園114)

II Y 18hを中心にして検出した。古墳時代後期の34号住居址に切られる。長軸方向の長さが3.9mの隅丸長方形の堅穴住居址である。壁高は12~2cmを測り、削平されたのかわずかに残るのみである。床面は全体に軟らかく不良である。主柱穴は不明で、P1~P9は本址に付属する穴と考えられる。炉址は北西壁寄りに位置する炉縁石を有する土器埋設炉で、床面を114×53cm掘り窪めて、壺の胴上部を逆位にして埋める。周辺に焼土が認められた。その南側のハリ床下に焼土が厚く認められた。範囲は点線で示しておいたが、地床炉の旧炉址と考えられる。炉址の位置と平面形が整合しない。壁高が浅く遺構の検出が分かりにくかったので、平面形の把握に問題があった可能性がある。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕、磨製石鏃等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



挿図114 DUG VII 35号住居址

㊦ 36号住居址 (挿図115)

II Y17eを中心にして検出した。古墳時代後期の34号住居址に切られ、全体の1/2程度を調査した。6.8×4.5mの隅丸長方形の竪穴住居址で、長軸方向はN42°Eを示す。壁高は24~13cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良である。主柱穴はP2・P3の可能性はあるが、全体形の把握ができないので断定できない。南東壁際中央に石・焼土が認められ、周辺には遺物も多く出土した。残存状態が悪く形態の把握はできなかったが、カマドであった可能性がある。

出土遺物は少なく、土師器甕・瓶・環、須恵器蓋・環、鉄器等がある。

出土遺物から古墳時代後期前半に位置づけられる。

㊧ 37号住居址 (挿図116・117)

II Y21dを中心にして検出した。古墳時代後期の41号・73号住居址を切り、掘立柱建物址14・15・17に切られるが、ほぼ全体調査した。6.9×6.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN43°Wを示す。壁高は14~6cmを測り、上面を削平されている。床面は黄色粘土のハリ床で、全体に軟らかく不良である。主柱穴はP1~P4で、底部が主軸に直交する方向に細長く窪み、割り材使用の柱が考えられる。カマドは北西壁中央に位置する粘土カマドで、残存状態が焼土・粘土

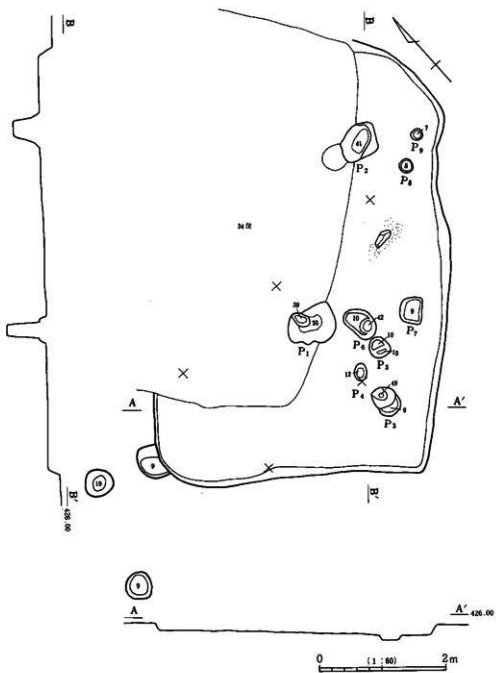
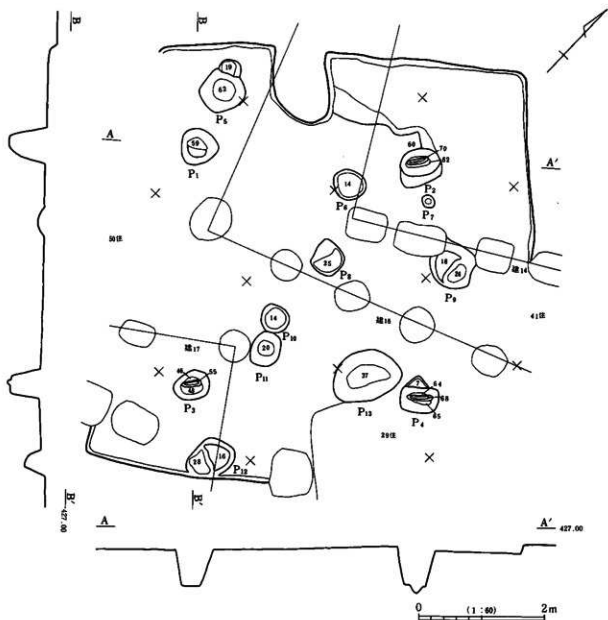
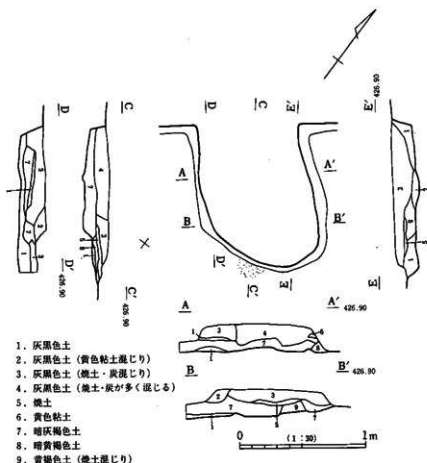


插图115 DUG VII 36号住居址

- ・炭が点在する範囲をカマドととらえ、構造を把握するには至らなかった。
- 出土遺物は、土師器甕・瓶・坏・高坏、須恵器蓋坏等がある。
- 出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



挿図116 DUG VII 37号住居址



1. 灰黒色土
2. 灰黒色土 (黄色粘土混じり)
3. 灰黒色土 (焼土・炭混じり)
4. 灰黒色土 (焼土・炭が多く混じる)
5. 焼土
6. 黄色粘土
7. 暗灰褐色土
8. 暗黄褐色土
9. 黄褐色土 (焼土混じり)

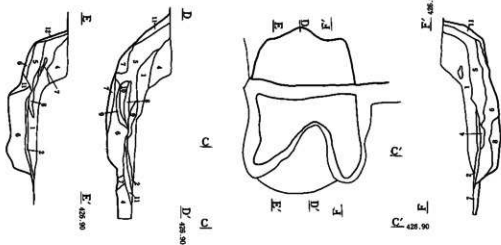
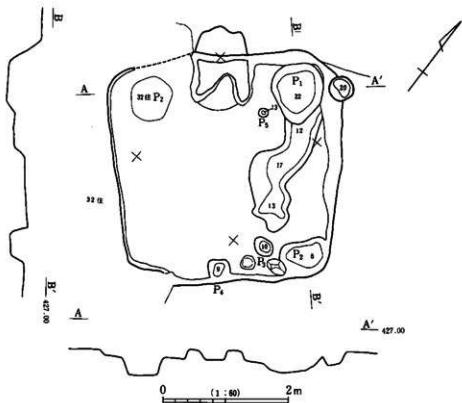
挿図117 DUG W 37号住居址カマド

⑩ 38号住居址 (挿図118)

Ⅱ Y 18eを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の32号・37号住居址を切る。3.5×3.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN40° Eを示す。壁高は31～5 cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は一部硬いが、全体に軟らかく不良である。支柱穴は不明である。カマドは北西壁中央に位置する粘土カマドで、残存状態が悪く、構造を把握するには至らなかった。焚口部の焼土は少ない。

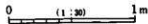
出土遺物は、土師器甕・瓶・坏・高坏、須恵器蓋坏等がある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



1. 灰黑色土 (黄色粘土・炭・焼土混じり)
2. 灰黑色土 (炭混じり・ハリ床面)
3. 灰黑色土 (炭混じり)
4. 灰黑色土 (黄色粘土混じり)
5. 灰黑色土 (焼土・炭混じり)
6. 灰黑色土
7. 黄色粘土
8. 黄色粘土 (灰黑色土混じり)

9. 黄色粘土 (焼土・炭・灰黑色土混じり)
10. 焼土
11. 暗灰褐色土
12. 暗灰褐色土 (焼土混じり)



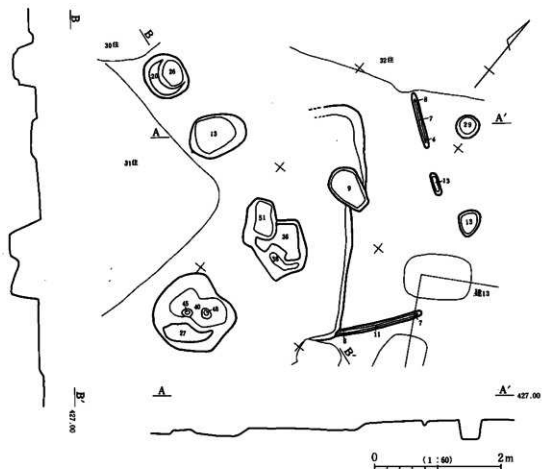
挿図118 DUG VII 38号住居址

㊦ 39号住居址 (挿図119)

XII Y 18wを中心にして検出した。奈良時代の31号住居址に切られ、北東壁が残るのみで、ほんの一部の調査にとどまった。壁高は9～2cmを測り、上面を削平されている。床面は全体に軟らかく不良である。床面上にある穴も本址に直接結びつかないと考えられ、北西壁の把握にも問題を残す。

出土遺物は極めて少なく、須恵器甕・坏等がある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



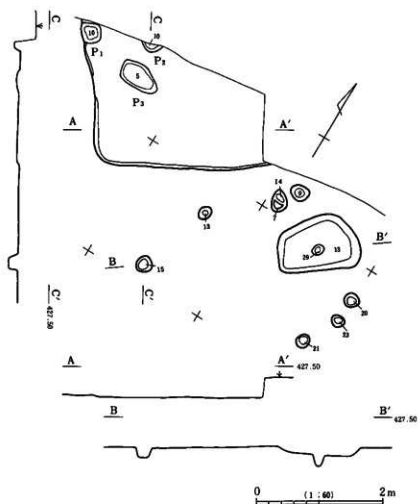
挿図119 DUG VII 39号住居址

㊦ 40号住居址 (挿図120)

II Y10hを中心にして検出し、北側が用地外で一部を調査した。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は5～2cmを測り、上面を削平されている。床面は全体に軟らかく不良である。支柱穴は不明で、床面上のP1～P3の役割も不明である。

遺物は極めて少なく、土師器甕・坏等がある。

出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。



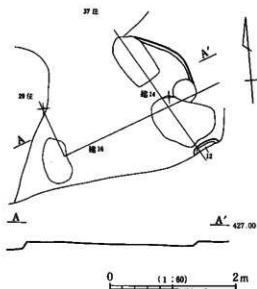
挿図120 DUG VII 40号住居址、柱穴

⑬ 41号住居址（挿図121）

Ⅱ Y22c 付近で竪穴住居址の北西隅を検出した。古墳時代後期の37号住居址・中世の29号住居址・掘立柱建物址14・16に切られる。南側は水路で未調査となり、全体形・規模・主軸方向とも不明である。壁高は9～7cmを測り、上面を削平される。床面は軟らかく不良である。

出土遺物は極めて少なく、土師器甕等がある。

出土遺物が少なく、時期は不明である。



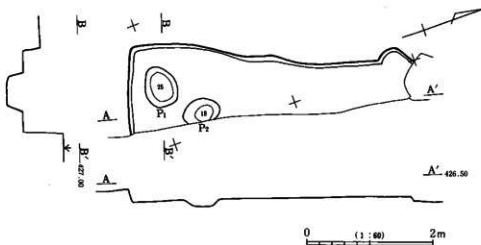
挿図121 DUG VII 41号住居址、柱穴

⑭ 42号住居址（挿図122）

Ⅱ X21u 付近で検出した。東側は水路で未調査となり、全体形・規模・主軸方向とも不明である。壁高は30～15cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は黄色粘土のハリ床で、全体に軟らかく不良である。

出土遺物は、土師器甕・坏、須恵器坏、灰釉陶器碗・皿・壺等がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



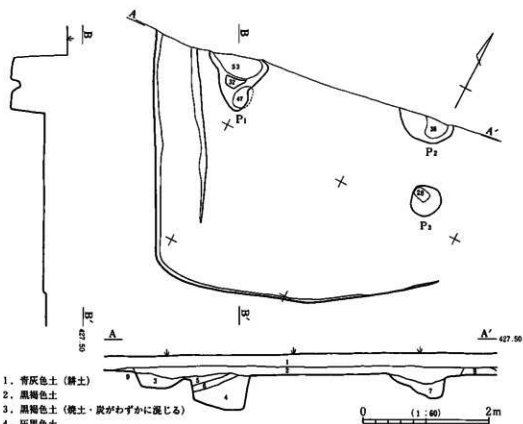
挿図122 DUG VII 42号住居址

⑬ 43号住居址 (柳園123)

ⅡY12gを中心にして検出した。北側は未調査で、全体形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は7~1cmを測り、上層は削平される。床面は全体に軟らかく不良である。南東壁から内側に幅80~68cmで深さ10~3cm窪んでいる。周溝とはやや様相が異なる。

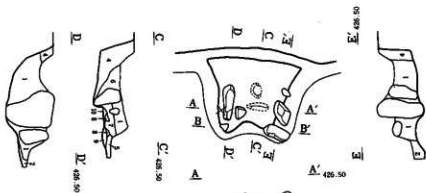
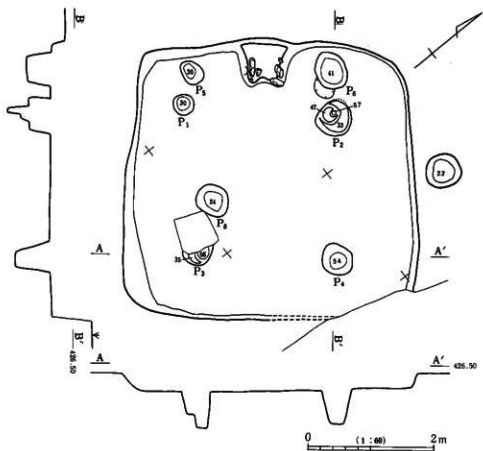
出土遺物は少なく、畿内系暗文土師器杯、須恵器蓋・杯等がある。

出土遺物から奈良時代前半に位置づけられる。

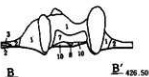


1. 青灰色土 (粘土)
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土 (粘土・炭がわずかに混じる)
4. 灰黒色土
5. 灰黒色土 (褐色土がわずかに混じる)
6. 褐色土 (灰黒色土混じり)
7. 暗灰褐色土
8. 褐色砂礫土
9. 褐色土

挿図123 DUG VII 43号住居址



1. 暗灰色土 (炭・鉄分混じり)
2. 暗灰色土 (鉄分混じり)
3. 暗灰色土 (炭・黄色粘土混じり、ハリ床)
4. 暗灰色土 (灰黒色土混じり)
5. 暗灰色土 (炭混じり)
6. 暗灰色土 (炭・焼土・黄色粘土混じり)
7. 暗灰色土 (炭・焼土混じり)
8. 炭
9. 焼土
10. 灰褐色土 (焼土混じり)



挿図124 DUG VII 44号住居址

⑩ 44号住居址 (押図124)

ⅡX18gを中心に検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代中期の溝址22を切る。4.3×4.6mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN52°Wを示す。壁高は31～20cm測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴はP1～P4で、P2・P3は途中で段がある。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、左袖に2ヶ・右袖に3ヶの石を使い、支脚用の石も認められた。覆土中に石が多く認められた。

出土遺物は少なく、土師器甕・環、須恵器環がある。

出土遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。

⑪ 45号住居址 (押図125)

ⅡX11nを中心に検出し、全体を調査した。3.4×2.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN77°Wを示す。壁高は15～2cm測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良である。P1～P4は主柱穴とは考えられない。カマドは西壁中央やや南西隅寄りに炭が分布するので、当初カマドと把握したが、断ち割り調査では焚口部の焼土や粘土は認められず、カマドの可能性は少ない。平面図ではドットで炭の範囲を示した。

出土遺物は少なく、土師器甕・環、須恵器環がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

⑫ 46号住居址 (押図126)

ⅡX14iを中心に検出し、両側が道路で全体の3/4程度を調査した。主軸に直交する方向が4.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN18°Eを示す。壁高は13～7cm測り、やや緩やかな壁面をなす。主柱穴はない。カマドは北壁中央に位置する石芯粘土カマドで、当初構造の把握ができず、左袖を確認できないままに掘り下げてしまった。右袖には2ヶの石を使っている。焚口部の焼土は極めて多い。本来のカマドの位置は点線で示した範囲と考えられる。

出土遺物は少なく、土師器甕、須恵器蓋・環等がある。

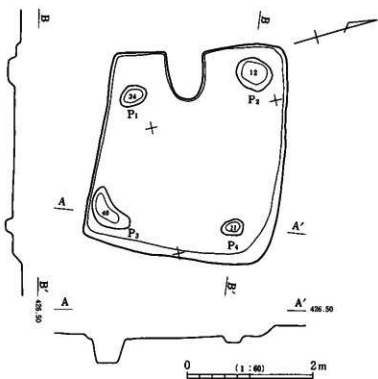
出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

⑬ 47号住居址 (押図127)

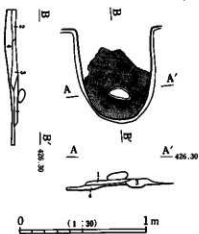
ⅡX18uを中心に検出した。奈良時代の33号住居址・掘立柱建物址18に切られ、49号住居址と重複する。南北方向の長さ4.1mの竪穴住居址である。壁高は15～9cmを測り、上面は削平されている。床面は全体に軟らかく不良である。住居址内の穴はほとんどが本址と直接関連しない。

出土遺物は少なく、土師器環、須恵器高環・長頸甕がある。

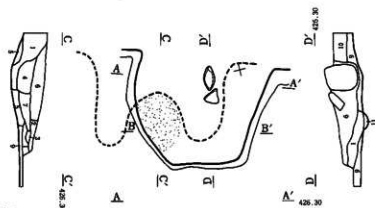
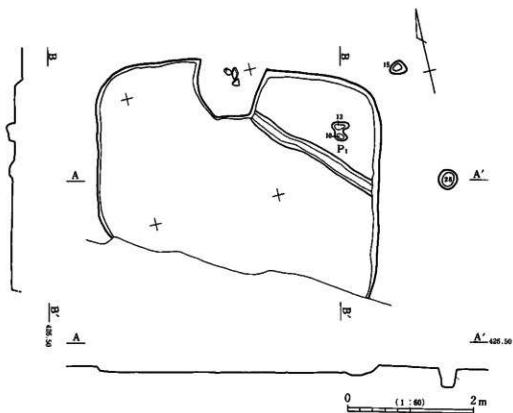
出土遺物から古墳時代後期後半に位置づけられる。



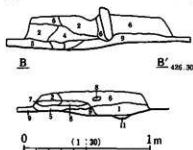
1. 炭 (灰黒色土混じり)
2. 灰黒色土
3. 灰黒色土 (炭混じり)
4. 黄褐色粘質土



挿図125 DUG VII 45号住居址



1. 暗灰色土
2. 暗灰色土 (黄色粘土・焼土・炭混じり)
3. 暗灰色土 (焼土・炭混じり)
4. 暗灰色土 (焼土混じり)
5. 黄色粘土
6. 黄色粘土 (焼土・暗灰色土混じり)
7. 焼土
8. 焼土 (黄色粘土混じり)
9. 黄褐色粘質土
10. 灰黑色土
11. 暗灰色砂質土



挿図126 DUG VII 46号住居址

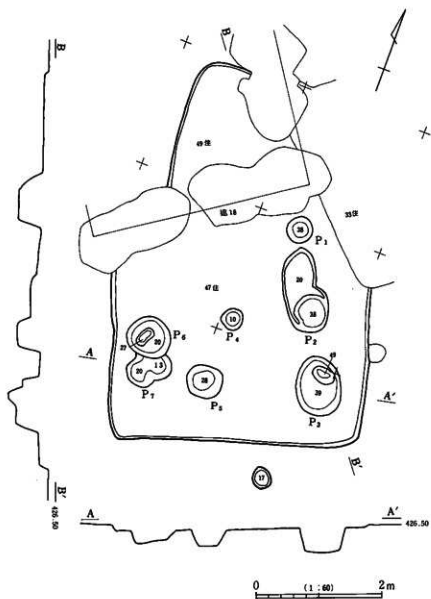
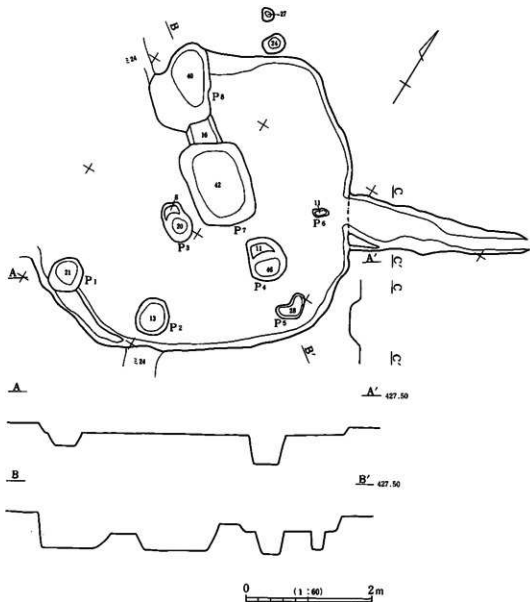


插图127 DUG VII 47号・49号住居址

㊦ 48号住居址 (挿図128)

IIIY11eを中心にして検出した。溝址24・25と重複し、全体の3/4程度を調査した。5.0×4.7 mの丸みを帯びた隅丸方形の堅穴住居址である。壁高は16~10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良である。支柱穴は不明で、P7・P8は本址を切る。

出土遺物は少なく、溝からの流れ込みと考えられる磨滅したものが多。



挿図128 DUG VII 48号住居址

㊦ 49号住居址 (挿図127)

ⅩⅩ17v付近で北西隅と西壁を調査したのみである。奈良時代の31号・33号住居址、掘立柱建物址18に切られ、古墳時代後期の47号住居址と重複する。壁高は15～7cmを測り、ほぼ垂直の壁面をなす。床面は軟らかく不良である。

出土遺物は須恵器蓋・壺片が3点ある。

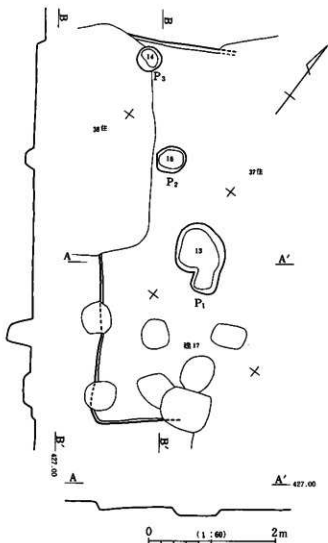
切り合い関係からすれば古墳時代後期の可能性が高い。

㊦ 73号住居址 (挿図129)

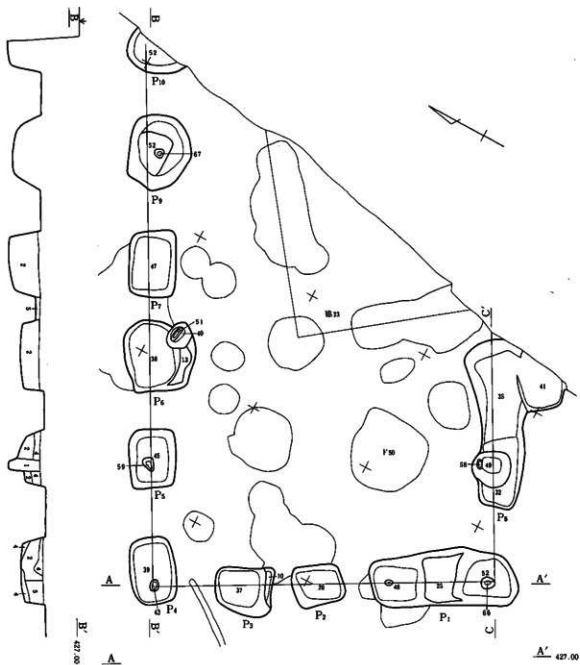
ⅩⅩY18cを中心にして検出した。古墳時代後期の37号・38号住居址、掘立柱建物址17に切られ、わずかな調査にとどまった。北西南東方向の長さが5.9mの壑穴住居址で、平面形・主軸方向とも不明である。壁高は13～5cmを測り、上面を削平されている。床面は軟らかく不良である。本址に付属する穴は不明で、P1～P3は本址を切る。

出土遺物は土師器・須恵器片がわずかに出土した。

切り合い関係からすれば古墳時代後期の可能性が高い。



挿図129 DUG VII 73号住居址



1. 灰黒色土
2. 灰黒色土(黄色粘土・黄茶褐色粘質土混じり)
3. 灰黒色土(黄茶褐色粘質土混じり)
4. 黄色粘土(灰黒色土混じり)
5. 黄茶褐色粘質土(灰黒色土混じり)

挿図130 DUG VII 独立柱建物址13

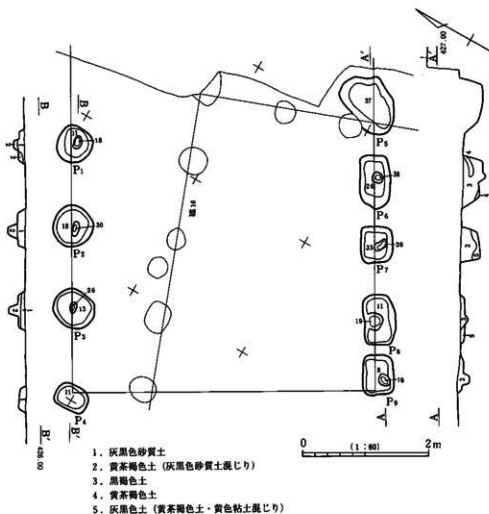
0 (1:50) 2m

(3) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址13 (挿図130)

ⅡX21xを中心にして検出し、東側が用水路で全体の3/4程度を調査した。4×5間と推定される掘立柱建物址で、桁行8.7・梁行5.4mを測る。柱間は桁行で1.9・1.1m、梁行で1.6・1.1mを測り、桁行方向はN62° Eを示す。柱掘り方は丸みを帯びた長方形で、径166~82cm・深さ66~26cmを測る。P1・P8は2本の柱を埋めている。また、P1・P4・P5・P9は底に柱痕の部分が窪んでいる。

時期を特定できる遺物の出土はない。



挿図131 DUG VII 掘立柱建物址14

② 掘立柱建物址14 (挿図131)

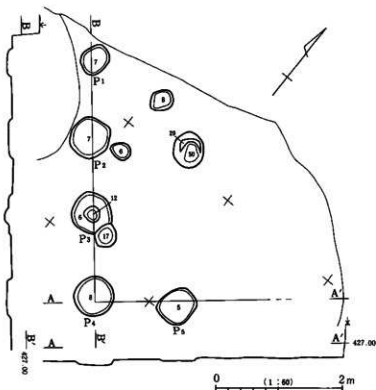
ⅡY21fを中心にして検出し、北東側が用地外で、全体規模の把握はできなかった。古墳時代の37号住居址を切る。桁行方向の柱掘り方は北西側で4本、南東側で5本確認できたが、桁行の柱掘り方は確認できなかった。柱間は桁行で1.3・1.0mを測り、桁行方向はN60° Eを示す。柱掘り方は北西側で楕円形、南東側で長方形で、径90～56cm・深さ37～11cmを測る。P1・P2・P3・P6・P7・P8・P9は底で柱痕が確認できた。

時期を特定できる遺物の出土はない。

③ 掘立柱建物址15 (挿図132)

ⅡY20h付近で、5本の柱穴が直角にならんで掘立柱建物址と確認できた。北側が用地外で全体規模の把握はできなかった。柱間は桁行・梁行とも1.2mを測る。柱掘り方は円形で、径67～44cm・深さ8～5cmを測る。上層を削平されて底部付近が残ったのみであるため、把握できなかった柱穴の存在も考えられる。

時期を特定できる遺物の出土はない。



挿図132 DUG VII 掘立柱建物址15

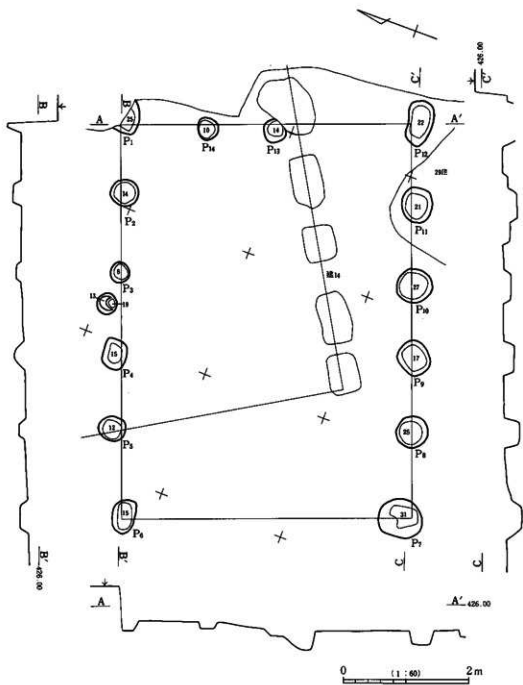
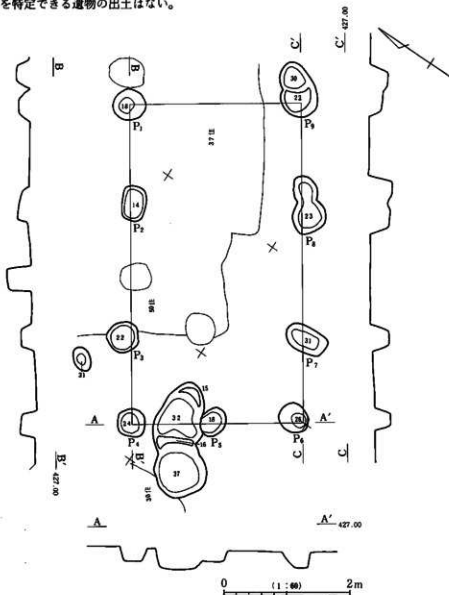


插图133 DUG VII 掘立柱建物址16

④ 掘立柱建物址16 (挿図133)

ⅡY21eを中心にして検出し全体を調査した。中世の29号住居址に切られ、古墳時代後期の37号住居址を切る。4×5間の掘立柱建物址で、桁行6.2・梁行4.6mを測る。柱掘り方は北側の梁行で1本・南側で3本確認できなかった。柱間は桁行で1.3・1.2m、梁行で1.1・1.0mを測り、桁行方向はN70°Eを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形で、径71~33cm・深さ31~8cmを測る。

時期を特定できる遺物の出土はない。



挿図134 DUG W 掘立柱建物址17

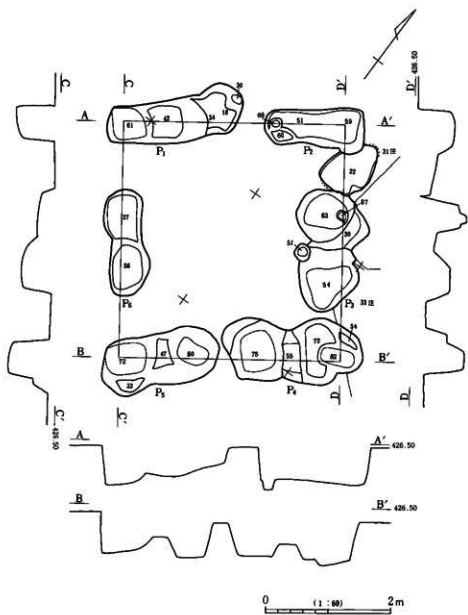


插图135 DUG W 掘立柱建物址18

⑤ 掘立柱建物址17 (挿図134)

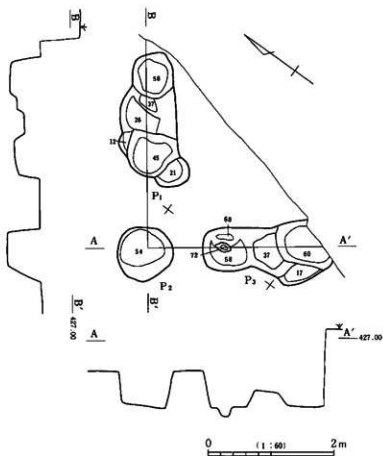
ⅡY20bを中心にして検出し、全体を調査した。古墳時代後期の37号住居址を切る。2×3間の掘立柱建物址で、桁行5.0・梁行2.7mを測る。柱掘り方は北東側の梁行で1本確認できなかった。柱間は桁行で2.2・1.4m、梁行で1.4mを測り、桁行方向はN55° Eを示す。柱掘り方は円形もしくは楕円形で、径56～44cm・深さ31～18cm測る。

時期を特定できる遺物の出土はない。

⑥ 掘立柱建物址18 (挿図135)

ⅡX21vを中心にして検出し、全体を調査した。奈良時代の31号・33号住居址に切られ、古墳時代後期の47号・48号住居址を切る。3×3間の掘立柱建物址で、桁行3.7・梁行3.5mを測る。柱間は桁行で1.4・0.9m、梁行で1.2・1.1mを測り、桁行方向はN34° Wを示す。柱掘り方は丸みを帯びた長方形で、径226～166cm・深さ82～27cmを測る。どの穴も2本の柱を埋める。

時期を特定できる遺物の出土はない。



挿図136 DUG VII 掘立柱建物址23

⑦ 掘立柱建物址23 (挿図136)

ⅡX22x付近で3本の柱掘り方を確認し、掘立柱建物址と分かった。東側が用水路で未調査となり、規模は不明である。柱間は桁行・梁行とも1.3mで、桁行方向はN53°Eの可能性が高い。柱掘り方は丸みを帯びた長方形で、径194~85cm・深さ60~45cmを測る。P1・P3は2本の柱を埋めている。

時期の特定できる遺物の出土はない。

(4) 溝 址

① 溝址1・20 (挿図137)

ⅡX191からⅡY2cにかけて検出した。溝址1・20は重複しており、覆土の区別ができずに同時に掘り下げたので、記述も一緒にする。調査延長は45mで、南東端で分かれて第VI地区に連続する。分かれる箇所以外で両者の区別はできなかった。方向は緩く曲がりながら溝址1はN38°W、溝址20はN48°Wを示す。幅4.7~2.3m・深さ84~55cmを測り、断面形は様々で、深くえぐられた箇所や2段に落ち込みをなす部分が認められた。覆土はいずれも砂が主体となり、水が流れたことを物語っている。

出土遺物は多く、弥生時代中期と古墳時代後期が主体となる。前者が溝址1後者が溝址20に付属すると考えられる。

溝址1では弥生土器の壺・甕、打製石斧等がある。

溝址20では、土師器甕・環・高環、須恵器甕・蓋環・甕・横瓶、土製紡錘車がある。

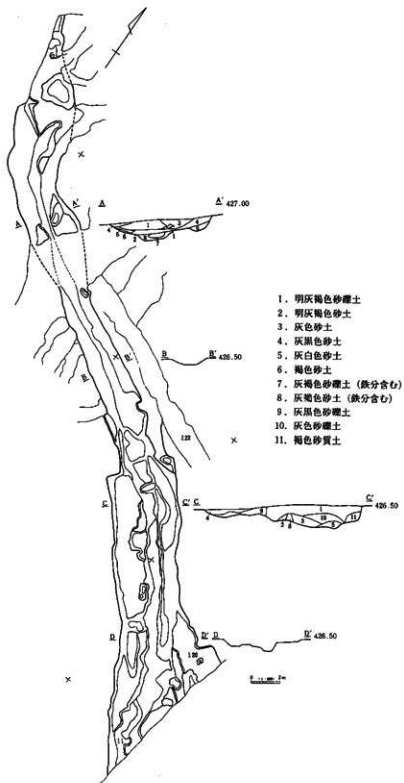
出土遺物から、溝址1は弥生時代中期に、溝址20は古墳時代に位置づけられる。

② 溝址22 (挿図138)

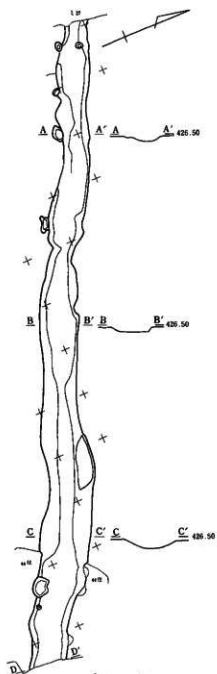
ⅡX25pからⅡX9vにかけて検出した。古墳時代後期の44号住居址・溝址27に切られる。調査延長は26.6mで、第VI地区の溝址22に連続する。方向はほぼ直線的で、N68°Wを示す。幅110~40cm・深さ40~10cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は底に砂が認められ、大半は灰黒色土であった。

出土遺物は弥生土器壺・甕、打製石斧等があり、壺の1点は横倒しに廃棄されており、ほぼ完形に復元できた。土層からみて、小川・水路的な役割は考えられない。区画を目的とした溝と考えられる。

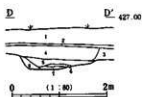
出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。



挿圖137 DUG III 溝址1・20



1. 青灰色土 (耕土)
2. 青灰色土 (鉄分・マンガンを沈澱)
3. 暗灰色土
4. 暗灰褐色土
5. 灰黒色土
6. 灰黒色砂質土
7. 灰黒色砂質土 (灰色砂土混じり)
8. 灰褐色土



挿図138 DUG VII 溝址22

③ 溝址23 (挿図139・140)

ⅡX5lからⅡX11sにかけて検出した。古墳時代の溝址20・25、奈良時代～平安時代の溝址27に切られる。調査延長は18.7mで、第X地区の溝址23に連続する。方向はほぼ直線的で、N45°Eを示す。幅240～80cm・深さ107～25cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は弥生土器壺・台付甕・手づくね土器、打製石斧等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

④ 溝址24 (挿図139・140)

ⅡX10xからⅡY8hにかけて検出した。48号住居址と重複する。調査延長は21.7mで、北側に延長する。方向は緩く曲がっている。幅110～20cm・深さ18～4cmを測り、断面形は逆台形をなす。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は、土師器環・須恵器環・鉄滓等があり、土師器環1点に墨書が認められた。

出土遺物から奈良時代後半から平安時代前半に位置づけられる。

⑤ 溝址25 (挿図139・140)

ⅡX8kからⅡY7hにかけて検出した。奈良時代～平安時代の溝址27に切られ、弥生時代中期の溝址20・23を切る。調査延長は45mで、両側に延長する。方向は緩く曲がっている。幅310～70cm・深さ37～11cmを測り、断面形は不定形で、えぐれたり深くになっている箇所が認められた。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は比較的多く、土師器甕・甌・環・高環、須恵器甕、蓋環・高環、灰釉陶器碗、鉄滓・帯金具がある。

主体となる出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。

⑥ 溝址26 (挿図139・140)

ⅡY6FからⅡY5hにかけて検出した。奈良時代～平安時代の溝址27に切られる。調査延長は4mで、北側に延長する。方向はほぼ直線的で、N25°Wを示す。幅110cm・深さ40～14cmを測り、断面形は不定形で、えぐれたり深くになっている箇所が認められた。覆土は砂を主体としていた。

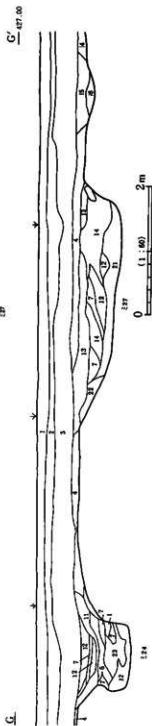
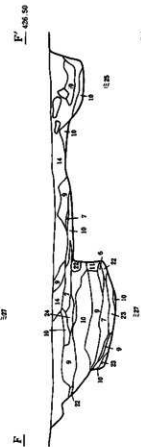
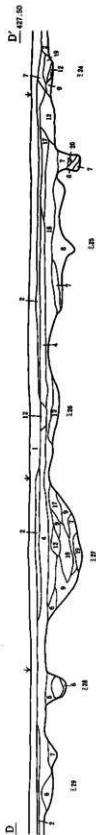
出土遺物は土師器甕、須恵器甕・高環等があり、出土遺物から古墳時代後期に位置づけられる。

⑦ 溝址27 (挿図139・140)

ⅡX7kからⅡY4gにかけて検出した。弥生時代中期の溝址23、古墳時代後期の溝址25に切られる。調査延長は46mで、北側に延長し、第X地区溝址27に連続する。方向は緩く曲がっており、



挿図139 DUG VII 溝址23・24・25・26・27・28・29



1. 青灰色土 (餅土)
2. 青灰色土 (水分は細床土)
3. 暗青灰色土 (旧耕土)
4. 灰黑色土
5. 灰黑色土 (灰黑色砂土混じり)
6. 灰黑色砂土
7. 灰色砂土 (砂が細かい)
8. 灰色砂礫土
9. 灰白色砂土 (砂が細かい)
10. 灰白色砂礫土
11. 灰黑色砂質土
12. 灰色砂土 (砂が荒い)
13. 灰褐色土
14. 灰褐色砂質土
15. 灰褐色砂礫土
16. 灰黑色砂礫土
17. 暗灰色土
18. 暗灰色砂質土
19. 灰白色砂土 (砂が荒い)
20. 褐色土
21. 灰黑色土 (黄褐色土混じり)
22. 黄褐色土
23. 黄褐色粘質土 (灰褐色粘質土混じり)
24. 明灰色砂土

挿圖140 DUG W 溝址23・24・25・26・27・28・29土層図

ほぼN1°Wを示す。幅5.2～2.8m・深さ65～38cmを測り、深くえぐれる箇所は89cmになる。断面形は不定形で、えぐれたり深くなっている箇所が認められた。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は多く、土師器甕・坏・高坏、須恵器甕・蓋・坏、灰釉陶器長頸壺、鉄滓等がある。主体となる出土遺物から奈良時代後半から平安時代に位置づけられる。

⑧ 溝址28(挿図139・140)

XIIY3fからXIIY3gにかけて検出した。調査延長は3.5mで、北側に延長する。方向はほぼ直線的で、N21°Wを示す。幅80～30cm・深さ34～29cmを測る。断面形は不定形で、えぐれたり深くなっている箇所が認められた。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は少なく、土師器・須恵器がある。

出土遺物か少なく、詳細な時期は不明である。

⑨ 溝址29(挿図139・140)

XIIY3cからXIIY2gにかけて検出した。調査延長は10mで、北側に延長する。方向はほぼ直線的で、N26°Wを示す。幅170～90cm・深さ12～8cmを測る。断面形は不定形で、えぐれたり深くなっている箇所が認められた。覆土は砂を主体としていた。

出土遺物は弥生中期土器甕、土師器甕、須恵器蓋・坏等がある。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。

溝址24～29は、第Ⅷ地区の西端を少しずつ位置や方向を変えながら南北方向で調査された。いずれも覆土は砂や礫を主体としており、自然の川の流路と考えられる。かなり多量の遺物を包含しており、集落内で利用されていたと考えられる。

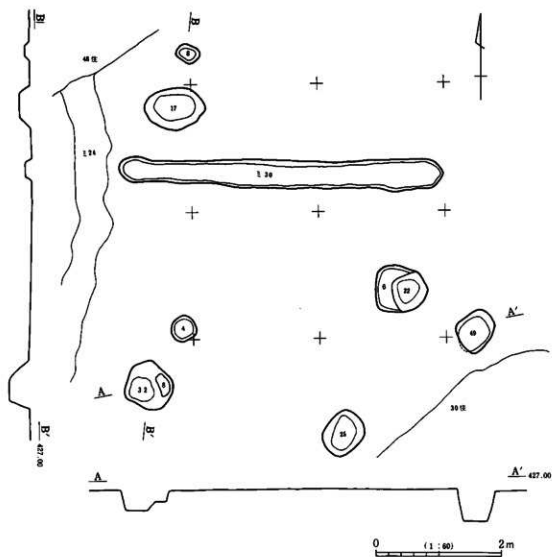
継続時期も長く、古墳時代後期から平安時代までの堂垣外遺跡が主体となる時期に、少しずつ位置や方向を変えながら存続していたといえる。さらにいえば、弥生時代中期の溝址1や古墳時代後期の溝址20も同じような性格と考えられ、水を計画だって利用するための溝である可能性も認められる。また、集落の範囲が溝の内側に限られるので、集落を区画していたことも考えられる。

⑩ 溝址30(挿図141)

XIIY12cからXIIY14cにかけて検出した。調査延長は5.1mで、両側でとぎれる。方向はほぼ直線的で、N89°Wを示す。幅50cm・深さ9cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は弥生土器・土師器片が41点ある。

出土遺物が少なく時期は不明である。



挿図141 DUG VII 溝址30、柱穴

① 溝址31 (挿図142)

Ⅱ Y111からⅡ Y120にかけて検出した。調査延長は7.4mで、両側とぎれる。方向はほぼ直線的で、 $N19^{\circ} E$ を示す。幅80~10cm・深さ26~7cmを測り、断面形は不定形をなす。覆土は砂を主体としていた。遺構の状況から自然の小川の流路の底部を把握し、両側にも続いていたと考えられる。

出土遺物は弥生中期土器片6点がある。

出土遺物から弥生時代中期に位置づけられる。

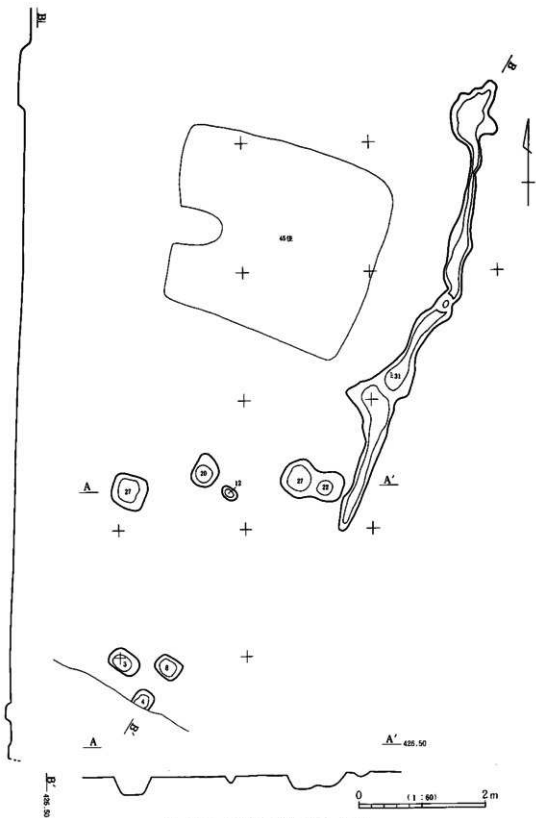


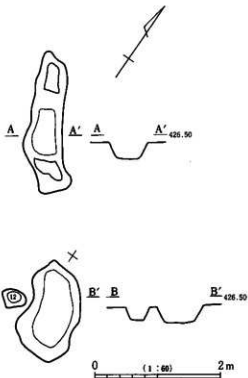
插图142 DUG VIII 溝址31、柱穴

⑫ 溝址32 (挿図143)

ⅩⅩ14mからⅩⅩ13oにかけて検出した。調査延長は3.8mで、両側と途中でとぎれる。方向はほぼ直線形で N35° Wを示す。幅100～50cm・深さ28～8cmを測り、断面形は不定形をなす。覆土は砂を主体としていた。遺構の状況から上層を削平された自然の小川の流路の底部を把握し、両側にも続いていたと考えられる。

出土遺物は須恵器環がある。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。



挿図143 DUG VII 溝址32

(5) 柱穴・土坑

柱穴は竪穴住居址・掘立柱建物址がある北東側に集中する。これらの遺構と関連して考える必要がある。個々の説明は省くが、遺構図はすべて掲載した。

① 土坑44 (挿図144)

ⅩⅩ21wで検出した。117×117cmの不整形を呈し、深さは9cmを測る。断面形は浅く皿状を呈する。縄文時代中期後半土器片が10cm前後の石7ヶとともに出土した。

出土遺物から縄文時代中期後半に位置づけられる。

② 土坑45 (挿図144)

ⅩⅩ20xで検出した。104×98cmの楕円形を呈し、深さは28cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は土師器・須恵器がある。

出土遺物から奈良時代から平安時代に位置づけられる。

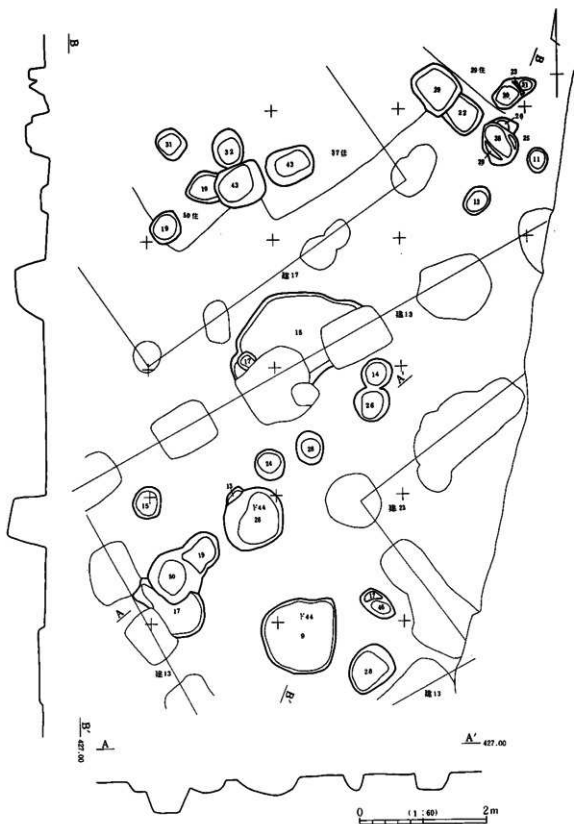


插图144 DUG VII 土坑44·45、柱穴

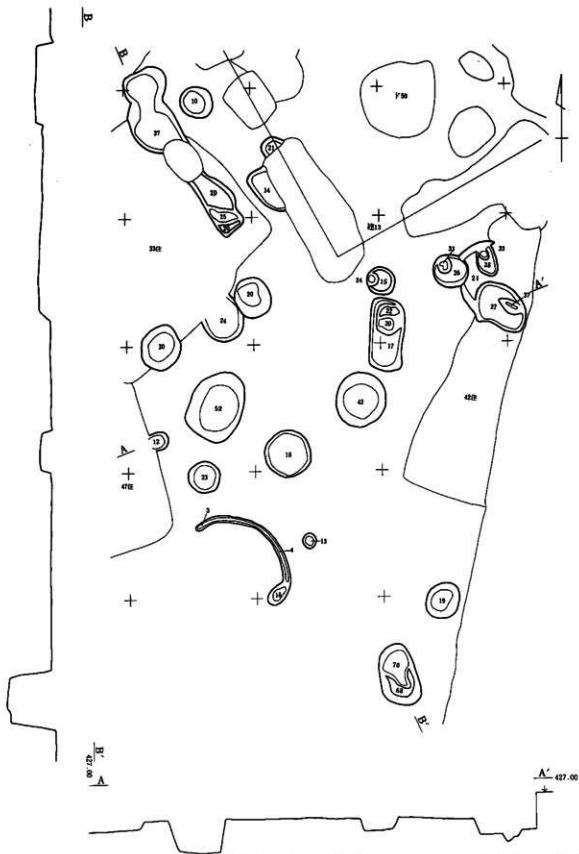


插图145 DUG VII 柱穴(1)

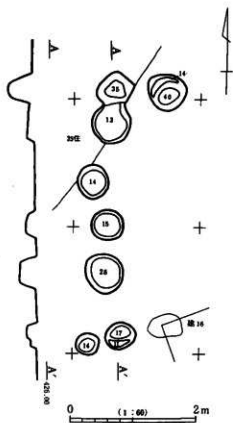


插图146 DUG VII 柱穴(2)

9) 第IX地区

(1) 基本層序

地区南東部の壁面で示した。

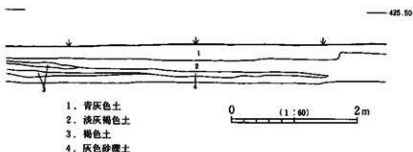
1層：青灰色土 水田の耕土である。

2層：淡灰褐色土

3層：褐色土

4層：灰色砂礫土

遺構検出面は2層下の暗黄褐色土である。



挿図147 DUG IX 基本土層図

(2) 竪穴住居址

① 50号住居址 (挿図148・149)

ⅡW22sを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。古墳後期の溝址20と奈良時代後半以前の51号住居址を切る。5.9×5.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN65°Wを示す。壁高は最大22cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり硬く良好である。溝址20と切り合う部分はプランが不明であった。主柱穴はP1～P4と思われる、P5の覆土は焼土混じりの褐色土であった。カマドは北西壁中央に位置する石芯粘土カマドで、残存状態は良好であった。

出土遺物は多く、土師器壺・坏、須恵器壺・坏・蓋・盤・円面碗、灰釉陶器碗・長頸壺、焼成粘土塊、刀子、鉄器、鉄滓、フイゴの羽口、漆が付着する須恵器坏等がある。

出土遺物より奈良時代後半に位置づけられる。

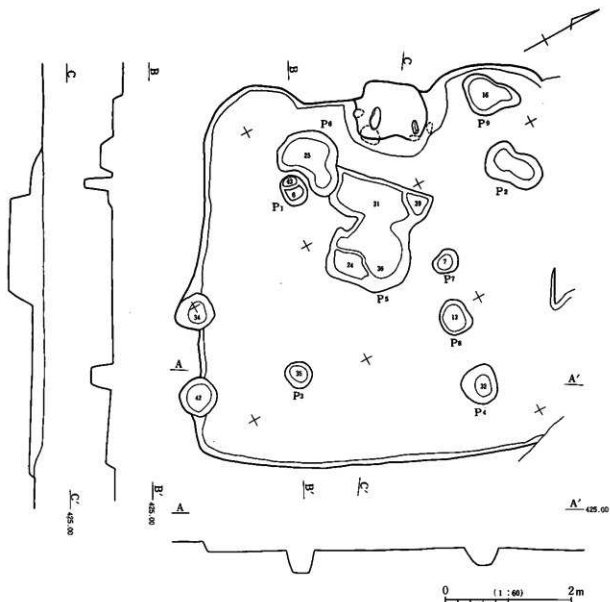
② 51号住居址 (挿図150)

ⅡW22uを中心として検出し、カマド周辺のみを調査した。古墳後期の溝址20を切り、奈良時代後半の50号住居址に切られる。主軸と直行する方向が4.2mの隅丸方形と推定される竪穴住居

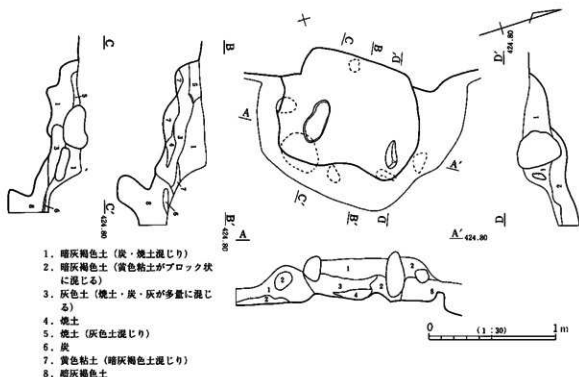
址で、主軸方向はN22° Eを示す。壁高は最大22cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は貼床になっており、しまりがあり良好である。P1は貯蔵穴の可能性ある。カマドは残存状況が良く、両袖に1個ずつの石を用いている。

出土遺物は極めて少なく、須恵器坏・蓋がある。

切り合い関係から、奈良時代後半以前に位置づけられる。



挿図148 DUG IX 50号住居址



挿図149 DUG IX 50号住居址カマド

③ 52号住居址 (挿図151・152)

1XNW15kを中心として検出し、全体を調査した。時期不明の溝址34を切る。7×6.2mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN78°Wを示す。壁高は最大19cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面ははっきりせず良好ではない。北壁・西壁・東壁のやや内側の床面上に8個の扁平礫を、また、東壁に外側に張り出して扁平礫をそれぞれ検出した。竪穴内に礎石を持つと考えられ柱間は2.7~1.2mである。また、北壁下の礎石は長さ3.4m・幅48~20cm・深さ8cmの周溝内にあるものもある。カマド等は確認できなかったが、P16とP17の間に焼土が認められ、半截したところ穴になったものがP17である。この焼土の性格等の詳細は不明である。

出土遺物は多く、土器器鉢・坏、須恵器坏・蓋・長頸壺、灰軸陶器碗・皿等がある。

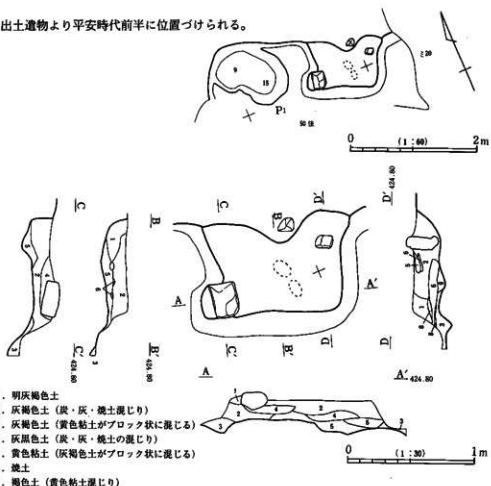
出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。

④ 53号住居址 (挿図153・154)

1XNW23oを中心として検出し、全体を調査した。平安時代前期の54号住居址と平安時代前半以前の55号住居址を切る。5×5.1mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN8°Eを示す。壁高は最大46cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。支柱穴は不明である。カマドは北壁の中央部に位置する石芯粘土カマドで、右袖に1個扁平円礫を用いている。

出土遺物は、土器器壺・坏、須恵器壺・甕・坏・蓋、灰軸陶器碗等がある。

出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。



挿図150 DUG IX 51号住居址

⑤ 54号住居址 (挿図155)

XW23〇を中心として検出し、1/5程度を調査した。平安時代前半以前の55号住居址と、平安時代前期の53号住居址に切られる。4×6.7mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN79°Wを示す。壁高は最大30cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面ははっきりせず良好ではない。主柱穴は不明である。カマドは西壁の中央よりやや南に位置する石芯粘土カマドと思われるが、残存状態が悪く詳細は不明である。

遺物は出土していない。

切り合い関係から平安時代前半以前と思われる。

⑥ 55号住居址 (挿図153)

XW21Pを中心として検出し、住居址コーナー部と思われる箇所のみ調査した。平安時代前半の54号住居址を切り、平安時代前半の53号住居址に切られる。住居址コーナー部と思われる箇所

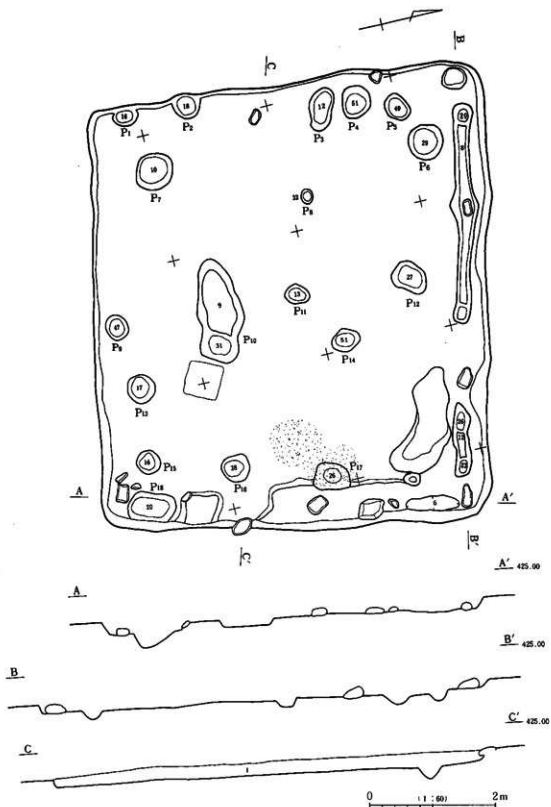
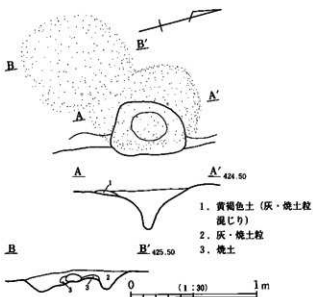


插图151 DUG IX 52号住居址



挿図152 DUG IX 52号住居址焼土

る。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器坏がある。

出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。

㊸ 57号住居址 (挿図156・157)

XIVW110を中心として検出し、全体を調査した。奈良時代後半の58号住居址と平安時代前半の56号住居址を切る。4.9×5 mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN70° Wを示す。壁高は最大39cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴は不明である。カマドは西壁の中央部に位置する石芯粘土カマドで、両袖に1個ずつ偏平円礫を用いている。

また、北壁下中央部(焼土1)と、東壁下中央やや北より(焼土2)の床面に両脇にそれぞれ長楕円の堀込みを持つ焼土を検出した。焼土1は壁面も焼土化しており、また、床面の焼土の北側に18×16cm・深さ10cmの穴を確認した。詳細は不明であるが、可動式の火器の使用痕の可能性を指摘しておく。

出土遺物は、土師器甕・坏、須恵器坏・蓋、鉄滓等がある。

出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。

㊹ 58号住居址 (挿図158)

XIVW11mを中心として検出し、南側は未調査で1/3程度を調査した。また、東側は造成により破壊されている。平安時代前半の56号住居址を切る。規模・主軸等不明の竪穴住居址である。壁

のみの調査のため、規模・主軸等、詳細は不明である。

遺物は出土していない。

切り合い関係から平安時代前半以前と思われる。

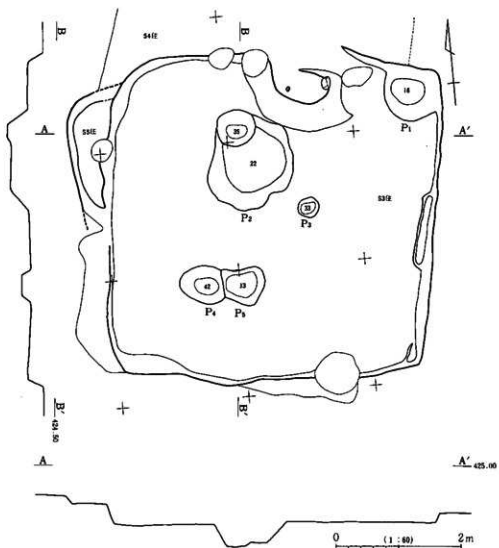
㊺ 56号住居址 (挿図156)

XIVW90を中心として検出し、約1/3を調査した。平安時代前半の57号住居址に切られる。一辺が4mを測る隅丸方形と思われる竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は最大11cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴・カマド等は不明であ

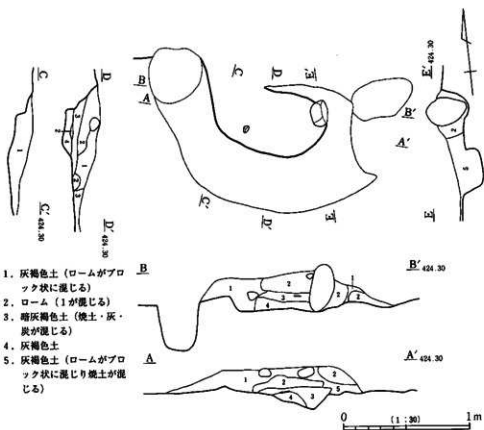
高は最大27cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面ははっきりせず不良である。支柱穴は不明で、他の穴の性格も不明である。カマドも確認できなかった。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕・坏、灰釉陶器碗が出土している。

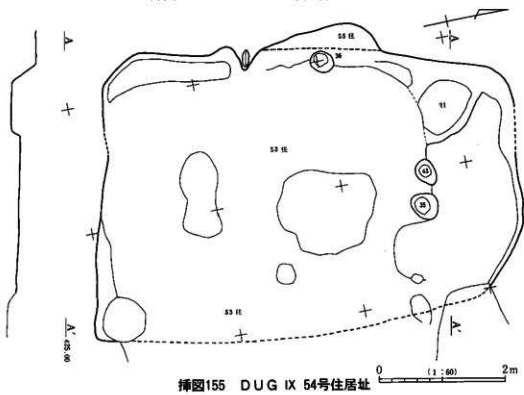
出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。



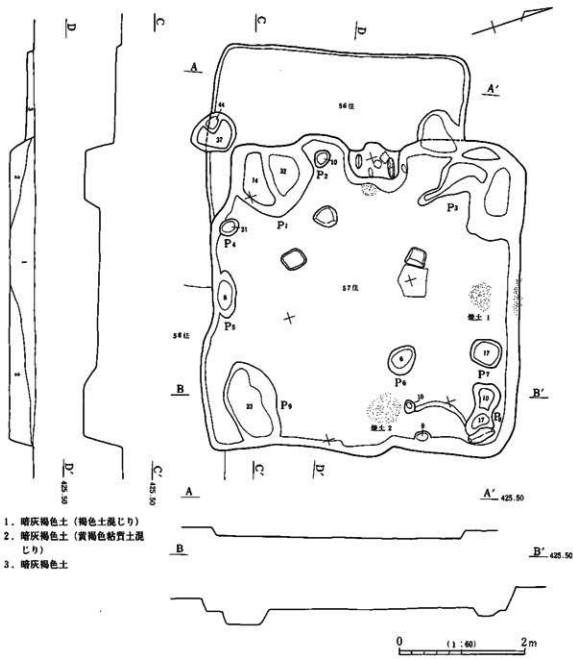
挿図153 DUG IX 53号・55号住居址



挿図154 DUG IX 53号住居址カマド

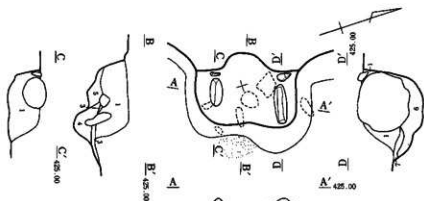


挿図155 DUG IX 54号住居址



1. 暗灰褐色土 (褐色土混じり)
2. 暗灰褐色土 (黄褐色粘質土混じり)
3. 暗灰褐色土

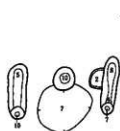
挿図156 DUG IX 56号・57号住居址



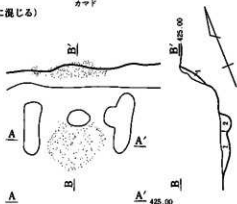
1. 暗灰褐色土
2. 暗灰赤褐色土
3. 焼土
4. 灰褐色土 (灰焼土混じり)
5. 褐色土
6. 褐色土 (黄色粘土がブロック状に混じる)
7. 焼土・炭



カマド



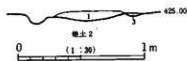
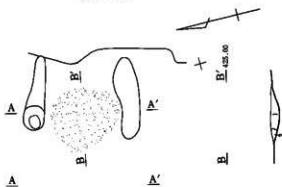
焼土1 編り方



1. 焼土
2. 灰褐色土 (焼土・灰混じり)



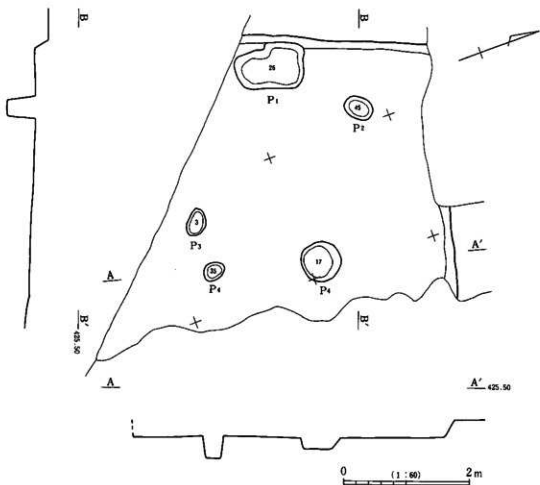
焼土1 プラン



焼土2

0 (1:30) 1m

挿図157 DUG IX 57号住居址カマド、焼土1・2



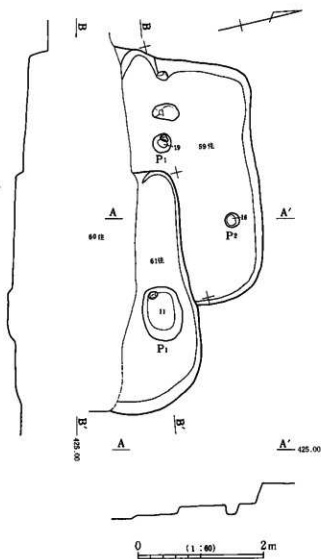
挿図158 DUG IX 58号住居址

⑩ 59号住居址 (挿図159)

XNW22mを中心として検出し、1/3程を調査した。平安時代前半の60号住居址と平安時代前半の61号住居址に切られる。主軸方向が3.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN78°Wを示す。壁高は最大35cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴は不明である。カマドは西壁に残骸を確認した。

出土遺物は、土師器甕・坏、須恵器鉢・四耳壺・坏・壺、灰釉陶器碗・長頸壺、鉄器・鉄滓等がある。

出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。



挿図159 DUG IX 59号・61号住居址

① 60号住居址 (挿図160・161)
 XNW22 kを中心として検出し、東側は未調査で、2/3程を調査した。平安時代前半の59号住居址と平安時代前半の61号住居址を切る。主軸に直行する方向が6.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN83° Wを示す。壁高は最大52cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面ははつきりせず、一部掘り過ぎてしまった。主柱穴は不明である。カマドは西壁の中央部に位置する石芯粘土カマドで、左袖側は掘り過ぎてしまった。底部に大量の焼土を確認した。

出土遺物は、土師器甕・坏、須恵器甕・坏・蓋、灰釉陶器碗、鉄製鎌がある。

出土遺物より平安時代前半に位置づけられる。

② 61号住居址 (挿図159)

XNW23 1を中心として検出し、1/3弱を調査した。平安時代前半の59号住居址を切り、平安時代前半の60号住居址に切られる。一辺が3.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は不明である。壁高は最大13cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はしまりがあり良好である。主柱穴・カマドは不明である。

出土遺物は、土師器甕、須恵器坏がある。

遺構の切り合い関係から平安時代前半に位置づけられる。

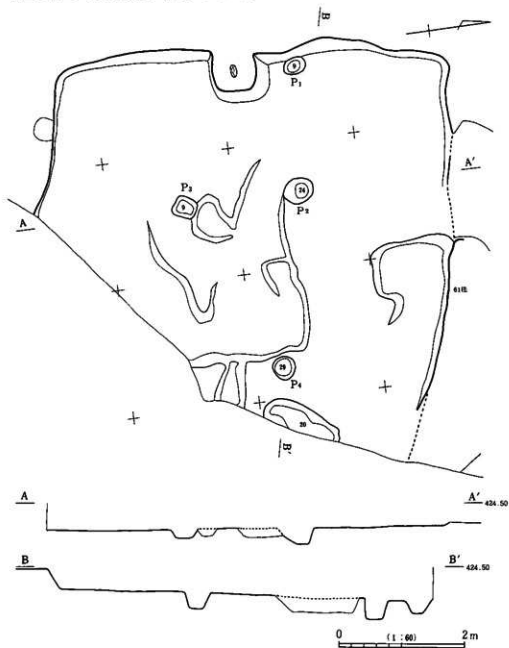
③ 70号住居址 (挿図162)

XNW2 nを中心として検出し、東側は未調査で1/3弱を調査した。時期不明の土坑と切り合い関係があるが、新旧は不明である。規模・主軸方向とも不明な竪穴住居址である。壁高は最大23

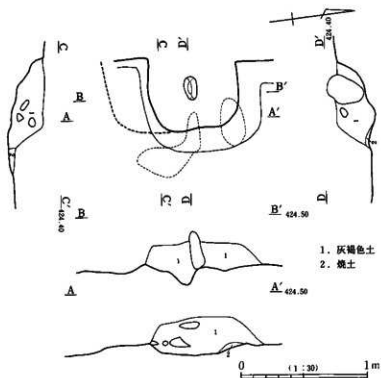
cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面ははっきりせず、主柱穴は不明である。カマドは検出できなかった。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器坏・蓋、焼成粘土塊がある。

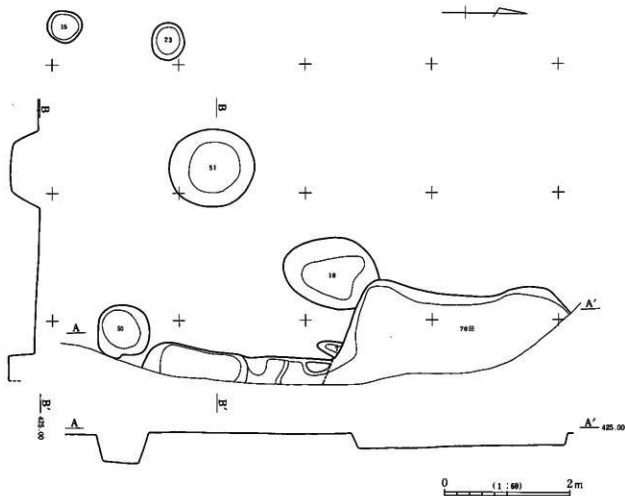
出土遺物より平安時代後半に位置づけられる。



挿図160 DUG IX 60号住居址



挿図161 DUG IX 60号住居址カマド



挿図162 DUG IX 70号住居址

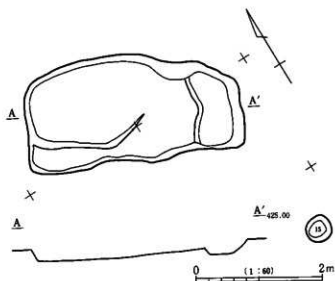
(3) 竪穴状遺構

① 竪穴状遺構1 (挿図163)

INW17sを中心として検出し、全体を調査した。3.5×1.7mを測り、長軸がN63°Wを示す隅丸長方形の遺構である。底部は21・19cmの2段の落ち込みと、一部、比高10cmを測るテラスを有する。断面はやや緩やかになる。底部は特別な床面加工はみられなかった。本址の性格は不明であるので、竪穴状遺構とした。

出土遺物は土師器壺、灰釉陶器皿があり、いずれも底部よりやや浮いた状態で出土した。

出土遺物より平安時代後半に位置づけられる。



挿図163 DUG IX 堅穴状遺構 1

(4) 独立柱建物址

① 独立柱建物址19 (挿図164)

XNW8pを中心として検出し、南西側は未調査である。時期不明の杭列址1に切られる。梁が2間の独立柱建物址で、梁行が3.7mを測る。柱間は桁行が2.8~1.2m・梁行が1.9~1.7mを測り、桁行方向がN17°Eを示す。柱振り方は円形もしくは隅丸方形で径72~43cm・深さ36~17cmを測る。

出土遺物は土師器坏・須恵器坏がある。

出土遺物と周囲の遺構の状況から平安時代前半と考えられる。

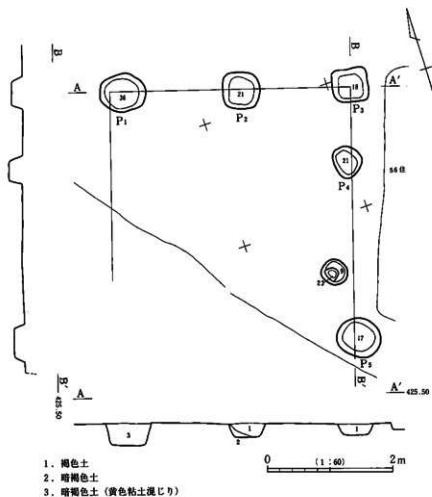
(5) 杭 列

① 杭列1 (挿図165)

XNW6qから12oにかけて検出した。西側は未調査で、東側は造成のため破壊されている。平安時代前半の56・57号住居址・独立柱建物址19を切る。調査延長13.6mで、方向はN70°Wを示す。掘方は径17~10×10~8cm・深さ24~5cm・間隔80~20cmで円形または楕円形である。杭列は幅1.5~1.3mの帯状の暗褐色土中に検出した。

出土遺物はない。

時期決定の根拠に欠けるが、前述した帯状の暗褐色土の状況から、近世以降の可能性を指摘しておく。



挿図164 DUG IX 掘立柱建物址19

(6) 溝 址

① 溝址20 (挿図166)

XIX 18Y から W23U にかけて検出した。奈良時代後半以前の51号住居址・奈良時代後半の50号住居址に切られる。調査延長は14.4mで、西側は第VI地区に、南東は用地外にそれぞれ続く。方向はN76°Wで、XIX W23W付近で方向を変えてN16°Wとなる。幅8.5～5.3m・深さ73～1cmを測り、断面形は不定形で、水が流れた形跡が断面形及び土層から伺われる。

出土遺物は多く、覆土下層から多く出土している。土師器甕・坏・高坏・須恵器甕・坏・蓋・蓋坏・高坏・甕・打製石斧・磨製石鏃未成品が出土している。

第VI地区で前述したように古墳時代後期に位置づけられる。

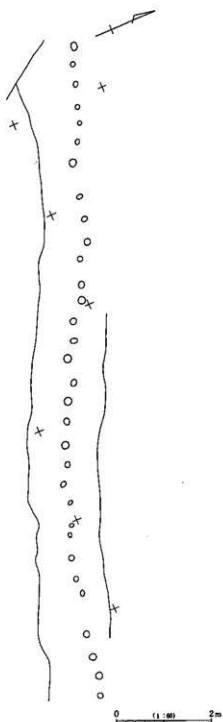
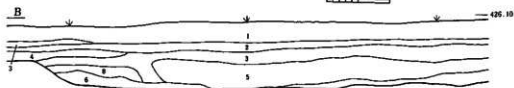
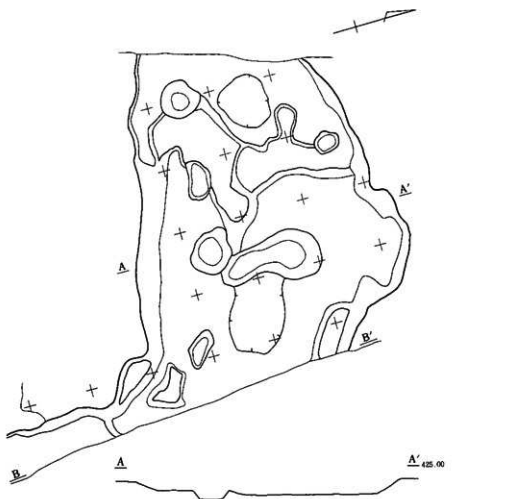


插图165 DUG IX 杭列 1



1. 青灰色土 (耕土)
2. 青灰色土 (铁分沈着床土)
3. 暗褐色土
4. 黑褐色土
5. 褐色土
6. 暗灰色砂壤土
7. 暗灰色壤层
8. 黄褐色土

0 (1:60) 2m

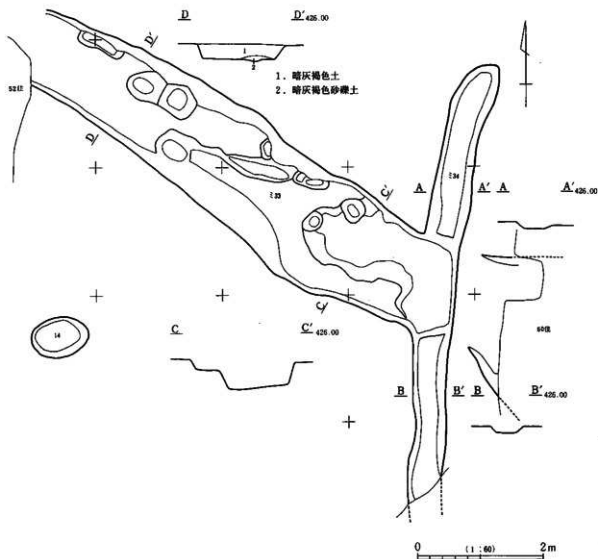
插图166 DUG IX 沟址20

② 溝址33 (挿図167)

XFW18mからXFW21jにかけて検出した。平安時代前半の52・60号住居址に切られる。調査延長は7.8mである。北西側は掘り残してしまった。方向はほぼ直線的でN57° Wを示す。幅1.9～1.2m・深さ34～8cmを測り、断面形は不定形である。断面形および土層から水の流れた形跡が見られるが、本址の性格は断定できない。

出土遺物は土師器甕、須恵器甕・長頸壺等がある。

出土遺物より奈良時代に位置づけられる。



挿図167 DUG IX 溝址33・34

③ 溝址34 (挿図167)

XNW21 l からXNW20 i にかけて検出した。溝址33に切られる。調査延長は7 mで、南側は削平されてしまい不明である。方向はほぼ直線的でN 7° Eを示す。幅62~52cm・深さ16~12cmを測り、断面形は逆台形である。本址の性格は断定できないが、区画溝的な性格である可能性がある。

出土遺物はない。

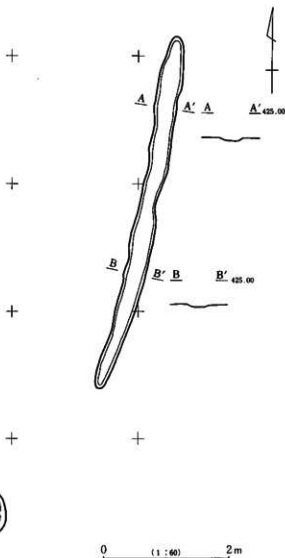
時期決定の根拠に欠け、時期不明である。

④ 溝址55 (挿図168)

XNW21 q からXNW20 o にかけて検出した。調査延長は5.6mで方向はほぼ直線的でN12° Eを示す。幅38~24cm・深さ5~4cmを測り、断面形は逆台形を示す。本址の性格は断定できないが区画溝の可能性はある。

出土遺物はない。

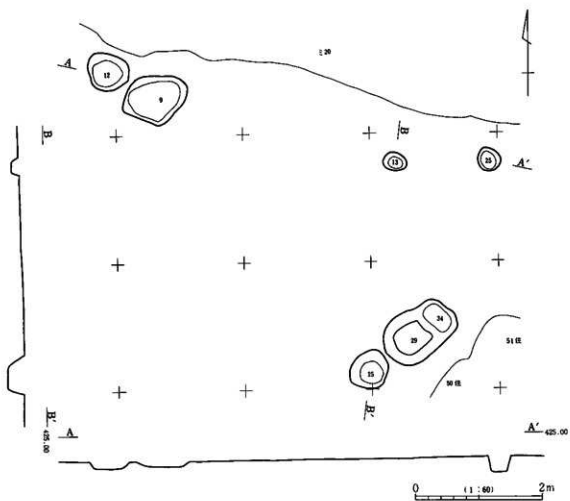
時期決定の根拠に欠け、時期不明である。



挿図168 DUG IX 溝址55

(7) 柱 穴

調査区全域で検出されている。個々の説明は割愛する。



挿図169 DUG IX 柱穴

10) 第X地区

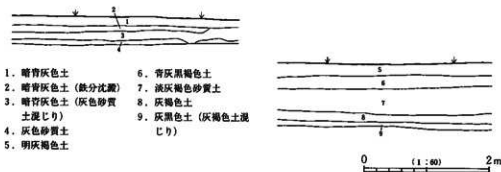
(1) 基本層序

溝址37・38の中間で北東に面する壁面と、溝址50の南側で南東側に面する壁面で示した。

- 1層：暗青灰色土、水田の耕土である。
- 2層：暗青灰色土（鉄分沈殿）、水田の床土
- 3層：暗青灰色土（灰色砂質土混じり）、旧水田面
- 4層：灰色砂質土
- 5層：明灰褐色土、畑の耕土である。
- 6層：青灰黒褐色土、旧水田面
- 7層：淡灰褐色砂質土
- 8層：灰褐色土
- 9層：灰黒色土（灰褐色土混じり）

構検出面は4・9層の下の黄色粘土であるが、調査区北西側の溝址が多い箇所では粘質が弱くなって黄色土となる。

— 428.50

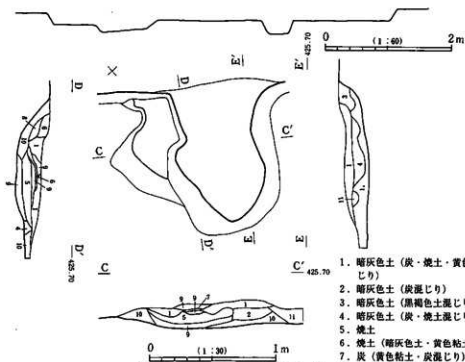
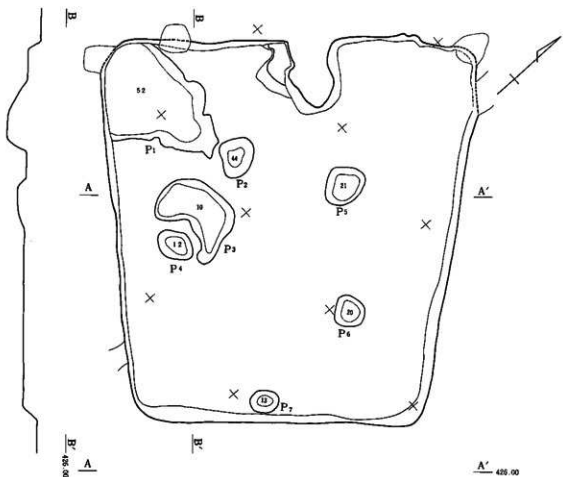


挿図170 DUG X 基本土層図

(2) 竪穴住居址

① 62号住居址（挿図171）

ⅢW17wを中心にして検出し、全体を調査した。6.0×5.5mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向N49°Wを示す。壁高は21～18cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良であるが、その直上に堅面が認められたので、ハリ床となっていた可能性がある。支柱穴は不明で、床面上のP2～P7の役割も不明である。カマドは北西壁中央にやや北隅寄りに位置する粘土カマドで、左袖はほとんど残っていない。焚口部の焼土は顕著に認められ、焼け固まって堅くなっている。焼土の下には粘土が敷いてあった。また、カマド左脇に厚さ3cmの炭が円形に認



1. 暗灰色土（炭・焼土・黄色粘土混じり）
2. 暗灰色土（炭混じり）
3. 暗灰色土（黒褐色土混じり）
4. 暗灰色土（炭・焼土混じり）
5. 焼土
6. 焼土（暗灰色土・黄色粘土混じり）
7. 炭（黄色粘土・炭混じり）
8. 炭（焼土・暗灰色土混じり）
9. 黄色粘土
10. 灰褐色土
11. 灰色砂質土

挿図171 DUG X 62号住居址

められた。

出土遺物は、土師器甕、須恵器甕・蓋・坏、青銅器がある。

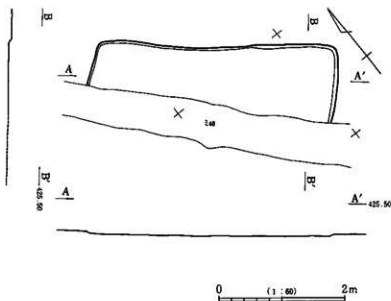
出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

② 63号住居址 (挿図172)

ⅩⅩW19mを中心にして検出し、南西側は遺構の重複がありかつ水田の造成で削平されているので、範囲を確定できなかった。奈良時代の溝址48と掘立住建物址21を切る。南東～北西方向の長さが3.9mの隅丸の竪穴住居址である。壁高は6～3cmを測り、上面を削平されている。床面は全体に軟弱で不良である。穴・カマド等の住居址施設は検出できなかった。

出土遺物は少なく、土師器坏・須恵器甕・坏がある。

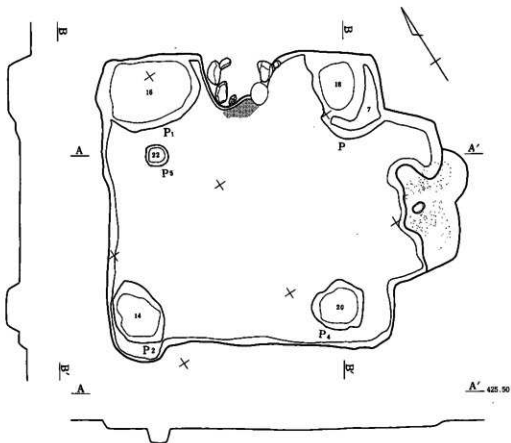
出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



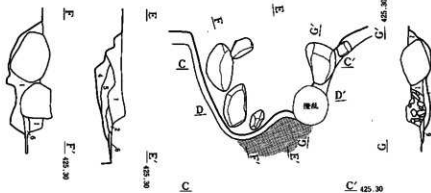
挿図172 DUG X 63号住居址

③ 64号住居址 (挿図173)

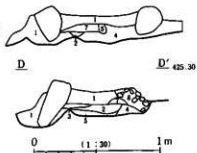
ⅩⅩW25qを中心にして検出し、全体を調査した。奈良時代の72号住居址を切る。4.6×4.5mの隅丸形の竪穴住居址で、主軸方向はN33° Eを示す。壁高は21～8cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟弱で不良であるが、一部に堅いハリ床面を確認した。主柱穴は不明である。四箇所の隅内側にP1～P4の大きな穴がある。P1・P4は貯蔵穴的な役割かも知れない。カマドは北東壁中央やや北隅よりに位置する石芯粘土カマドで、両袖に2ヶずつの石を用いていた。ただし、右袖の石1ヶは攪乱を受けて抜かれている。焚口部の焼土は少なく、炭が広がって



0 (1 : 60) 2m



1. 暗灰色土 (わずかに黄色粘土・炭・暗茶褐色土が混じる)
2. 暗灰色土 (焼土混じり)
3. 暗灰色土 (炭混じり)
4. 暗灰色土 (炭・黄色粘土混じり)
5. 焼土 (暗灰色土混じり)
6. 炭 (わずかに暗灰色土が混じる)
7. 黒褐色土 (炭混じり)
8. 攪乱

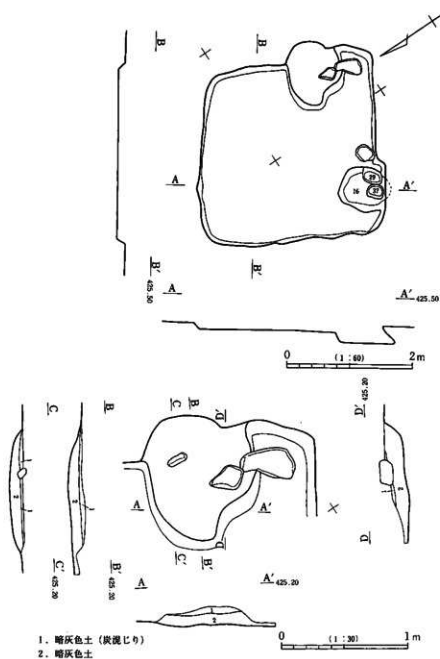


挿図173 DUG X 64号・72号住居址

いた。

出土遺物は、土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏、土鍾がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



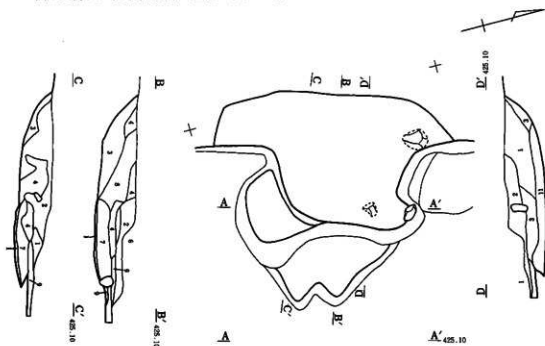
挿図174 DUG X 65号住居址

④ 65号住居址（挿図174）

ⅩW230を中心にして検出し、全体を調査した。2.8×2.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、長軸方向はN125° Eを示す。壁高は13～7cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は全体に軟らかく不良である。カマドは北東壁南隅寄りに炭が分布して当初カマドと考えた。断ち割り調査を行ったが、焚口部の焼土は認められず、カマドでないことも考えられる。付近に石が認められたので、壊された可能性もある。

出土遺物は少なく、土師器甕・坏、須恵器甕・蓋・坏がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



1. 黄色粘土
2. 黄色粘土（暗灰色土・焼土がわずかに混じる）
3. 暗灰色土
4. 暗灰色土（炭・焼土・黄色粘土混じり）
5. 暗灰色土（黄色粘土混じり・焼土多く混じる）
6. 暗灰色土（黄色粘土混じり）
7. 焼土
8. 焼土（暗灰色土・黄色粘土混じり）
9. 炭（焼土・黄色粘土・暗灰色土混じり）
10. 茶褐色土
11. 茶褐色土（暗灰色土混じり）

挿図175 DUG X 66号住居址カマド

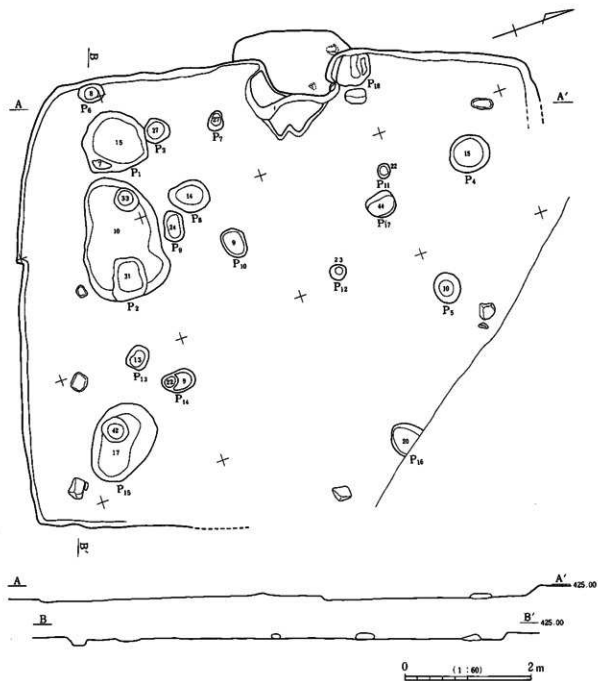


插图176 DUG X 66号住居址

⑤ 66号住居址 (挿図175・176)

XVW4Kを中心にして検出し、東側が道路で全体の4/5程度を調査した。溝址49と重複し、奈良時代の75号住居址を切る。7.3×8.2mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN71°Wを示す。壁高は22～4cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は黄色土のハリ床となり、たたき状に堅く良好である。壁のやや内側の床面上に7ヶの石を検出した。本来は主軸方向の両壁際に5ヶ、主軸に直交方向に4ヶあったと考えられる。竪穴内に礎石を持つと考えられ、柱間は主軸方向で1.61～1.3m、主軸に直交する方向で2.0mと考えられる。床面上に穴は多いが、役割を特定することはできなかった。カマドは西壁中央に位置する粘土カマドで、粘土が残るのみで残存状態が悪く、本来の形を把握するには至らなかった。焚口部の焼土は多く、焼け固まってかたくなっていた。焼土の下には黄色粘土を敷いてあった。

出土遺物は、土師器壺、須恵器壺・釜・坏、鉄器・鉄滓がある。他に、三彩陶器碗・緑軸陶器碗・須恵器坏の墨書土器・円面硯が出土している。

出土遺物から奈良時代後半に位置づけられる。

通常の竪穴住居址より大きく礎石を持つ住居であり、かつ出土遺物も特殊なものが多い。

集落内で特別の意味を持つ家と考えられる。

⑥ 67号住居址 (挿図177)

XVW2Pを中心にして検出し、北側が道路で全体の1/3程度を調査した。近世以降の溝址45・46に切れ、奈良時代後半の68号住居址を切る。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は26～21cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に堅く良好である。主柱穴は不明で、P1は本址に付属する穴と考えられる。

出土遺物は少なく、土師器坏・須恵器坏・灰軸陶器碗がある。

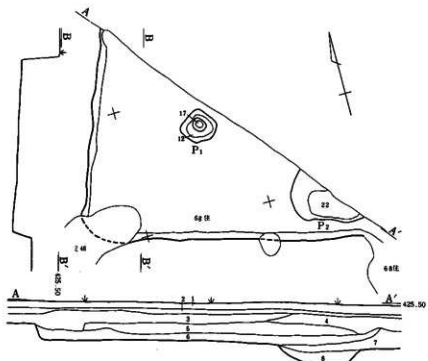
出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。

⑦ 68号住居址 (挿図177)

XVW4nを中心にして検出した。北側が道路のため未調査で、南西壁と西隅が確認できたのみである。平安時代前半の67号住居址に切れ、奈良時代の75号住居址を切る。平面形・規模・主軸方向とも不明の竪穴住居址である。壁高は16～9cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は段が認められ、ハリ床で全体に軟らかく不良である。

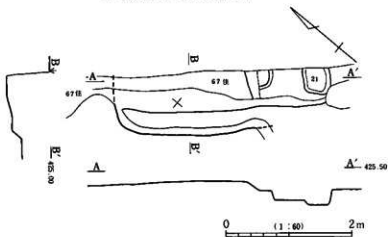
出土遺物は少なく、弥生時代中期土器片2点、土師器S字壺1点、須恵器壺・坏等がある。

出土遺物は少ないが、奈良時代後半に位置づけられる。



1. 青灰色土 (耕土)
2. 青灰色土 (鉄分沈澱層・床土)
3. 淡青灰色土 (旧耕土)
4. 灰褐色土
5. 暗褐色土
6. 黒褐色土
7. 暗灰褐色土
8. 暗灰褐色土 (黄色粘土混じり)

0 (1:60) 2m



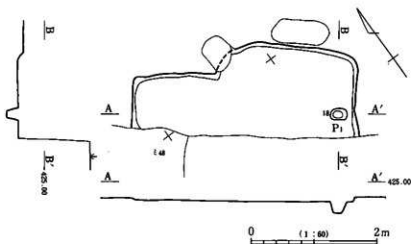
挿図177 DUG X 67号・68号住居址

⑧ 69号住居址 (挿図178)

ⅩW25fを中心にして検出した。南側が用地外のため未調査で、全体の1/3程度を調査した。奈良時代の溝址48・中世の掘立柱建物址22に切られる。南東北西方向の長さが3.5mを測る竪穴住居址である。平面形・主軸方向とも不明で、土層のみきわめが難しかったので、壁面の形が整合せずに、平面形の把握に問題を残す。床面は全体に軟らかく不良である。覆土中に炭・焼土が分布する。

出土遺物は極めて少なく、土師器・須恵器の破片13点がある。

出土遺物は少ないので断定はできないが、切り合い関係からすれば奈良時代に位置づけられる。



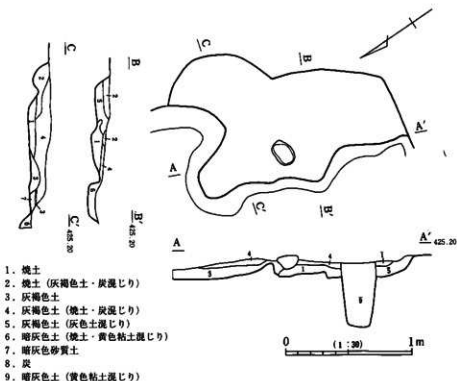
挿図178 DUG X 69号住居址

⑨ 72号住居址 (挿図173・179)

ⅩW1qでカマドを検出し、竪穴住居址と考えた。奈良時代後半の62号住居址に切られる。平面形の把握が十分にできず、カマド以外は不明である。カマドは北東壁に位置する粘土カマドで、焚口部の焼土が2箇所があり、作り直されている可能性があるが、構造を把握するには至らなかった。焚口部の焼土はかなり多い。

出土遺物は極めて少なく、土師器片・須恵器片がある。

出土遺物は少ないので断定はできないが、切り合い関係からすれば奈良時代に位置づけられる。



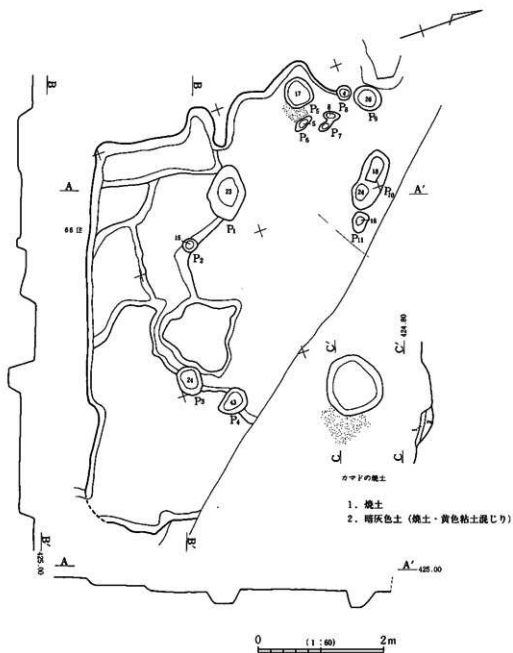
挿図179 DUG X 72号住居址カマド

⑩ 75号住居址 (挿図180)

ⅡW51を中心にして検出した。北側が道路のため未調査で、全体の2/3程度を調査した。奈良時代後半の75号住居址に切られる。主軸方向の長さが6.0mを測る整穴住居址で、主軸方向はN70°Wを示す。床面は66号住居址に切られて残っておらず、住居址掘り方で範囲を確定したので、床面・壁面の状況とも不明で、平面形の把握にも問題を残す。本址に付属する穴の確定はできない。カマドは西壁際に焼土が認められ、焚口部の焼土のみがわずかに残ったものと判断できた。構造の把握はできなかった。

遺物は出土しなかった。

出土遺物がないので断定はできないが、切り合い関係からすれば奈良時代に位置づけられる。



挿図180 DUG X 75号住居址

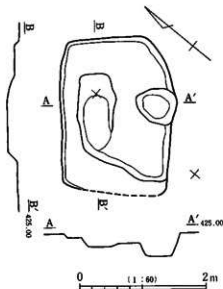
(3) 小 竪 穴

① 小竪穴2 (挿図181)

ⅡW24jを中心に検出し、全体を調査した。2.3×1.8mの隅丸長方形の遺構で、長軸はN50°Eを示す。壁高は16~1cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は地山面を把握し、床面らしい部分は認められなかった。名称は小竪穴としたが、遺構の性格は不明で、こうした呼び方がよいか分からない。

出土遺物は少なく、土師器・須恵器がある。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。



挿図181 DUG X 小竪穴2

(4) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址20 (挿図182)

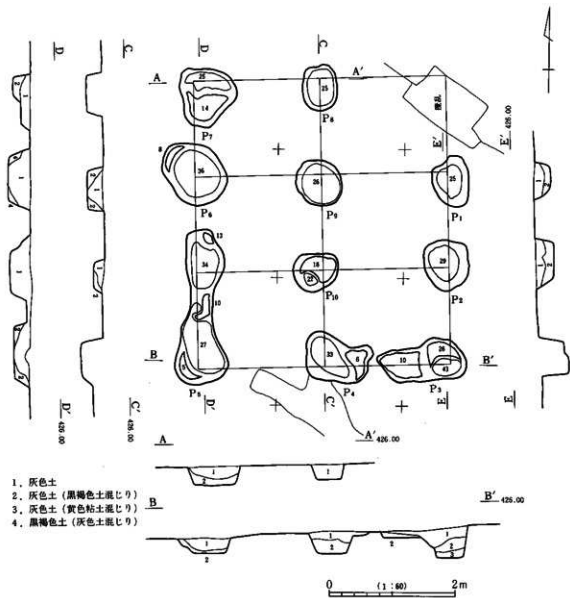
ⅡX15bを中心に検出した。北東隅の柱穴が攪乱を受けて確認できなかった。2×3間の総柱の掘立柱建物址で、桁行4.5・梁行4.0mを測る。柱間は桁行で1.5m、梁行で2.0mを測り、桁行方向はN2°Wを示す。柱掘り方は楕円形が主で、2本の柱を埋めるP5は丸みを帯びた長方形となる。径は3.2~0.7m・深さ43~14cmを測る。

時期の特定できる遺物の出土はない。

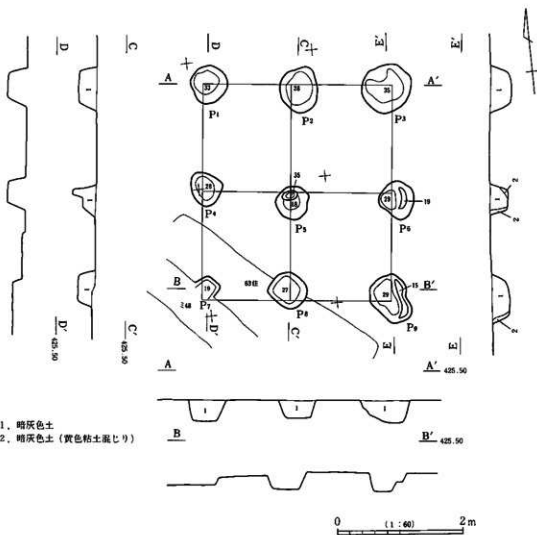
② 掘立柱建物址21 (挿図183)

ⅡW19nを中心に検出し、全体を調査した。平安時代の63号住居址に切られ、奈良時代の溝址48と重複する。2×2間の総柱の掘立柱建物址で、桁行3.0・梁行2.8mを測る。柱間は桁行で1.5m、梁行で1.4mを測り、桁行方向はN6°Eを示す。柱掘り方は楕円形で、径76~52cm・深さ35~18cmを測る。

時期の特定できる遺物の出土はない。



挿図182 DUG X 掘立柱建物址20



挿図183 DUG X 掘立柱建物址21

③ 掘立柱建物址22 (挿図184)

IV W2gを中心に検出した。奈良時代の69号住居址を切る。東側が用地外で未調査となり、桁行方向の規模が不明の掘立柱建物址で、梁行3.6mを測る。柱間は桁行で2.3・2.0・1.7・1.5m、梁行で2.3・1.3mを測り、桁行方向はN70° Wを示す。柱掘り方は楕円形で、径80~50cm・深さ44~16cmを測る。

柱間がそろわず問題を残し、周辺に多い柱穴との関連を考える必要がある。

時期の特定できる遺物の出土はないが、周辺柱穴から中世陶器が出土しているので、中世の可能性が高いと考えている。

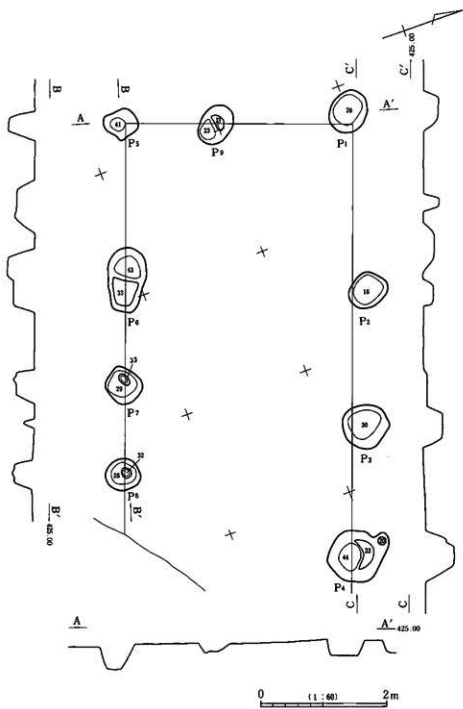


插图184 DUG X 掘立柱建物址22

(5) 溝 址

① 溝址23 (押図185)

ⅪX22gからⅪX24kにかけて検出した。調査延長は8mで、北側の第Ⅷ地区の溝址23に連続する。方向はほぼ直線的で、N34°Eを示す。幅250～120cm・深さ62～42cmを測り、断面形は逆台形をなし、深くえぐれる箇所が認められた。覆土は砂を主体にして複雑に堆積しており、長期間水が流れたことを示している。

出土遺物は弥生土器壺・甕、打製石斧等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

② 溝址27 (押図186)

ⅪX7fからⅪW23fにかけて検出した。調査延長は約60mで、北側の第Ⅷ地区溝址27に延長する。第Ⅹ地区中央部と南部で水田の造成により切られている。方向は水田の造成でせられる中央部で緩く南東側に曲がっている。幅440～20cmで、深さは水流によってえぐられる箇所があってまちまちである。断面形は不定形で、底は凹凸が著しい。覆土は灰色砂土が主体となる。

出土遺物は極めて多く、弥生土器・土師器環・高環、須恵器甕・蓋・環・高環がある。その中で圧倒的に多いのが奈良時代の須恵器蓋・環である。他に、銀環がある。

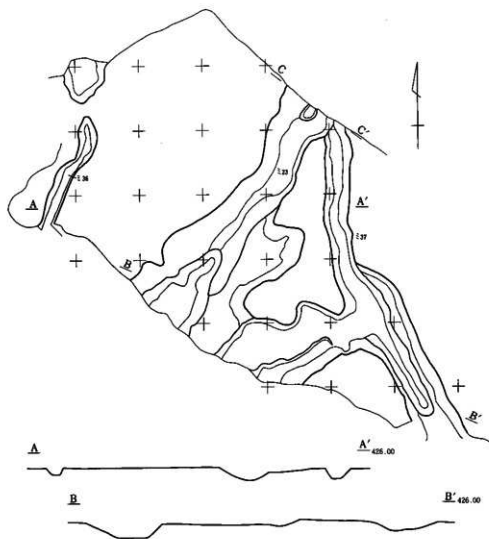
出土遺物から奈良時代から平安時代に位置づけられる。

③ 溝址35 (押図187・188・189)

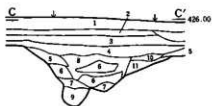
第Ⅹ地区の西側から南側にかけて検出し、南側が未調査のため確認できない箇所がある。ほ場整備が溝の底まで及ばないこともあり、調査は本址すべてを掘り下げずに、第Ⅰ～Ⅳトレンチを設定して、確認することとした。調査延長は約65mで、北側・南側に延長する。方向は中央部で南東側に曲がっている。幅は確認できた北西側で約15mである。西側と南側では土層が変化し、楨相が異なる。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチでは砂・礫が主体となり、かなり長期間水が流れたことを示している。南側の第Ⅳトレンチでは湿地的な堆積を成している。自然の流路により形成されたとき大きくとらえて同一の溝址としたが、異なることも考えられる。

出土遺物は弥生土器壺・甕、打製石斧等がある。とくに、第Ⅰトレンチの下層から弥生時代中期中葉から後半のまとまった資料が出土した。また、その上層からは弥生中期後半の壺が出土している。

出土遺物から弥生時代中期中葉から後半に位置づけられ、中期のうちに埋まってしまったと考えられる。



0 (1:120) 2m



0 (1:60) 2m

1. 暗青灰色土 (耕土)
2. 青灰色土 (旧耕土)
3. 青灰色土 (鉄分沈澱層・床土)
4. 灰褐色土
5. 灰色砂質土
6. 灰色砂土
7. 灰白色砂土
8. 暗灰褐色砂質土
9. 灰白色砂礫土
10. 暗灰色砂土
11. 黄褐色砂質土

插图185 DUG X 溝址23・36・37

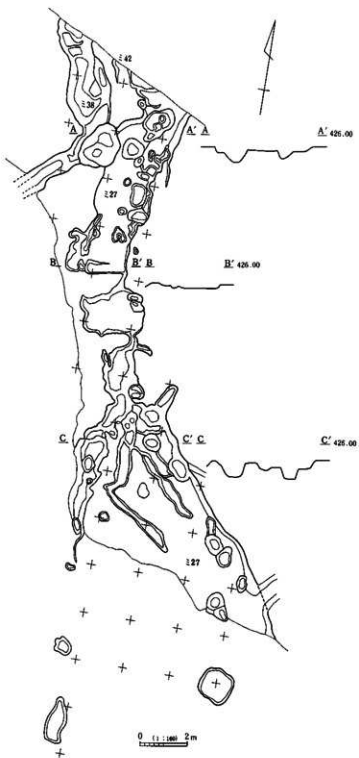
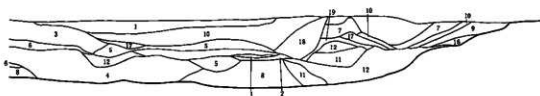
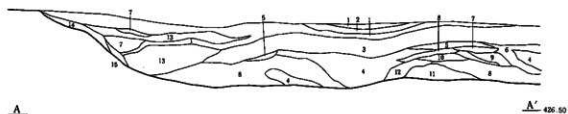
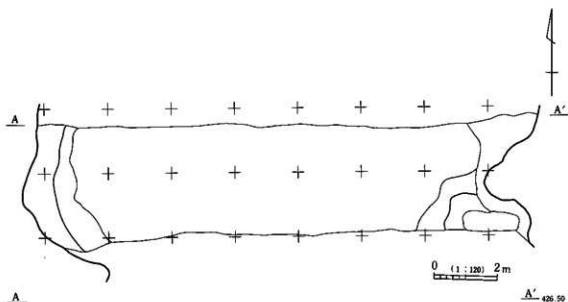


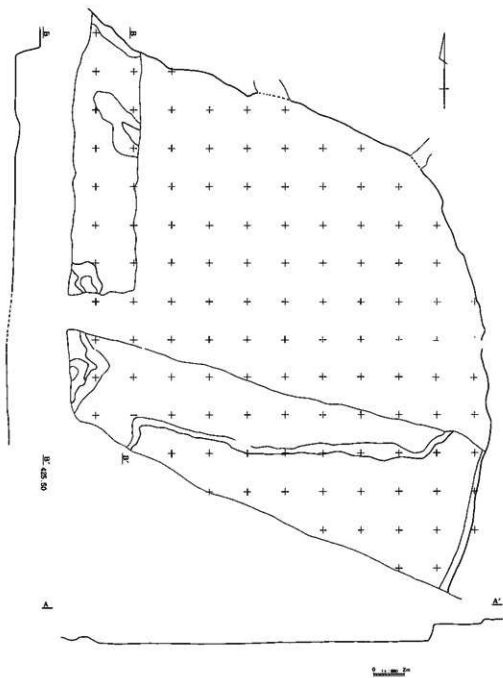
插图186 DUG X 沟址27·38·42



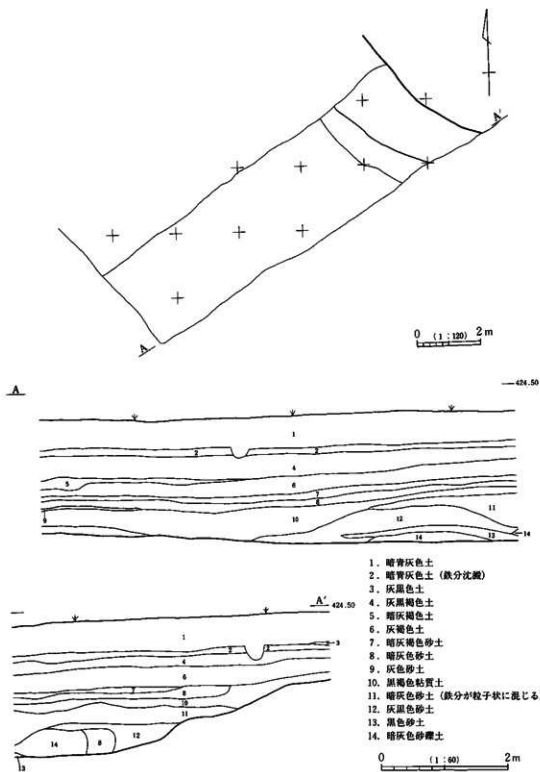
- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. 灰黑色粘質土 | 11. 青灰色砂土 |
| 2. 暗灰色粘質土 | 12. 灰色砂礫土 |
| 3. 暗灰褐色砂質土 | 13. 灰色砂土 (粒が大きい) |
| 4. 暗灰褐色砂礫土 | 14. 暗灰色土 |
| 5. 灰白色砂土 | 15. 灰黑色砂質土 |
| 6. 灰黑色砂土と灰白色砂土の互層 | 16. 明灰色砂土 |
| 7. 灰褐色砂土 | 17. 黒褐色粘質土 |
| 8. 明灰色砂礫土 | 18. 明灰褐色砂質土 |
| 9. 灰黑色砂土 | 19. 明灰色砂質土 |
| 10. 黒色粘質土 | |

0 (1:60) 2m

挿図187 DUG X 溝址35 I トレンチ



挿図188 DUG X 溝址35Ⅱ・Ⅲトレンチ



挿図189 DUG X 溝址35IVトレンチ

④ 溝址36 (挿図185)

ⅡX20iからⅡX21kにかけて検出した。調査延長は3.6mで、北側に連続する。方向はほぼ直線的で、N23° Eを示す。幅50～36cm・深さ20cm前後を測り、断面形は不定形である。覆土は砂を主体としていた。遺構の状況から、自然の小川の流路である。

出土遺物は弥生土器壺・甕、打製石斧等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

⑤ 溝址37 (挿図185)

ⅡX1fからⅡX25jにかけて検出した。弥生時代中期の溝址23を切る。調査延長は10mで、北側に延長する。方向はほぼ直線的で、N20° Wを示す。幅140～68cm・深さ51～21cmを測り、断面形は不定形で、覆土は砂を主体としていた。

出土遺物はない。

⑥ 溝址38 (挿図186)

ⅡX5gからⅡX5dにかけて検出した。弥生時代の溝址35を切る。調査延長は10mで、北側に延長する。途中で曲がって「く」の字状の形となる。幅180～70cm・深さ75～50cmを測り、断面形は不定形で、えぐれたり深くになっている箇所が認められた。覆土は灰色砂土を主体としていた。遺構の状況から、自然の小川の流路である。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕等がある。

出土遺物から弥生時代中期後半に位置づけられる。

⑦ 溝址39 (挿図190)

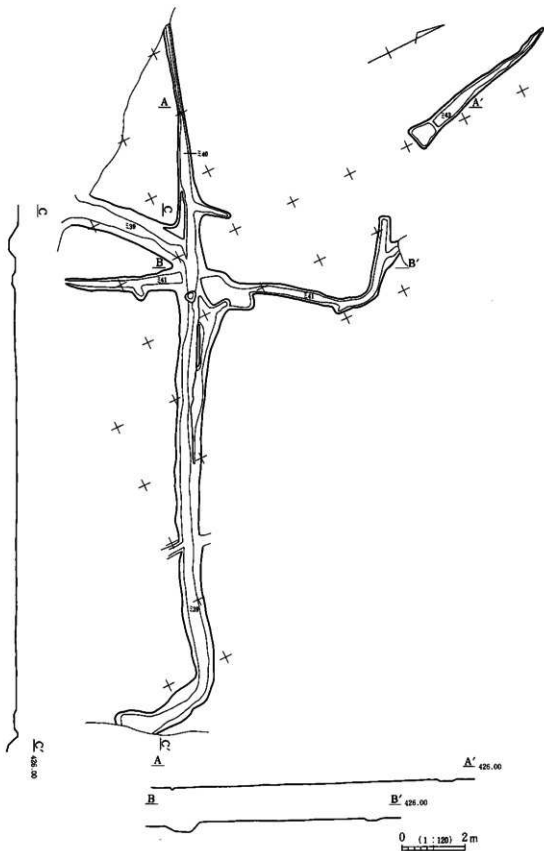
ⅡW11uからⅡW19sにかけて中間が長い「コ」の字状に検出した。北側の曲がる箇所の西側の溝は5m程二重となる。奈良時代の溝址27、溝址40・41と重複する。調査延長は20mで、幅86～56cm・深さ28～11cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物は須恵器甕・蓋・環がある。

⑧ 溝址40 (挿図190)

ⅡW8xからⅡW12wにかけて検出した。奈良時代の溝址27、溝址39・41と重複する。調査延長は7.2mで、幅74～16cm・深さ17～6cmを測る。方向はほぼ直線的で、N72° Wを示す。断面形は逆台形である。

出土遺物は少なく、土師器甕・環、須恵器甕・蓋・環、中世陶器がある。



挿圖190 DUG X 溝址39・40・41・42・43

⑨ 溝址41 (挿図190)

IⅡW12uからIⅡX13aにかけて検出した。溝址39・41と重複する。調査延長は12.4mで、途中で直角に曲がっている。幅46～24cm・深さ18～7cmを測る。断面形は逆台形をなす。

出土遺物は土師器甕、須恵器蓋・坏等がある。

溝址39～41は、形・規模・方向等で共通性が認められる。いずれも、区画的な役割を持つと考えている。問題となるのが時期である。出土量からすれば奈良時代の須恵器が多かった。しかし、中世陶器も出土しており、どちらの時期に所属させるか判断に迷っている。

⑩ 溝址42 (挿図186)

IⅡX6gで検出し、調査延長は1.2mで、北側に延長する。幅64cm・深さ18cmを測る。断面形は逆台形をなす。覆土は灰白色砂土である。遺構の状況から短期間に水が流れた自然の小川の流路の底部を把握し、両側にも続いていたと考えられる。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏、中世陶器がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

⑪ 溝址43 (挿図190)

IⅡX12bからIⅡX12dにかけて検出した。調査延長は3.3mで、両側では検出できなくなる。方向は直線的で、N15°Wを示す。幅80～16cm・深さ12～4cmを測り、断面形は逆台形を成す。覆土は砂を主体としていた。遺構の状況から自然の小川の流路の底部を把握し、両側にも続いていたと考えられる。

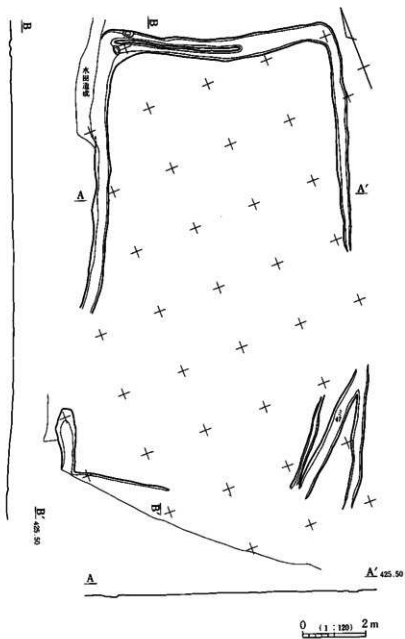
出土遺物はない。

⑫ 溝址44 (挿図191)

IⅡW20pを中心にして、14×8mの長方形に溝が巡るのが確認できた。奈良時代の溝址48を切る。南側で大部分、東側・西側で一部溝が確認できなかった。長軸方向はN20°Eを示す。幅60～20cm・深さ10～5cmを測り、断面形は逆台形をなす。北側の溝は西側が4m二重になっていた。役割はなにかを区画するための溝と考えられる。ただし、溝内側には関連する施設は認められなかった。

出土遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・坏がある。

出土遺物から平安時代前半に位置づけられる。



挿図191 DUG X 溝址44

⑬ 溝址45 (挿図192)

XW2pからXW3pにかけて検出した。平安時代前半の67号住居址を切る。調査延長は2.2mで、東側に連続し、西側でとぎれる。方向はほぼ直線的で、 $N73^{\circ}W$ を示す。幅70~40cm・深さ24~19cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は近世から近代の陶磁器片が6点ある。

出土遺物から近代に位置づけられる。

⑭ 溝址46 (挿図192)

XW22kからXW3oにかけて検出した。平安時代前半の67号住居址を切る。調査延長は15.8mで、東側に連続し、南側でとぎれる。途中で曲がっており、長い方の溝の方向は $N44^{\circ}E$ を示す。幅180~60cm・深さ65~30cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は奈良時代から近世までの土師器・須恵器・中世陶磁器・瓦がある。

出土遺物から近代に位置づけられる。

⑮ 溝址47 (挿図192)

XW22gからXW24mにかけて検出した。遺構の状況から2本の溝の重複と考えられる。1本は溝址46と関連する北西側の幅の広く深い溝で、もう1本は南東側と北西側に一部ある細く浅い溝である。前者が後者を切ると考えられる。前者は調査延長は7.2mで、南東側でとぎれ、北西側で溝址46と重なる。方向はほぼ直線的で、 $N40^{\circ}W$ を示す。幅140~80cm・深さ41~15cmを測り、断面形は逆台形をなす。後者は長方形もしくは「コ」の字状の形になっていたと推定され、南側は検出できなかった。奈良時代の溝址48を切る。前者は調査延長は7.2mで、長軸は $N51^{\circ}E$ を示す。幅40~28cm・深さ15~3cmを測り、断面形は逆台形をなす。溝址44と同様に、何らかの施設を区画する溝と考えられる。

出土遺物は須恵器と近世陶器があり、前者は浅い溝、後者は深い溝に関連すると考えられる。

出土遺物から平安時代と近代に位置づけられる。

⑯ 溝址48 (挿図193)

XW17oからXW24fにかけて検出した。平安時代前半の63号住居址、溝址44・47に切られ、奈良時代の69号住居址に切られる。調査延長は23.6mで、北西側は水田の造成で削平され、南東側に連続する。方向は直線的で、 $N38^{\circ}W$ を示す。幅108cm・深さ25~4cmを測り、断面形は逆台形をなす。規格性のある遺構の状況から、集落域の南東側を区切る溝と考えられる。

出土遺物は須恵器高台盤・坏、鉄滓がある。

出土遺物から奈良時代に位置づけられる。

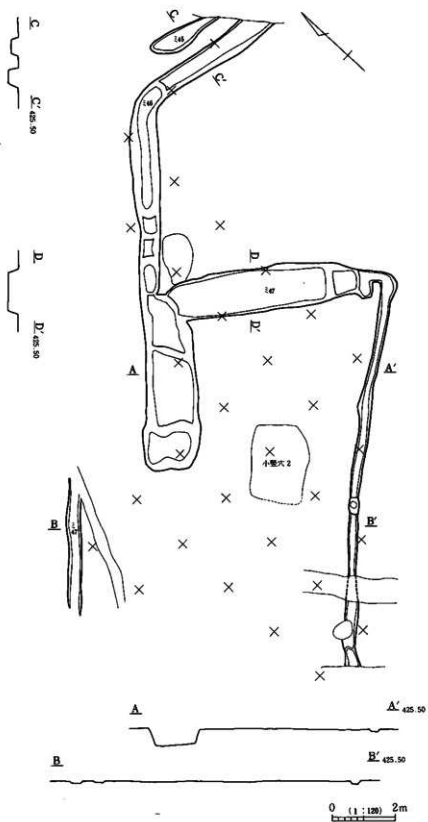


插图192 DUG X 溝址45·46·47

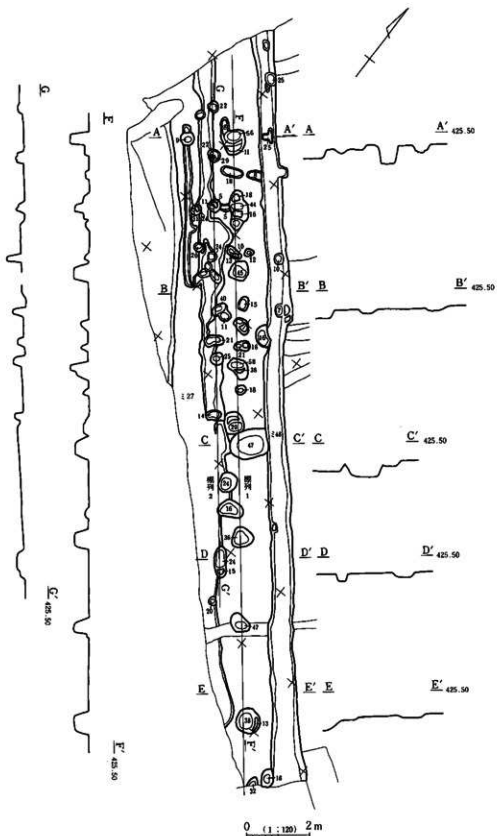


插图193 DUG X 溝址48、柵列1·2

㊦ 溝址49 (挿図194)

XFW6jからXFW7iにかけて検出した。奈良時代の66号・75号住居址と重複する。調査延長は4.0mで、南東側に連続する。方向は直線的で、 $N47^{\circ} W$ を示す。幅130～96cm・深さ35～25cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は少なく、土師器甕・須恵器蓋、鉄器がある。

出土遺物が少なく時期は確定できない。

㊧ 溝址50 (挿図194)

XFW4iからXFW5gにかけて検出し、中世の柱穴と重複する。調査延長は5.0mで、南東側に連続し、北西側でとぎれる。方向は直線的で、 $N37^{\circ} W$ を示す。幅50～40cm・深さ20～12cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は少なく、土師器杯がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

㊨ 溝址51 (挿図194)

XFW2jからXFW3iにかけて検出した。調査延長は1.9mで、南東・北西の両側でとぎれる。方向は緩く曲がって、 $N60^{\circ} W$ を示す。幅44cm・深さ30～19cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は少なく、須恵器が2点ある。

㊩ 溝址52 (挿図194)

XIW25iからXFW2jにかけて検出し、中世の柱穴と重複する。調査延長は4.7mで、北東・南西の両側でとぎれる。方向は緩く曲がって、 $N54^{\circ} E$ を示す。幅54～38cm・深さ8～2cmを測り、断面形は逆台形をなす。

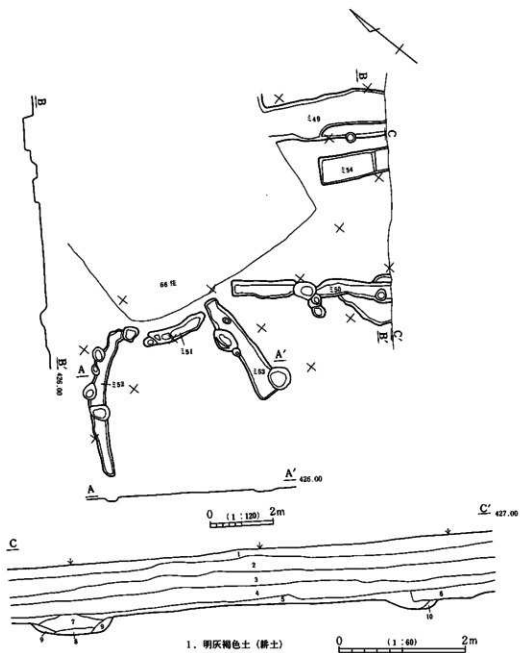
出土遺物は少なく、土師器・須恵器・灰釉陶器・中世陶器がある。

出土遺物から中世に位置づけられる。

㊪ 溝址53 (挿図194)

XFW3hからXFW3iにかけて検出し、中世の柱穴と重複する。調査延長は1.6mで、北・南の両側でとぎれる。方向はほぼ直線的で、 $N17^{\circ} E$ を示す。幅70～40cm・深さ7cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は少なく、土師器・須恵器がある。



1. 明灰褐色土 (耕土)
2. 青灰褐色土
3. 淡灰褐色砂質土
4. 灰褐色土
5. 灰黑色土 (灰褐色土混じり)
6. 淡灰褐色土
7. 暗灰褐色土
8. 暗灰褐色砂土
9. 灰黑色土 (黄褐色土混じり)
10. 黄褐色土

挿図194 DUG X 溝址49・50・51・52・53・54

㊦ 溝址54 (挿図194)

ⅩW6iからⅩW7iにかけて検出した。調査延長は2.2mで、北西側でとぎれ、南東側に連続する。方向は直線的で、N48° Wを示す。幅86～74cm・深さ12cmを測り、断面形は逆台形をなす。

出土遺物は少なく、土師器・須恵器がある。

溝址50～53は近接する位置にあり、遺構の状況も似通っている。周辺には柱穴が多く、関連を持つと考えられる。出土遺物が少ないが、柱穴や溝の中に中世陶磁器がみられるので、この時期の遺物の出土しないものも含めて中世に位置づけられる。

(6) 櫛列・柱穴

① 櫛列1 (挿図193)

ⅩW17nからⅩW23fにかけて9本の柱穴が直線で並び、櫛列とした。検出した長さは18mで、北西側は水田の造成の削平を受け、南東側に連続すると考えられる。柱間はまちまちで、3.4・3.0・2.8・2.0・1.6・1.3mを測る。方向はN38° Wを示す。柱掘り方は様々な形をしており、径80～60cm・深さ58～20cmを測る。

出土遺物は須恵器片15点と中世陶器片6点がある。

② 櫛列2 (挿図193)

ⅩW17nからⅩW21hにかけて9本の柱穴が直線で並び、櫛列とした。検出した長さは14mで、北西側は水田の造成の削平を受け、南東側では確認できなくなる。柱間はまちまちで、2.2・1.8・1.6mを測る。方向はN38° Wを示す。柱掘り方は様々な形をしており、径88～30cm・深さ40～11cmを測る。

出土遺物は須恵器片等がある。

櫛列1・2とも方向が同じであり、関連が認められる。集落域を区切る櫛とするのが妥当と考えている。

出土遺物から中世に位置づけられる。

③ 柱穴 (挿図195・196・197・198・199・200・201・202)

柱穴は66号住居址の南側に集中箇所が認められる。遺物に中世の陶磁器が多く、該期と考えられる。他には際だった集中箇所はないが、水田の造成によって削平されたものの存在は考慮される必要がある。個々の説明は省くが、遺構図はすべて掲載した。

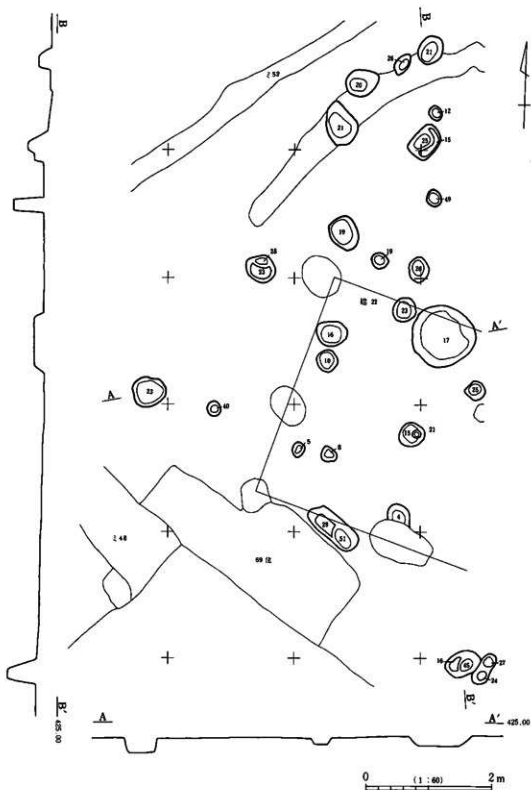
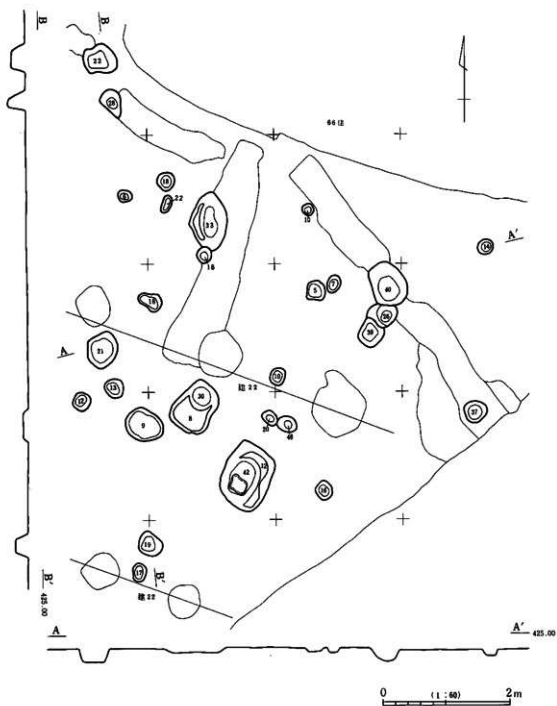
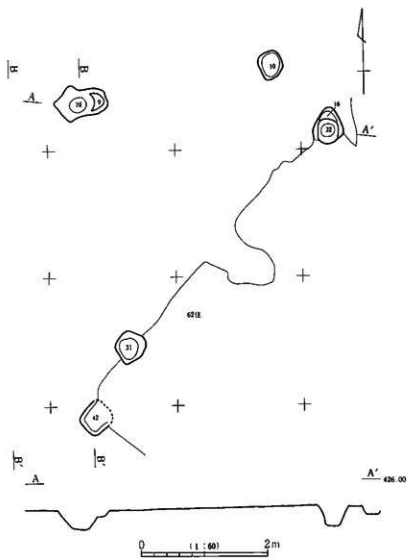


插图195 DUG X 柱穴(1)



挿図196 DUG X 柱穴(2)



挿圖197 DUG X 柱穴(3)

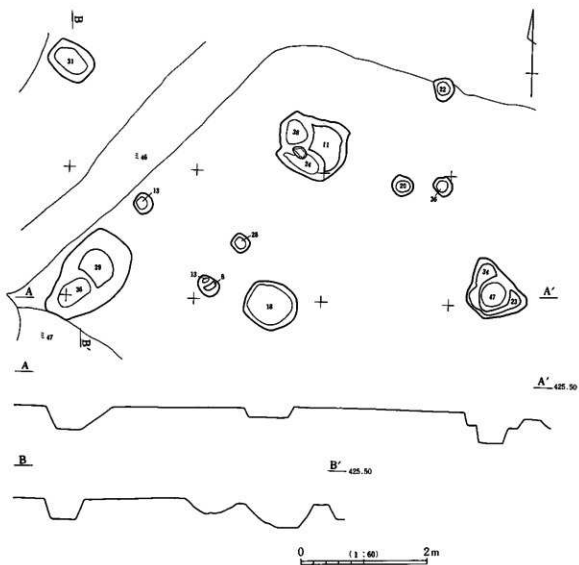


插图198 DUG X 柱穴(4)

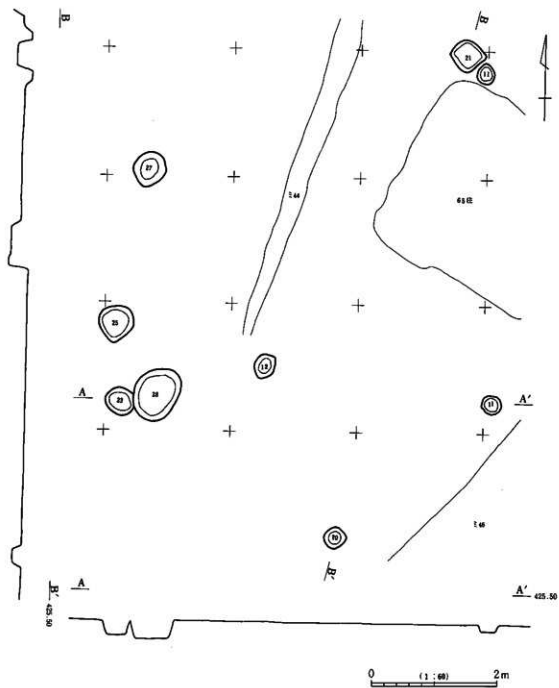


插图199 DUG X 柱穴(5)

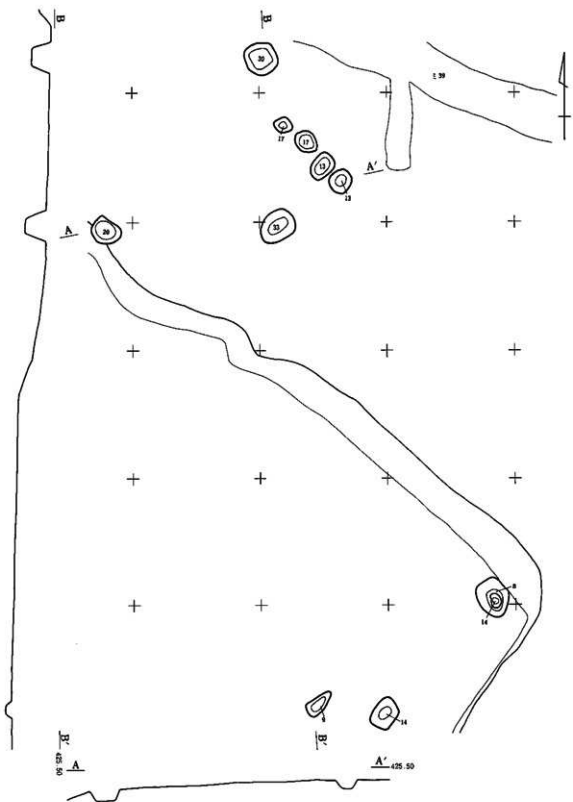
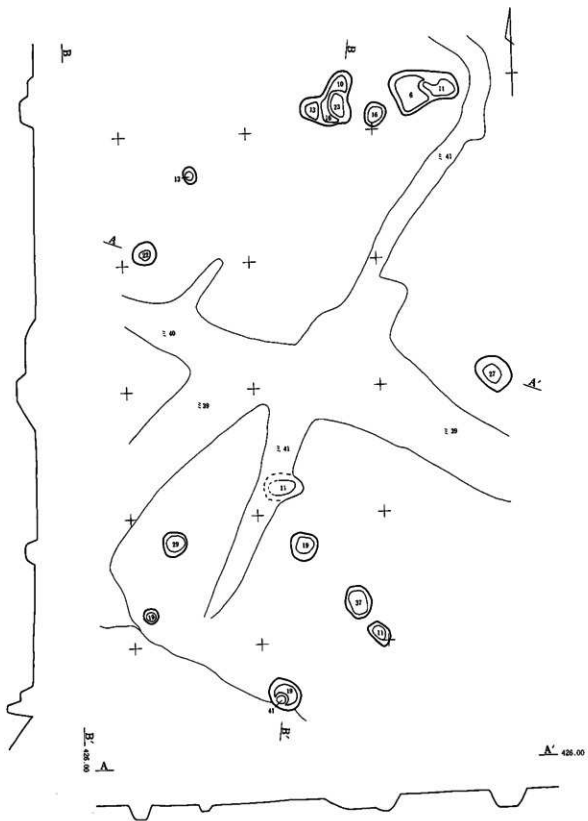


插图200 DUG X 柱穴(6)



挿圖201 DUG X 柱穴(7)

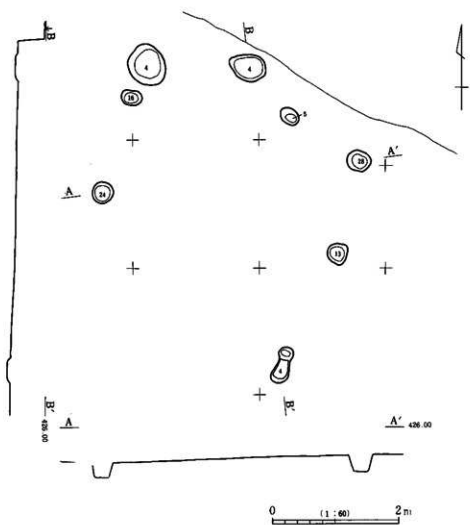
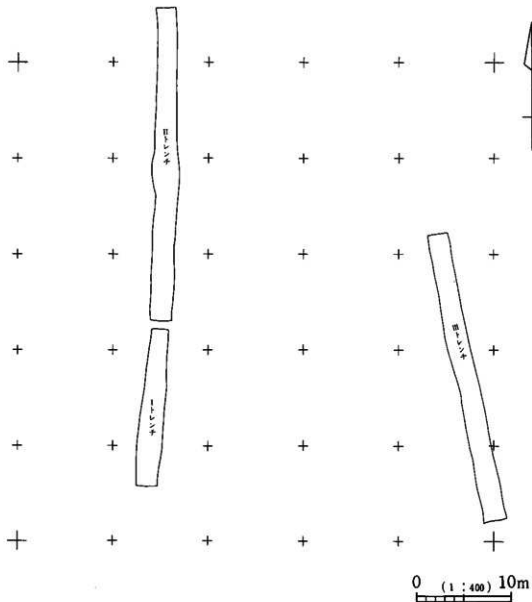


插图202 DUG X 柱穴(8)

11) トレンチ

① I・II・IIIトレンチ (挿図203)

第III地区の北側に、I・II・IIIトレンチを設定した。I・IIトレンチでは基盤まで1m以上と深く、土層は複雑な堆積をなしており、土曾川の押し出しによる堆積と考えられる。溝址3の延長部分が存在すると考えられたが、拡張しての調査はしなかった。IIIトレンチでは、遺構・遺物ともなく、拡張しての調査は不要と判断できた。



挿図203 DUG I・II・IIIトレンチ

小 結

堂垣外遺跡の今次調査で検出された遺構はすでに述べてきたところである。時間等の制約により遺物の資料化ができず、十分な説明・検討が加えられていないのは遺憾である。ここでは、調査によって得た問題点を項目ごとに指摘してまとめたい。

① 堂垣外遺跡の立地について

堂垣外遺跡は土曾川沿いに立地し、長さ750m・幅150mを測る広大な範囲を占めている。今回のほ場整備により、ほぼ全域が発掘調査の対象となり、その様相が明らかとなった。各調査地区ごとに状況は異なっており、大きくは2つに分ることが可能である。それは、北側に位置する弥生時代・古墳時代・平安時代・中世の集落が立地する箇所と、南側の溝址を主体とした場所である。その中間には湿地帯が介在しており、地形的にも遺跡を二分していたことになる。調査前の状況は、遺跡全体が緩く南側に傾斜しながら連続しており、中間に湿地帯が存在するとは考えられなかった。また、北側と南側では土の堆積状況もことなり、南側が深く砂の堆積が多く、災害による押し出しを受けていると考えられる。北側では砂は比較的少なく、集落として選ばれた場所とそれ以外の箇所の違いを示している。

② 堂垣外遺跡の古墳時代から平安時代の集落について

堂垣外遺跡北部の125×75mの範囲を集落域としていた。時期毎に遺構の分布に濃淡があり、かつ遺構が空白になる時期があるが、弥生時代中期以降中世まで、長期間にわたって利用していたことが分かった。時期を大まかに分けると、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代から平安時代前半、平安時代終末から中世の4つに分けることが可能である。時期毎に検出された遺構は、以下のとおりである。

弥生時代中期後半	……………	竪穴住居址1軒・溝址3本等
古墳時代後期	……………	竪穴住居址14軒・溝址4本
奈良時代から平安時代前半	……………	竪穴住居址39軒・掘立柱建物址16棟、溝址8本
平安時代終末から中世	……………	竪穴住居址6軒・柵列2本、溝址3本
これに第I次調査で検出された以下の遺構を考慮に入れる必要がある。		
弥生時代中期後半	……………	竪穴住居址2軒・流失遺構・溝址1本
奈良時代から平安時代前半	……………	竪穴住居址4軒

最も主体となる時期は古墳時代後期から平安時代までである。まず、該期集落について考えてみたい。

古墳時代後期の竪穴住居址は集落域のなかの北側に集中する傾向を示す。土器の分析が済んでおらず、かつ当地方の該期土器編年が整備されていないので、詳細に位置づけることはできないが、6世紀から7世紀の古墳時代後期をとおしての集落と考えられる。当然、集落として何時期

かの変遷が考えられるが、これは今後に残された課題である。

古墳時代には溝址20・21・25・27もある。とくに、溝址20は集落の西側から南側を通過して東側に続いている。遺構の状況からみれば、自然の川の流路と考えられるが、砂の中に大量の遺物が捨てられており、集落で利用されていたことが考えられる。この溝の南側には該期遺構はまったくなく、集落域を画していたといえる。

規模からみて、大集落になるとは考えられないが、溝址で画された古墳時代後期全般の集落の一端が明らかになったといえ、こうした集落の調査は少ないだけに、貴重な資料を提供したこととなった。

奈良時代から平安時代前半が堂垣外遺跡の主体をなす時期である。竪穴住居址の他掘立柱建物址・溝址があり、これらで集落を構成していたといえる。遺構の時期毎の詳細な位置づけは今後の課題であるが、当地方の該期集落としては大規模な集落の一つといえる。遺構の中には礎石をもつ大型の竪穴住居址や規模の大きな掘立柱建物址があり、一般的な集落とは様相を異にしている。出土遺物も、大型住居等から三彩陶器・円面硯・墨書土器・銅製帯金具・馬具等特殊な遺物が出土しており、集落の性格を推定する材料となる。こうした遺物は、これまで地方官衙やそれに関連する遺跡と推定される遺跡からの出土が多く、当遺跡でもその例外ではない。律令時代伊那郡の郡衙と推定されるのは飯田市座光寺の恒川遺跡群で、当遺跡と同一段丘面に立地し、1km程離れた距離に位置している。こうした位置関係や出土遺構・遺物から、堂垣外遺跡は恒川遺跡群遺跡周辺に位置して郡衙を支える有力集落の一つと考えられる。集落は、大型住居を核として竪穴住居址・掘立柱建物址や倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物址で構成されている。古墳時代の集落と同様で、自然の川の流路と考えられる溝址が集落域を画しており、古墳時代に比べると集落範囲が広がっている。

個々の遺構では、礎石をもつ竪穴住居址が目玉される。恒川遺跡群田中・倉垣外地籍76号住居址で発見されてから、類例は増えてきている。一般的な住居とは考えられず、集落内で何等かの役割を果たしていたはずである。集落の長の家・集会所等の用途が考えられるが、類例を調査する中でもう少し検討する必要がある。

掘立柱建物址は16棟調査された。規模・桁行方向が少しずつ異なっており、竪穴住居址に付随して何時期かに分けることが可能と考えられる。時期の決め手となる遺物が出土することが少なく詳細な位置づけが困難であるが、様々な要素を考慮するなかでその変遷を把握する必要がある。また、倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物址の検出も貴重である。集落の周辺部に近い場所に位置しており、竪穴住居址・掘立柱建物址の場所を含めると、集落内での土地利用の状況を把握する資料となる。

平安時代前半以降は空白期間がある。また集落として利用され始めるのは平安時代終末からであるが、竪穴住居址が散在するだけで、集落の様相は前時代とまったくことなっている。この時期の長され例は少ないのであるが、通常の集落と変わりなく、集落の継続期間も長くない。

① 弥生時代の集落について

弥生時代中期の竪穴住居址が1軒と溝址がある。竪穴住居址の調査軒数が少なく集落の様相は不明であるが、調査区の北側に集落が続いていたことが考えられる。それは、溝址22が該期の区画的な溝と考えられ、その北側に集落が広がると考えるのが自然であるからである。後の時代の遺構や粘土探掘坑、水田の造成で失われた遺構の存在も考慮に入れる必要がある。

該期では溝址35も大きな存在である。諸般の事情で全面掘り下げての調査はできなかったが、遺跡の北側から南側に川の自然流路として流れていたことが考えられる。規模が大きく土層は複雑に堆積しており、長期間にわたると考えられる。規模を考慮に入れると現在遺跡北側にある土曾川が流れていたと考えられる。多量に遺物を包含しており、いろいろな形で利用していたと考えられる。主体となる時期は中期中葉から後半で、上層から出土した遺物から、埋没して流路が変わるのは、弥生時代中期終末と考えられる。

問題となるのは第Ⅰ次調査の弥生時代中期の竪穴住居址と流失遺構である。調査位置は溝址35が延長する箇所であり、土層や遺構の状況も類似している。明らかに溝址35が延長していると考えられ、竪穴住居址や流失遺構はなかったと考えざるを得ない。第Ⅰ次調査が狭い範囲に限定されたために誤ったと考えられ、ここに訂正をする。

② 集落の広がりについて

堂垣外遺跡の集落は、南側は溝址・湿地帯で範囲が把握できている。北側は現在土曾川による浸蝕で崖となって区画されているが、集落が営まれていた時期も同様であったとは考えられない。というのも、竪穴住居址の分布が北側で密であり、なかには崖に切られている遺構も存在するからである。こうしたことから、集落は北側に広がっていたことが想定され、土曾川の位置もまったく違っていた可能性もある。しかし、北側の範囲を推定する材料は少なく、どこまでかを推定することはできなかった。

③ 南側の調査地区について

南側の調査地区で注意されるのは溝址3である。北側は第Ⅲ地区から南は第Ⅳ地区まで約180m直線的に続くのが確認できた。規格性のある掘り方や方向から人為的に掘削されたかと判断し、水が流れた痕跡から用水路と考えた。北側がどこまで連続するか把握できず、かつ南側が浅くなって遺構の状況が必ずしも明確ではないが、かなり大規模な土木工事であったことが考えられる。北側の水源（土曾川を想定している）から南に水を引き、水田の灌漑に利用していたといえる。時期は出土した遺物から古墳時代前期と考えらるが、こうした大規模な土木工事をする技術・作業体制ができていたことを示している。

その他に、南側の調査地区で数多くの溝址が調査された。大半が川の自然流路と考えられ、第Ⅳ地区の南側では大きくまとまって、比較的規模の大きな溝址となっていた。調査前の地形からは判断できなかっただけに貴重な結果となった。

堂垣外遺跡第次調査で得られた問題点を思いつくままに記してきた。それぞれに貴重な情報を得たわけであるが、それを十分に咀嚼する時間・能力がなく、まったく中途半端な結果となってしまった。今後に残された課題が多いことに呆然としている。少しずつでも解決できるようにしたいと考えている。

引用・参考文献

- | | | |
|----------|-------|--------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1986 | 『恒川遺跡群』 |
| 飯田市教育委員会 | 1988 | 『恒川遺跡群－田中・倉垣外地籍』 |
| 飯田市教育委員会 | 1991 | 『恒川遺跡群－新屋敷遺跡』 |
| 飯田高等学校 | 1977 | 『高松原』 |
| 上郷町教育委員会 | 1983 | 『堂垣外遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1984 | 『高松原』 |
| 上郷町教育委員会 | 1987 | 『棚田遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1988 | 『矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989A | 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989B | 『中島・矢崎遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1989C | 『丹保遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1991 | 『敷越遺跡』 |
| 上郷町教育委員会 | 1993 | 『丹保遺跡』 |

2. 橋爪遺跡

橋爪遺跡では第Ⅰ～Ⅵ地区と第Ⅰ～Ⅲトレンチの調査を実施した。調査面積と検出した遺構は下記のとおりである。

第Ⅰ地区	676㎡、	竪穴住居址1軒・	方形周溝墓2基・	土器棺墓3基・	土器集中区3箇所・	柱穴	
第Ⅱ地区	1,358㎡、	竪穴住居址2軒・	竪穴状遺構2基・	方形周溝墓2基・	土器棺墓1基・	溝址1本・土坑7基・	柱穴
第Ⅲ地区	598㎡、	竪穴住居址2軒・	方形周溝墓2基・	土坑4基			
第Ⅳ地区	491㎡、	調査遺構なし					
第Ⅴ地区	170㎡、	溝址1本					
第Ⅵ地区	180㎡、	調査遺構なし					
第Ⅰトレンチ	44㎡、	調査遺構なし					
第Ⅱトレンチ	32㎡、	調査遺構なし					
第Ⅲトレンチ	80㎡、	調査遺構なし					

1) 第Ⅰ地区

(1) 基本層序

水田耕土の下層が遺構確認面で、黄褐色粘質土であり、かなり削平を受けているようである。

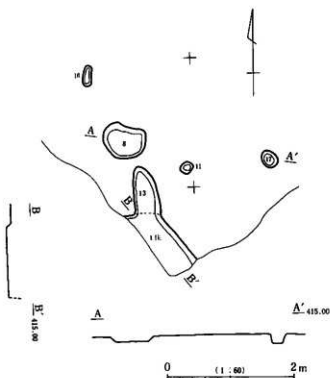
(2) 竪穴住居址

① 1号住居址(挿図204)

ⅡN16aを中心として検出したが、大部分が調査区外であり、詳細は不明である。竪穴住居址コーナー部の一部と思われる落ち込みを確認したので1号住居址とした。規模・主軸方向などは不明であるが、壁高は最大9cmを測り緩やかな壁面をなす。床面は軟らかく不良である。住居内施設は確認されなかった。

出土遺物は時期不明の打製石斧がある。

時期決定の根拠に欠け、時期不明である。



挿図204 HSZ I 1号住居址

(3) 方形周溝墓（土器棺墓）

① 方形周溝墓1（挿図205・206）

XIN21pを中心として検出し、北西側周溝は削平されているが、ほぼ全体を調査した。方形周溝墓2を切る。15.5×13.5mを測る方形周溝墓で、主軸方向はN40° Eを示す。周溝の形態は方形を示し、北東の周溝は方形周溝墓2の周溝を利用している。南東側の周溝が2.1mとぎれるが、土橋部と考えられる。周溝は幅2.9～1.6m・深さ最大1mを測り、断面形は逆台形を示す。主体部は確認されなかった。方形周溝墓2の周溝と共用する北東周溝に甕2個体・壺1個体を確認した。出土状態から土器棺墓と考えられる。中央部の壺棺2は大型の壺の胴部に焼成後の穿孔が認められた。

出土遺物は弥生土器壺・甕・台付甕・高環、有肩扇状形石器・磨製石畿未成品等がある。

出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

② 方形周溝墓2（挿図205）

XIN16kを中心として検出し、北側は調査区外となり、約4/5程を調査した。方形周溝墓2に切られる。18×17mを測る方形周溝墓で、主軸方向はN40° Eを示す。周溝の形態は方形を示し、

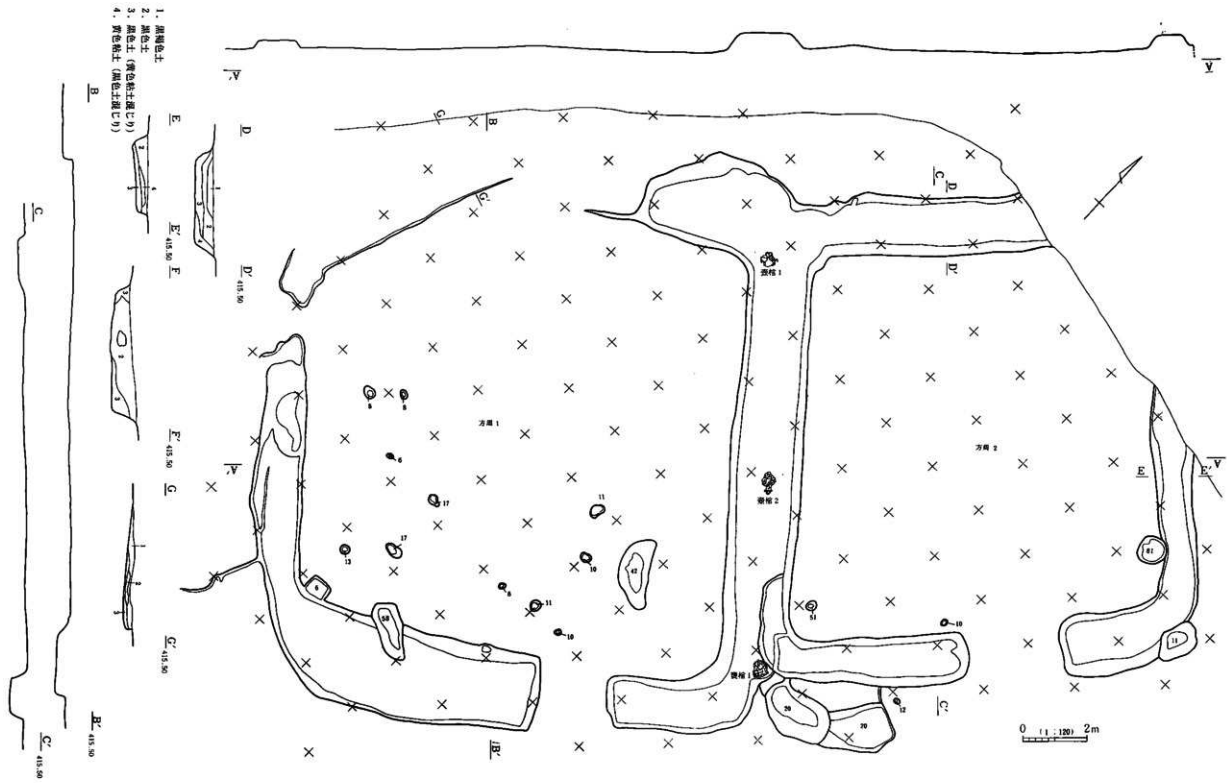
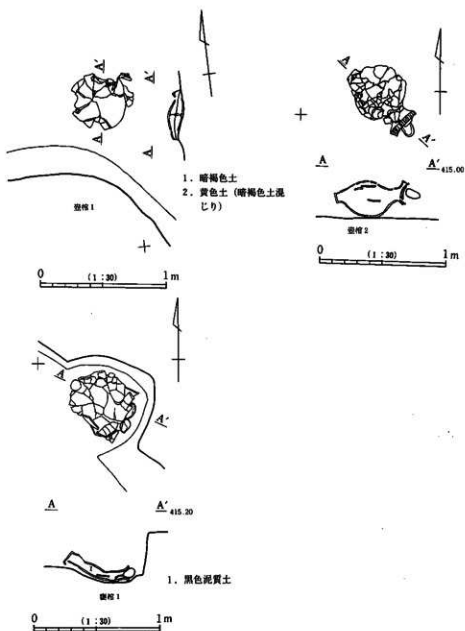


插图205 HSZ I 方形阶梯墓1·2



挿図206 HSZ I 方形周溝墓1、土器棺墓

南西の周溝は方形周溝墓1の周溝として利用されている。南東側の周溝中央部やや北東寄りが2.9mとぎれるが、土橋部と考えられる。周溝は幅1.9~1.1m・深さ最大40cmを測り、断面形は逆台形を示す。主体部は確認されなかった。

出土遺物は弥生土器壺・甕、有肩扇状形石器・磨製石鏃未成品等がある。

出土遺物より弥生時代後期後半に位置づけられる。

(4) 土器集中区

① 土器集中区1 (挿図207)

XI N17hを中心として検出した。弥生時代後期後半の方形周溝基1に切られる。比高2cmの落ち込み及び穴に伴って土器が出土している。住居址の可能性もあるが詳細が不明であるので土器集中区とした。

出土遺物は弥生時代後期壺・甕と、打製石斧・有肩扇状形石器・横刃形石器である。

② 土器集中区2 (挿図207)

XI N17hを中心として検出した。ほぼ円形に土器が散布している。これらの遺物に関連する遺構は確認できなかった。

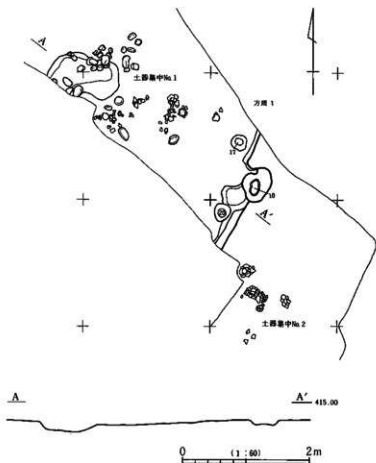
出土遺物は弥生時代後期壺・甕である。

③ 土器集中区3

図示していないがXI N13jを中心として縄文時代晩期壺が集中する箇所を確認した。

(5) 柱 穴

調査区西側で多く確認した。個々の説明は割愛する。



挿図207 HSZ I 土器集中区1・2

2) 第II地区

(1) 基本層序

水田耕土の下層が遺構確認面で、黄褐色砂礫土が遺構確認面である。

(2) 竪穴住居址

① 4号住居址(挿図208)

IIN21wを中心として検出し、南側は調査区外となり、3/4強程を調査した。弥生時代後期の方形周溝墓5を切る。5.2×4.8mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す。壁高は13~12cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は平坦でしまりがあり良好である。主柱穴はP1~P3で、P4は入口施設と考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を56×48cmの楕円形に掘り凹め、内側に石を2個配置する。焼土が極薄く認められた。

出土遺物は弥生土器壺・甕、有肩扇状形石器がある。有肩扇状形石器は床面直上より出土した。出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

② 5号住居址(挿図209)

IIO22iを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。上層はかなり削平されている。4.3×3.9mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN46°Wを示す。壁高は最大8cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は平坦でしまりがあり良好である。主柱穴はP1~P4である。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する炉縁石を有する地床炉で、床面を39×37cmの楕円形に掘り凹め、内側に打製石斧を転用し、炉縁石として配置する。焼土は認められなかったが、覆土から弥生土器壺片が出土した。

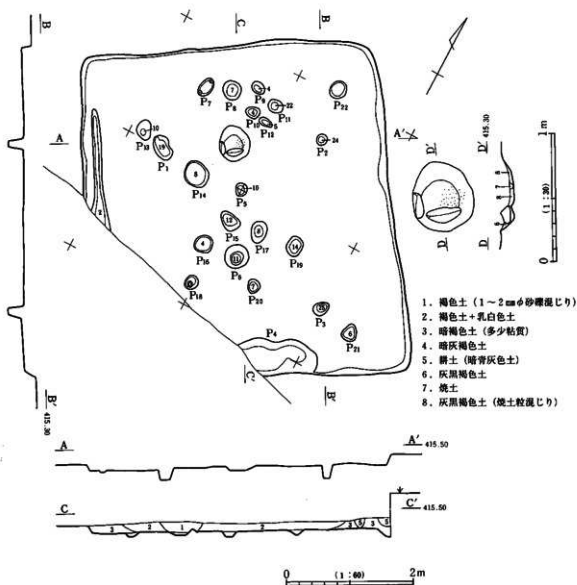
出土遺物は弥生土器壺・甕、打製石斧がある。

出土遺物から弥生時代後期後半に位置づけられる。

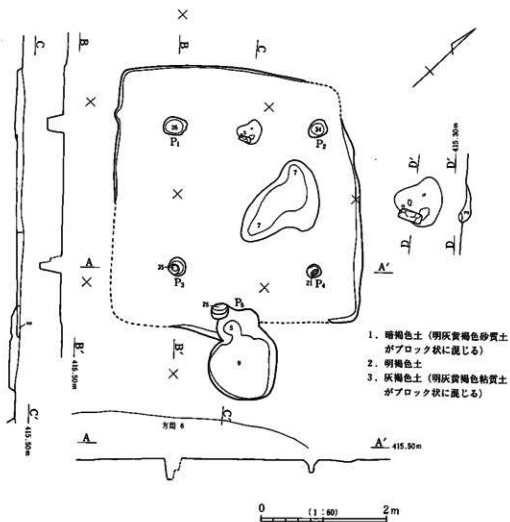
(3) 竪穴状遺構

① 竪穴状遺構1(挿図210)

IIO23cを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期後半の方形周溝墓6に切られる。4×2.6mを測り、長軸方向がN64°Wを示す不定形の遺構である。断面は2段に落ち込み、南東側にテラス及び穴を有する。底部には特別な人為的加工は見られなかった。本址の性格は不明であったため、竪穴状遺構とした。



挿図208 HSZ II 4号住居址



挿図209 HSZ II 5号住居址

出土遺物は弥生土器壺と思われる小破片がある。

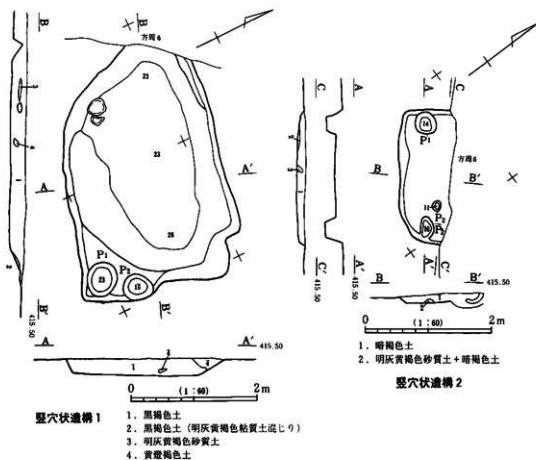
遺構の切り合い関係から弥生時代後期後半以降と思われる。

② 竪穴状遺構 2 (挿図210)

XIO22aを中心として検出し、約半分を調査した。弥生時代後期後半の方形周溝墓6に切られる。2.1×0.8mを測り、長軸方向がN54°Wを示す、ほぼ隅丸長方形を呈する遺構である。断面は緩やかに落ち込み、北西壁・南東壁下及び南東壁北側に穴を確認した。底部は凹凸があり、特別な人為的加工は見られなかった。本址は名称を竪穴状遺構としたが、土壙墓の可能性も指摘しておく。

出土遺物はない。

遺構の切り合い関係から弥生時代後期後半以降と思われる。



挿図210 HSZ II 竪穴状遺構1・2

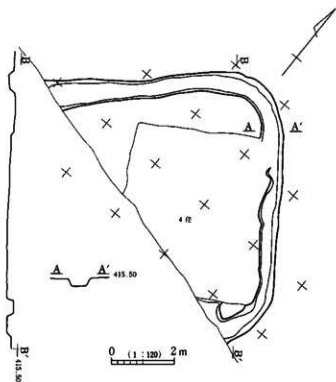
(4) 方形周溝墓

① 方形周溝墓4 (挿図212)

ⅡO15cを中心として検出した。上層がかなり削平されており、周溝が確認できなかった箇所が多い。時期不明の土坑11に切られる。13.2×12mを測る方形周溝墓で、長軸方向がN133° Wを示す。周溝の形態は長方形を呈すると思われる。前述したように周溝を確認できなかった箇所があるので、土橋部の有無・位置等は不明である。周溝は幅1～0.5m・深さ23～3cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面はやや緩やかに立ち上がる。主体部は周溝内中央部やや南西側に位置し、2.3×1.4mの長方形を呈し、断面形は逆台形で、緩やかに立ち上がる。底部の長軸側両端に穴を確認したが、組合せ式箱形木棺の小口痕と考えられる。

出土遺物は弥生土器壺・甕片があり、いずれも周溝内から出土している。

出土物には弥生時代中期の壺片・弥生時代後期の壺・甕片があるが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図211 HSZ II 方形周溝墓5

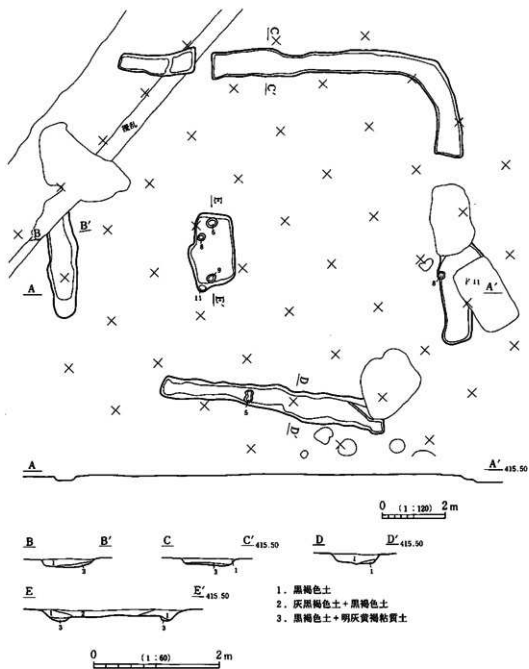


插图212 HSZ II 方形周溝墓 4

② 方形周溝墓5 (挿図211)

I1N20wを中心として検出した。南側は調査区外となり、約半分を調査した。弥生時代後期の4号住居址に切られる。一辺が8.8mを測る方形周溝墓で、主軸方向はN38°Wと考えられる。周溝の形態は方形を呈すと思われる。未調査部分があるので、土橋部の有無・位置等は不明である。周溝は幅92~60cm・深さ23~8cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面はやや緩やかに立ち上がる。主体部は検出できなかった。

出土遺物は弥生土器甕片があり、周溝内から出土している。

遺構の切り合い関係及び周囲の遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。

③ 方形周溝墓6 (挿図213)

I1O24cを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期後半以降の竪穴状遺構1・2に切られる。10.9×9.5mの方形周溝墓で、主軸方向はN50°Wと考えられる。周溝の形態は長方形を呈し、南東側周溝の中央部が3.5mとぎれ、土橋部と考えられる。周溝は幅85~40cm・深さ22~10cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壁面はやや緩やかに立ち上がる。主体部は検出できなかった。西側周溝コーナーから南側に中形の壺が横倒しの状況で検出された。口縁部には別個体の壺の胴部片で蓋をしてあった。出土状況より土器棺墓と思われる。

出土遺物は弥生土器壺・小形甕、打製石斧がある。

出土遺物及び周囲の遺構の状況から弥生時代後期後半に位置づけられる。

(5) 溝 址

① 溝址1 (挿図214)

I1O19hから2gにかけて検出した。調査延長は17.1mで、下流は湿地帯に流れ込む。上流の西側は削平されており、検出できなかった。方向はほぼ直線的でN83°Wを示す。幅148~55cm・深さ15~8cmを測り、断面形は基本的に逆台形を示すが、底部に小規模の凹凸がある。底部の状況から自然流路と推定される。

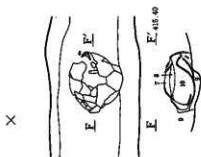
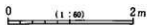
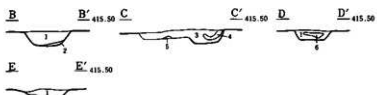
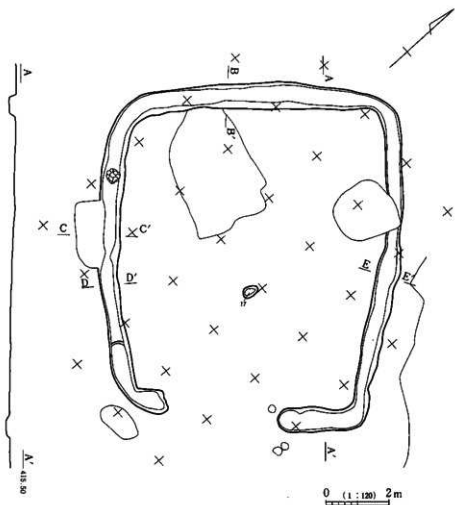
出土遺物は弥生土器甕片、須恵器片、灰釉陶器片、打製石斧があるが、すべて流れ込みと考えられる。

時期決定の根拠に欠けるが、平安時代以降と推定される。

(6) 土坑・柱穴

① 土坑5 (挿図215)

I1O17aを中心として検出した。1.4×1.1mの不定形を呈し、深さは39cmを測る。断面形は不定形である。



1. 黑褐色土
2. 黑褐色土+明灰黄褐色粘质土
3. 暗褐色土
4. 灰黑褐色
5. 明灰黄褐色砂质土+暗褐色土
6. 明灰黄褐色砂质土+黑褐色土
7. 黑褐色砂质土
8. 黑褐色粘质土
9. 暗褐色粘质土
10. 暗灰黄褐色砂质土(暗褐色粘质土が混じる)

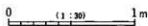


插图213 HSZ II 方形周溝墓6

② 土坑6 (挿図216)

II O20cを中心として検出した。

1.7×1 mのやや歪んだ楕円形を呈し、深さは48cmを測る。断面形は逆台形である。出土遺物は弥生土器片がある。

③ 土坑7 (挿図216)

II O20eを中心として検出した。1.3×1.

3mの円形を呈し、深さは17cmを測る。断面形は皿状である。

出土遺物は弥生土器片がある。

④ 土坑8 (挿図215)

II O21eを中心として検出した。2×1.

5mのやや歪んだ楕円形を呈し、深さは21cmを測る。断面形は皿状である。

出土遺物は弥生土器片がある。

⑤ 土坑9 (挿図215)

II O20lを中心として検出した。2.9×

1.5mの長楕円形を呈し、深さは65cmを測る。断面形は椀状である。ロームマウンドの可能性が有る。

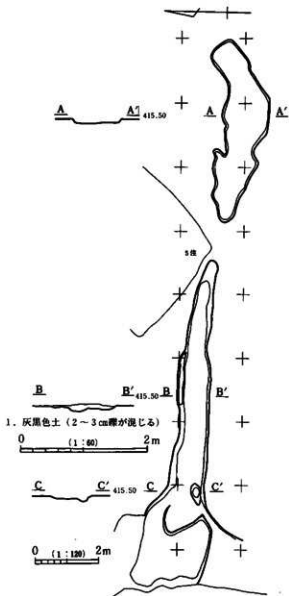
⑥ 土坑10 (挿図215)

II O22nを中心として検出した。1.7×

0.8mのやや歪んだ楕円形を呈し、深さは61cmを測る。断面形は段を持つ。

⑦ 土坑11 (挿図216)

II O19fを中心として検出した。2.2×1.3mの隅丸長方形を呈し、深さは26cmを測る。断面形は逆台形で、底部に穴を有する。



挿図214 HSZ II 溝址1

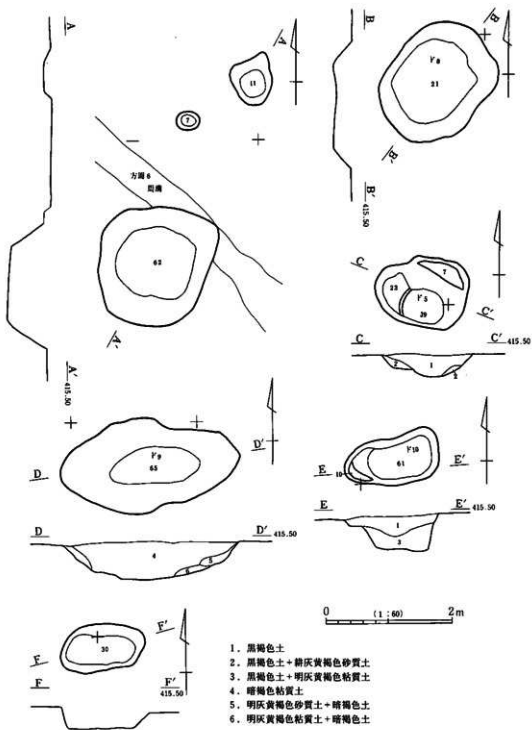
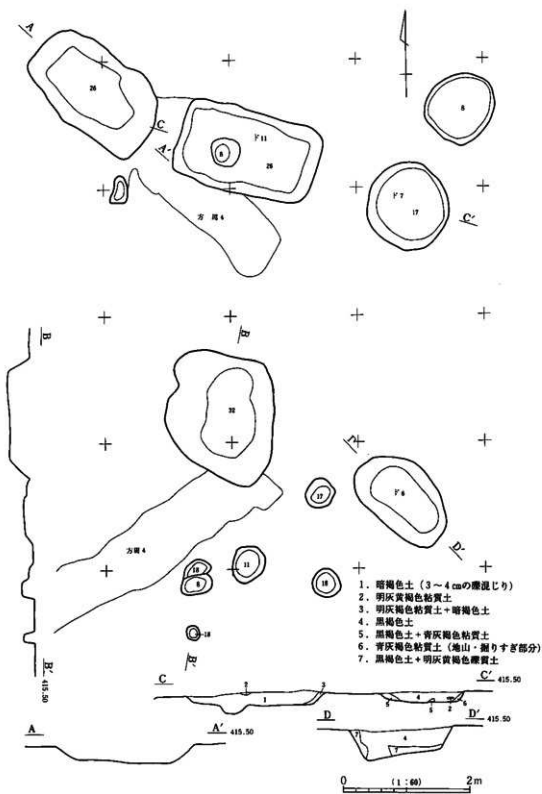


插图215 HSZ II 土坑5·8·9·10、柱穴



挿図216 HSZ II 土坑6・7・11、柱穴

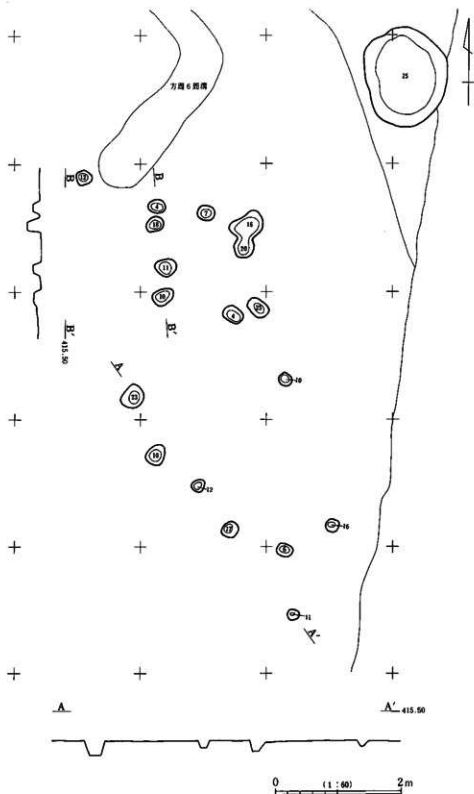


插图217 HSZ II 柱穴(1)

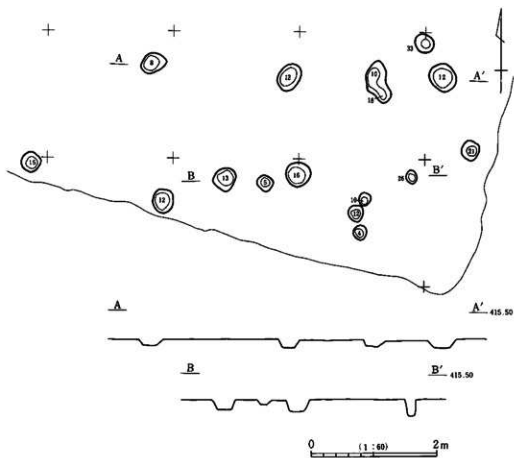


插图218 HSZ II 柱穴(2)

3) 第III地区

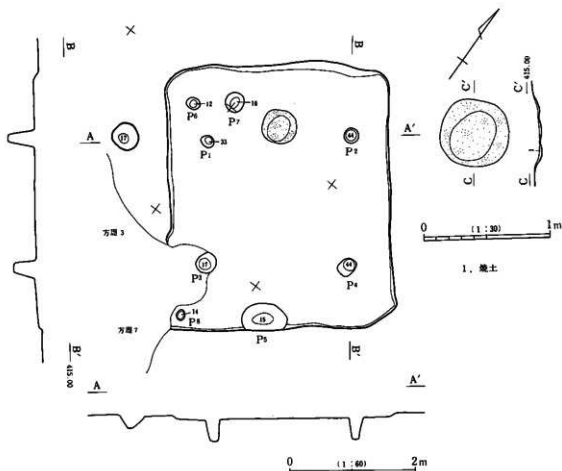
(1) 基本層序

水田耕土の下層が、遺構検出面であり灰褐色砂礫土である。

(2) 竪穴住居址

① 2号住居址 (挿図219)

XIN4qを中心として検出し、ほぼ全体を調査した。弥生時代後期の方形周溝墓3・7に切られる。4.2×3.5mの隅丸長方形の竪穴住居址で、主軸方向はN39°Wを示す。壁高は最大10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は平坦でしまりがあがるが礫が多い。支柱穴はP1～P4で、P

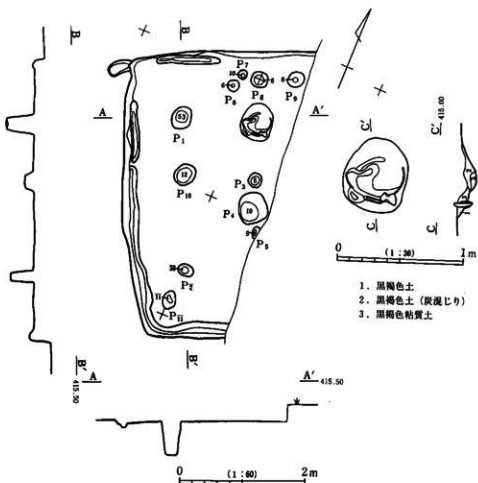


挿図219 HSZ III 2号住居址

5は入口施設と考えられる。炉址は北西側主柱穴の中間に位置する地床炉で、床面を55×53cmの円形に掘り凹めている。焼土が極薄く認められた。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・甕片がある。

時期決定できる根拠がないが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期に位置づけられる。



挿図220 HSZ III 3号住居址

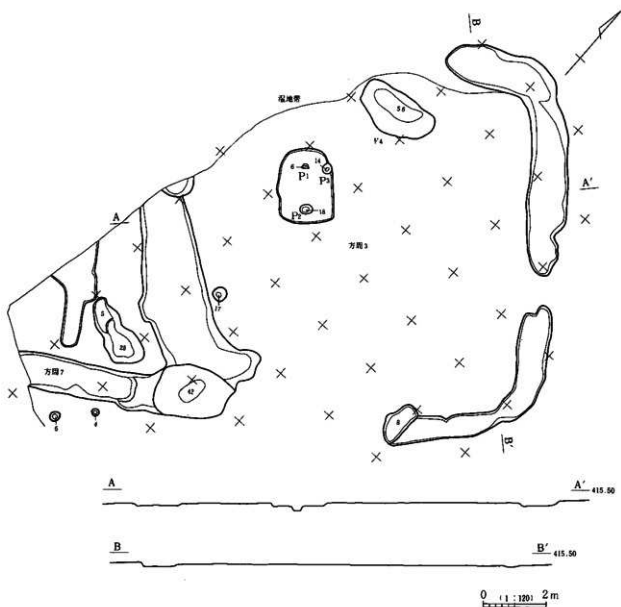
① 3号住居址 (挿図220)

XIIN8pを中心として検出した。東側は調査区外となり、約半分を調査した。主軸方向が4.5mを測る隅丸方形の竅穴住居址で、主軸方向はN24° Wを示す。壁高は最大19cmを測り、緩やかな壁面をなす。北壁の一部と北西コーナーを除き、壁下に周溝が巡る。床面は砂層ではっきりしないが炉址周辺は粘土を貼っている。主柱穴はP1・P2である。炉址はP1の東側に位置する炉緑石を有する土器埋設炉で、床面を58×50cmの楕円形に掘り凹め、南側に大型の壺の胴部の一部

を埋設する。また、炉跡石の東側で有肩扇状形石器が出土した。

出土遺物は少なく、弥生土器壺・壘片、打製石斧・横刃形石包丁・有肩扇状形石器がある。

出土遺物から弥生時代後期前半に位置づけられる。



挿図221 HSZ III 方形周溝墓3・7、土坑4

(3) 方形周溝墓

① 方形周溝墓3 (挿図221)

IIN4uを中心として検出した。北西側が湿地帯であったため、プランの検出ができず、3/4程を調査した。弥生時代後期の2号住居址を切り、弥生時代後期の方形周溝墓7の周溝と共有するが、切り合い関係は不明である。上層がかなり削平されている。12.6×14.6mを測る方形周溝墓で、主軸方向はN30°Wを示す。周溝の形態は長方形を呈し、南東側周溝が約4mとぎれ、土橋部と考えられる。北東側周溝も一部とぎれるが、上層の削平のためと考えられる。周溝は幅20~40cm・深さ13~5cmを測る。断面形は逆台形を呈し、緩やかに立ち上がる。主体部は周溝内中央部やや西側に位置し、2.4×1.7mを測る長方形を呈する。断面形は逆台形で緩やかに立ち上がる。底部に穴を確認したが、組合せ式箱形木棺の小口痕の可能性はある。

出土遺物は極めて少なく、弥生土器小破片のみである。

時期決定の根拠に欠けるが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期の可能性が強い。

② 方形周溝墓7 (挿図221)

IIN2pを中心として検出した。北西側が湿地帯であったため、プランの検出ができず、また、南西側が調査区外になるためごく一部を調査した。弥生時代後期の方形周溝墓3と周溝を共有するが、切り合い関係は不明である。規模・主軸方向・主体部等不明の方形周溝墓である。周溝は幅2~1m・深さ13~11cmを測る。断面形は逆台形を呈し、緩やかに立ち上がる。本址は方形周溝墓としたが、他の遺構の可能性もあることを指摘しておく。

出土遺物はない。

時期決定の根拠に欠けるが、周囲の遺構の状況から弥生時代後期の可能性が強い。

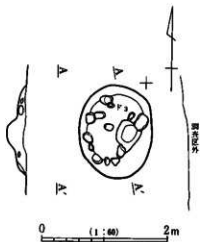
(4) 土坑・柱穴

① 土坑1 (挿図223)

IIN6pを中心として検出した。平面形がやや歪んだ瓢箪形を呈する1.3×0.8mの土坑である。断面形は逆台形で、深さは12cmを測る。出土遺物は弥生土器片、打製石斧がある。

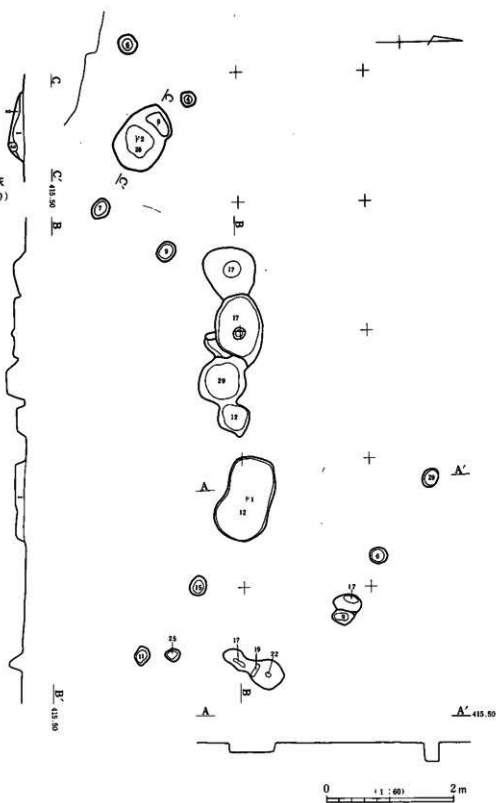
② 土坑2 (挿図223)

IIN3oを中心として検出した。平面形がやや歪んだ楕円形を呈する1×0.8mの土坑である。断面形は段を持ち、深さは25cmを測る。出土遺物はない。



挿図222 HSZ III 土坑3

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土 (青灰色粘質土混じり)
3. 黄褐色粘質土



挿図223 HSZ III 土坑1・2、柱穴

③ 土坑3 (挿図222)

II N8qを中心として検出した。平面形が楕円形を呈する1.4×1.1mの土坑である。断面形は逆台形で、一部掘り過ぎてしまった。深さは18cmを測る。出土遺物はない。

④ 土坑4 (挿図221)

II N3wを中心として検出した。平面形がやや歪んだ楕円形を呈する。2.5×1.4mの土坑である。断面径は逆台形で、深さは18cmを測る。本址は土坑としたが、ロームマウンドの可能性が高い。出土遺物はない。

4) 第IV地区

第II地区の東側及び第I地区の北東側にあたり遺構の存在が期待されたが、前述したように遺構は確認されなかった。

5) 第V地区

(1) 基本層序

水田耕土の下層が黄褐色土となり遺構検出面になる。

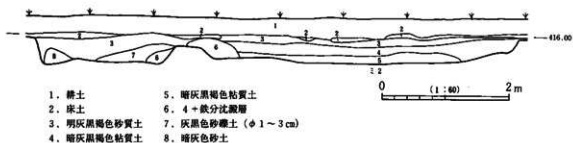
(2) 溝 址

① 溝址2 (挿図224・225)

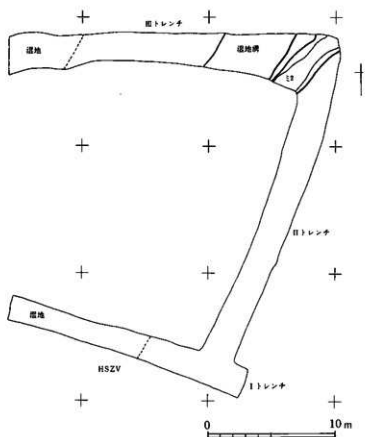
Ⅲトレンチの東側XN P15dを中心として検出した。調査延長は5.9mで、両側とも調査区外に続く。方向はN46° Eを示す。幅2.2~1.4m・深さ44~26cmを測り、断面形は逆台形である。周囲の状況及び土層の観察から自然流路の可能性が高い。

出土遺物は緑釉陶器陰刻花文碗、須恵器坏、山茶碗、常滑焼壺等がある。

時期決定の根拠に欠けるが、出土遺物より平安時代後期から中世に位置づけられる。



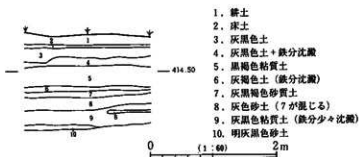
挿図224 HSZ V 溝址 2 土層図



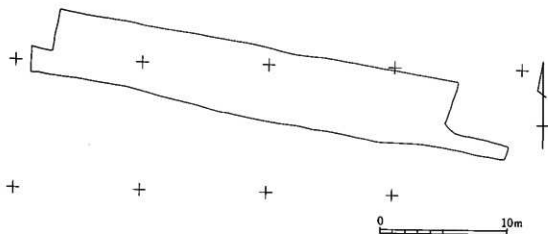
挿図225 HSZ V 全体図

6) 第VI地区

第II地区の北東側を調査した。湿地であったが、水田址等の遺構は確認できなかった。



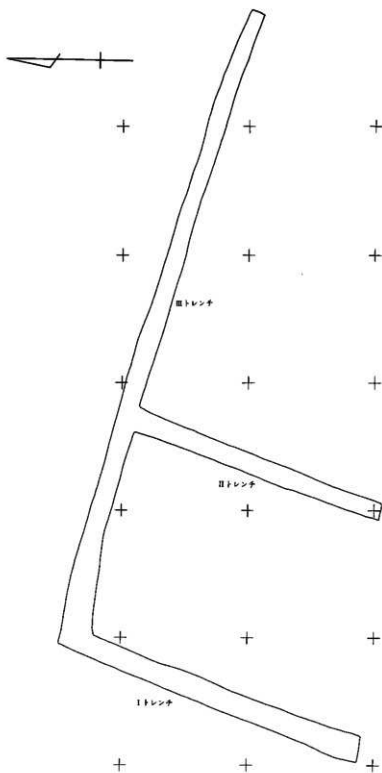
挿図226 HSZ VI 基本土層図



挿図227 HSZ VI 全体図

7) I・II・IIIトレンチ

第III地区の西側、本遺跡の中央部やや西側にトレンチを設定し調査したが、遺構・遺物は確認されなかった。よって拡張しての調査は不要と判断した。



挿図228 HSZ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチ

小 結

今次調査により得られた成果は前述のとおりである。しかし時間の制約や担当者の勉強不足等より遺物の資料化及び、各遺物・遺構の検討がなされておらず、誠に遺憾であるが、ここでは調査によって得られた問題点を提示し小結としたい。

集落構成について

今次調査は本遺跡の北東側の調査であり、遺跡の全容を把握するには至らなかったが、現段階での集落としての様相をまとめてみたいと思う。

竪穴住居址・方形周溝墓等の遺構が検出されたのは、第Ⅰ地区・Ⅱ地区南側・Ⅲ地区南東側である。これは第Ⅱ地区西側・第Ⅲ地区北西～東側は湿地帯となっており生産域であったためと思われる。とすれば第Ⅰ地区南側で確認された土器集中区やⅠ号住居址の分布状況等も勘案すれば、集落の主体は第Ⅰ・Ⅲ地区の南側である可能性が強い。

いずれにしても本遺跡の集落構成及び性格等を考察するに於いては、北側に隣接して弥生時代後期の竪穴住居址が132軒検出された丹保遺跡の存在は欠かせない（上郷町教育委員会1993）。逆に丹保遺跡を考える上に於いてもこの橋爪遺跡を考慮にいれる必要があると思われる。今後の課題としたい。

各遺構について

① 竪穴住居址

弥生時代後期の住居址が4軒検出された。出土遺物から大きく2時期に分類可能と思われる。形態は当地方に多く見られる典型的な竪穴住居址である。全般的に上層が削平を受けており、遺構から得られる情報量が少なかつたのは残念であった。また、時期の把握が十分にできていないので今後の検討課題である。

① 方形周溝墓出土土器棺墓

方形周溝墓周溝より4基の土器棺墓（壺棺3・甕棺1）が検出された。当地方では垣外遺跡方形周溝墓8の周溝から1基検出されている（上郷町教育委員会1989）。これらの土器棺について問題点となる項目を以下に掲げておく。

土器棺は弥生時代後期の土器を使用しているが、壺・甕と2種類がある。これらに遺骸を収納する際、形態としての大きな違いは口縁部径及び頸部径であると思われる。遺骸の状況にもよるが、口縁部から収納する場合、相対的に口縁部径及び頸部径が大きい甕のほうが収納が容易である。しかし、Ⅰ地区方形周溝墓1の壺棺2・垣外遺跡方形周溝墓8の壺棺のように焼成後、胴部に穿孔した場合は壺に於いても収納は能率的である。

土器棺の規格については、I地区方形周溝墓1の壺棺2は器高53cm・胴径34cm、同址壺棺1は器高47.5cm・胴径30cm、II地区方形周溝墓6の壺棺は器高40cm・胴径26cm、垣外遺跡方形周溝墓8の壺棺は器高49cm・胴径37cmとなっている。また、I地区方形周溝墓1の壺棺1は十分な復元ができていないので正確な規格は不明であるが、同址壺棺1に近い。よって器種の違いは除き、棺の規格として分類すれば、器高53～47.5cm・胴径37～30cmの垣外遺跡方形周溝墓8の壺棺に代表される大型の土器棺とII地区方形周溝墓6の壺棺に代表される土器棺の2種類がある。

II地区方形周溝墓6の壺棺には別個体の壺の胴部で口縁部に蓋を施してあったが、他の土器棺に於いては蓋がみられなかった。

十分な検討がないまま以上のように土器棺の分類を行ったが、所属時期等は十分に検討できていない。今後検討を進めて方形周溝墓との関係・埋葬方法（納棺される状態）・埋葬対象者等が究明される事を望む。

参考文献

- 上郷町教育委員会 1989 『ツルサシ・ミカド・増田・垣外遺跡』
- 上郷町教育委員会 1990 『柏原C・栗屋元・橋爪遺跡』
- 上郷町教育委員会 1993 『丹保遺跡』

3. 敷上遺跡

敷上遺跡では第Ⅰ地区と第Ⅰ～Ⅳトレンチの調査を実施した。調査面積と検出した遺構は下記のとおりである。

第Ⅰ地区	852㎡、	竪穴住居址2軒・土石流7本
第Ⅰトレンチ	73㎡、	調査遺構なし
第Ⅱトレンチ	46㎡、	調査遺構なし
第Ⅲトレンチ	61㎡、	調査遺構なし
第Ⅳトレンチ	111㎡、	調査遺構なし

1) 第Ⅰ地区

(1) 竪穴住居址

① 1号住居址 (榊図229)

IXN18mを中心として検出し、全体を調査した。3.5×3mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向は不明であるが、長軸方向はN49°Wを示す。壁高は19～2cmを測り、僅かに確認できるのみで南西壁はない。床面は、細線より北側は灰褐色粘質土に茶色土の粒子が混じる土で、たたき状に固いが、南側は暗灰色砂土で柔らかく不良で床面も下がっている。主柱穴・炉址とも不明である。本址は消失家屋であり、建築材と思われる炭化材が検出された。

出土遺物は土師器壺・甕がある。

出土遺物より古墳時代前期後半に位置づけられる。

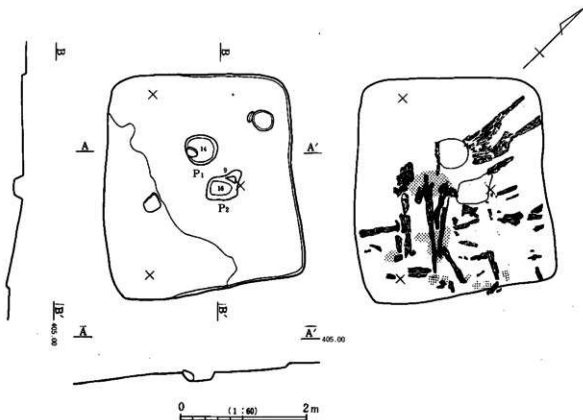
② 2号住居址 (榊図230・231)

IXN15Iを中心として検出し、全体を調査した。土石流に切られる。5.8×5.7mの隅丸方形の竪穴住居址で、主軸方向はN10°Eを示す。壁高は最大35cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。南壁・西壁下に周溝が巡る。床面ははっきりせず、炭化材を除去した段階を床面と把握した。主柱穴はP1～P4であり、径15～8cm・長さ18～4cmの丸材及び角材の炭化した柱材がそれぞれから出土した。P5は貯蔵穴と思われるが、蓋にしていたと思われる板材が炭化して穴の中に落ち込んで残存していた。また、P5の東西両側に粘土を確認した。炉址は、明確には断定できなかったが、北側の主柱穴の中間やや西よりの焼土がそれと思われるが、床の表面に薄く焼土があったのみで、床面を加工した痕跡は認められなかった。本址は消失家屋であり、建築材と思われる炭化材が良好な状態で検出された。なお、炭化材はバリノ・サーヴェイ株式会社に同定を依頼し、

付編として掲載してある。

出土遺物は覆土から床面にかけて大量に出土しており、土師器甕・高坏、編物石等がある。

出土遺物から古墳時代前期後半に位置づけられる。



挿図229 YBU I 1号住居址

(2) 土石流

① 土石流 (挿図233)

調査区西側ほぼ全面にわたり土石流を検出した。拳大から人頭大の礫群をグルーピングすると7箇所になる。個々の説明は割愛するが、これらの土石流は調査区北側に流れる土曾川の氾濫によるものと考えられ、古墳時代前期後半の遺物を大量に包含していた。また、2号住居址との切り合い関係を見ると土石流が切っており、古墳時代前期後半以降のものと考えられる。

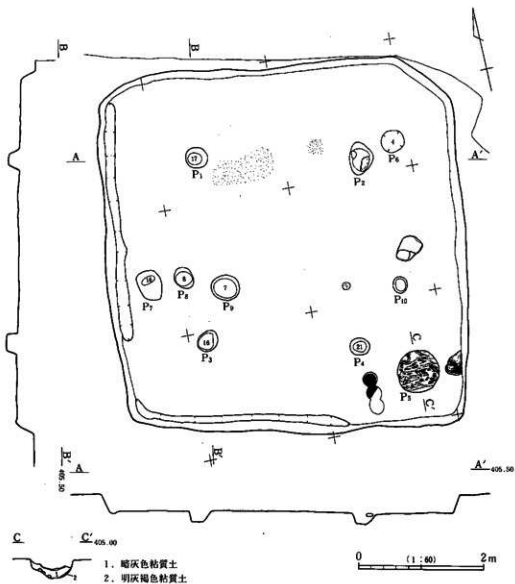
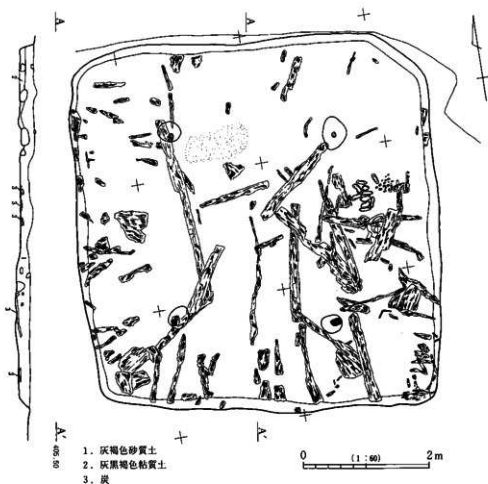


插图230 YBU I 2号住居址

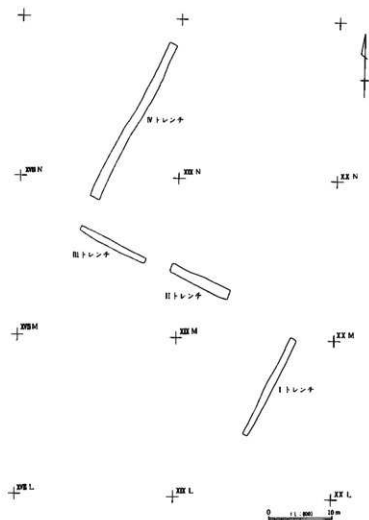


挿図231 YBU I 2号住居址炭化材分布

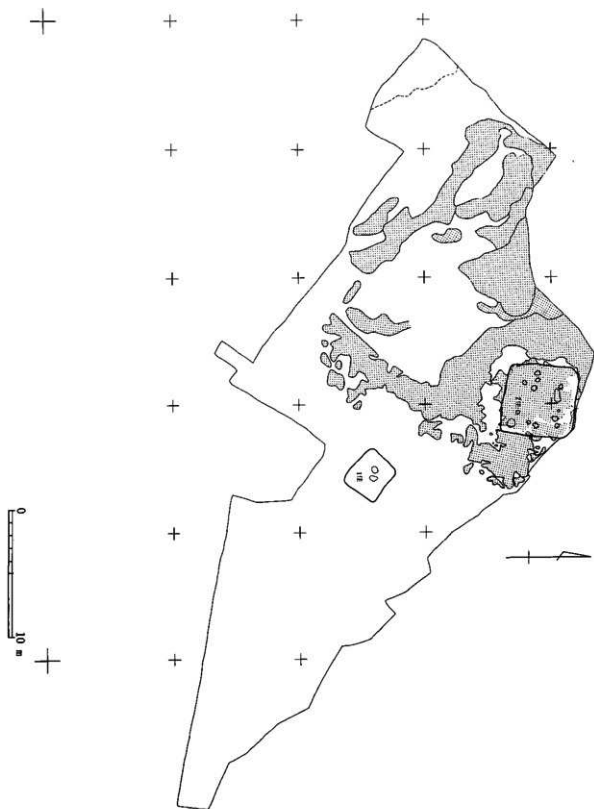
2) トレンチ

① I・II・III・IVトレンチ (挿図232)

第I地区南西側にI・II・III・Vトレンチを設定した。I・II・IIIトレンチは湿地で、重機にて2m以上掘削したが基盤面を確認できなかった。また湧水があり、調査不可能と判断し、拡張は行わなかった。IVトレンチは遺構・遺物とも確認されず、I・II・IIIトレンチと同様に拡張しなかった。



挿図232 YBU I・II・III・IVトレンチ



挿図233 YBU I 全体図

小 結

今次調査で確認された遺構は古墳時代前期後半の竪穴住居址2軒と土石流のみであったが、大きな成果が得られたと考えている。しかし十分な資料提供及び考察ができなかったことは誠に遺憾であるが、今後の課題を述べ、小結としたい。

2号住居址は消失家屋であり、炭化材の分布状況が極めて良好であった。主柱・梁・壁材等と推定される炭化材を同定分析したが、各種の材木を使用していたようである。今回は出土位置から建物部位を推定したが、今後の課題としては建物部位を明確にした上で検討する必要がある。また、土器・編物石等の遺物分布状況から住居内空間の役割がある程度考察できると思われるが、十分な資料観察と他の遺構との比較検討することによって明らかになってくると思われる。

土石流については砂礫に混じて古墳時代前期後半の遺物が大量に出土した点から、土石流の上流方向、つまり今次調査地区北側には同時期の集落の存在が推定される。

本遺跡は前述した「自然的環境」の項に詳しいが、天竜川の氾濫源を直下に望む低位段丘Ⅱに立地している。現在飯田市教育委員会で天竜川治水対策事業に伴う龍江地区の発掘調査を行っているが天竜川右岸・左岸の差はあるが、天竜川氾濫源を望む遺跡の状況が明らかになると思われるので、それらと総合して考察する必要があると思われる。

4. 長橋遺跡

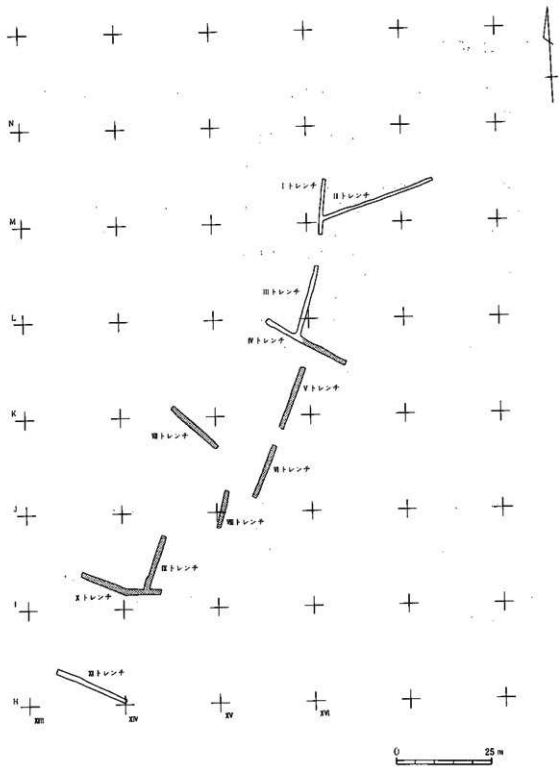
長橋遺跡では第Ⅰ～Ⅺトレンチの調査を実施した。調査面積と検出した遺構・遺物は下記のとおりである。

第Ⅰトレンチ	57㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅱトレンチ	111㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅲトレンチ	83㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅳトレンチ	111㎡	調査遺構なし、土師器坏・縄文時代打製石斧・弥生時代打製石斧
第Ⅴトレンチ	86㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅵトレンチ	73㎡	調査遺構なし、土師器坏
第Ⅶトレンチ	74㎡	調査遺構なし、青磁・中世陶器
第Ⅷトレンチ	46㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅸトレンチ	74㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅹトレンチ	113㎡	調査遺構なし、遺物なし
第Ⅺトレンチ	96㎡	調査遺構なし、遺物なし

小 結

本遺跡は調査の能率上、トレンチ調査で遺跡の状況を把握し、必要に応じて拡張する方法を採用したが、前述したような結果となり、遺跡の状況を把握する事ができた。

従来遺跡と把握されていた箇所はほとんどが湿地帯であったことが今回調査で明らかになった。トレンチ配置図に於ける網掛部分は湿地帯であり、また、湿地帯以外の箇所も遺構・遺物とも検出されなかったことと、地形的な観点より考察すれば、本遺跡の集落は調査地点より西側の箇所であろうと考えられる。今後の開発には注意すべき点であろう。



挿図234 NGH トレンチ配置図

付 編

1. 藪上遺跡から出土した炭化材の樹種

① 試 料

藪上遺跡では、古墳時代前期後半に属する焼失住居址（2号住居址）が検出された。2号住居址の床面には、焼失の際に不完全燃焼で炭化し、残った建築用材が多数検出されている（添付資料、藪上遺跡2号住居址同定用試料分布図、 $s=1/60$ ）。同定試料として選択した炭化材片は試料番号1～20の20点であるが、良好な保存状態のものは少なく検出時にみられた形状を保つものではなかった。炭化材がこわれてしまうため土壌と共に採取せざるを得ないものが多かったようで、送付された同定試料は土壌と混在しているものもあった。したがって、同定する試料の



藪上遺跡2号住居址同定用資料分布図

調整は、炭化材を土壌から分離しようとするので微細片になってしまい、困難であった。

試料番号6はひとつのポリ袋に2種類の材が入っていた。後述するが、2種類の樹種は針葉樹とクヌギ節であったので、6a・6bと試料番号を付して扱った。但し、添付資料の図中では試料番号6が2ヶ所にあり、その区別はつかない。

同定試料点数は、全21点となる。

② 方法

分離した試料は乾燥させた後、木口・柾目・板目の3断面を作製、走査型電子顕微鏡で観察・同定した。同時に材の顕微鏡写真も撮影した(図版1)。但し、試料番号6bは木口面ののみしか作製できなかった。

③ 結果

同定結果を検出遺構などと表1に記す。試料はいずれも小さく、保存状態もあまり良くなかった。そのため、確実な同定ができなかったものもあるが、12点が以下の3種類に分類された。針葉樹材は、同定する際最も重要な組織である分野壁孔が確認できなかったため同定できなかった。試料番号12の試料は、クヌギ節かコナラ節かの区別ができなかったため、コナラ亜属とした。

同定した試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxaの科名・学名・和名およびその配列は基本的に「日本の野生植物 木本I・II」(1989)にしたがった。また、一般的性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」(1979～1982)も参考にした。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerrissp.*) ブナ科環孔材で孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。放射組織は、単列のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。試料が小さいため、柾目・板目の切片を作成することができなかった。したがって図版には木口面ののみ掲載した。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州・琉球に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに、器具・杭材・楳木などの用途が知られる。・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinussp.*) ブナ科環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状～網目状となる。放

射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）といくつかの変種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・クリ（*Castanea crenata*）ブナ科

環孔材で孔部は1～4列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

3と16の試料は同定に充分な大きさが得られず、確実にクリと同定することができなかった。そのため、クリ類似種とした。1と19の試料もクリとしてあるが、試料が小さいためコナラ節である可能性もある。

クリは北海道南部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木や海苔粗朶などの用途が知られている。

④ まとめ

今回の結果は、古墳時代前期後半頃山地に生育していた樹木に由来するものと思うが、多くの樹木の内クリ・クヌギ節・コナラ節、針葉樹などを選択的に利用したか否かは不明である。主柱穴の柱痕とされる4点の試料は、クリ・クリ類似種・広葉樹・コナラ節と一見バラバラのようにも見えるが、クリとコナラ節の可能性もある。また柱痕にかなり近い位置に検出された試料番号19・16などはクリであり、柱痕との関係が深いと思われる。

参考文献

平井 信二 1979～1982 『木の事典』 第1巻～第17巻 かなえ書房。

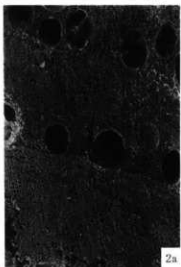
佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 編 1989 『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』 平凡社

表1 藪上遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構など	種名
1	YBU P1	クリ
2	P2	広葉樹（環孔材）
3	P3	クリ類似種
4	P4	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
5 a	6	針葉樹
6 a	9	針葉樹
6 a	9	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
7	20	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
8	22	不明
9	23	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
10	27	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
11	33	針葉樹
12	36	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
13	37	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
14	41	針葉樹
15	55	針葉樹
16	57	クリ類似種
17	58	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種
18	79	針葉樹（ヒノキ型壁孔を持つ）
19	84	クリ
20	90	針葉樹

図版の説明

写真番号	種名	資料番号	断面	倍率
1	コナラ属コナラ亜属クスギ節の一種	No.6	小口	×50
2 a	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	No.19	小口	×35
2 b	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	No.19	柀目	×70
2 c	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	No.19	柀目	×70
3 a	クリ	No.4	小口	×35
3 b	クリ	No.4	柀目	×70
3 c	クリ	No.4	柀目	×70



報告書抄録

ふりがな	どうがいと はしづめ やぶうえ ながはし						
書名	堂垣外・橋爪・敷上・長橋遺跡						
副書名	農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	山下誠一・吉川金利						
編集機関	飯田市教育委員会						
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 Ⅱ 0265-53-4545						
発行年月日	西暦1994年3月18日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堂垣外	長野県 飯田市 上郷飯沼		137度 51分 30秒	35度 31分 10秒	19891005 ～ 19920708	14,827	農村基盤総合整備事業（集落型）丹保地区工事に伴う事前調査
橋爪	長野県 飯田市 上郷飯沼		137度 51分 30秒	35度 30分 60秒	19900817 ～ 19910430	3,629	同上
敷上	長野県 飯田市 上郷飯沼		137度 51分 40秒	35度 30分 60秒	19891009 ～ 19891225	1,143	同上
長橋	長野県 飯田市 上郷飯沼		137度 51分 30秒	35度 30分 50秒	19920423 ～ 19920426	942	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
堂垣外	集落跡 墓	弥生時代	竪穴住居址	1軒	弥生土器	弥生時代から中世までの集落と古墳時代の用水路を確認した。特に、奈良時代から平安時代の集落が特徴的で、官衛的色彩の強い遺構・遺物があり、郡部周辺の有力集落である。 近世以降の遺構もあった。	
			溝址	7本	石器		
			土器棺墓	1基			
		古墳時代	竪穴住居址	15軒	土師器・須恵器		
			溝址	12本	金環・銀環・玉		
橋爪	集落跡 墓	奈良・平安時代	竪穴住居址	48軒	土師器・須恵器	集落と墓域を調査 方形周溝墓から壺棺・甕棺を発見	
			掘立柱建物址	16棟	灰釉陶器・陶硯		
			溝址	8本	鉄器・帯金具		
		中世	掘立柱建物址	3棟	土師器・陶磁器		
			小竪穴	1基	鉄器		
敷上	集落跡	近世以降	竪穴状遺構	2基	陶磁器	土石流の下から焼失住居発見	
			溝址	6本			
			粘土採取坑				
敷上	集落跡	弥生時代	竪穴住居址	5軒	弥生土器	土石流の下から焼失住居発見	
			方形周溝墓	7基	石器 土師器・陶磁器		

堂 垣 外 遺 跡
橋 爪 遺 跡
藪 上 遺 跡
長 橋 遺 跡

— 農村基盤総合整備事業(集落型)丹保地区工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

〈遺 構 編〉

発 行 / 1994年 3 月

編集・発行 / 飯田市教育委員会
長野県飯田市上郷飯沼3145

印 刷 / 飯田共同印刷株式会社
長野県飯田市上郷黒田248-1
TEL.0265-23-3889
